有馬西田遺跡

（主）高崎渋川線バイパス（３期工区）社会資本総合整備
（広域連携・新潟長野）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2017

群馬県渋川土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

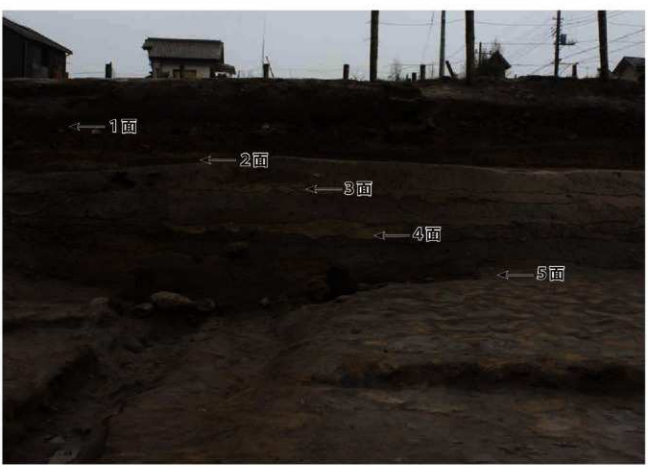
有馬西田遺跡

（主）高崎渋川線バイパス（３期工区）社会資本総合整備
（広域連携・新潟長野）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2017

群馬県渋川土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

1　有馬西田遺跡調査区全景（２面調査時、南から）



2　有馬西田遺跡土層堆積状況（１区中段、西から）

序

本書は、渋川市有馬に所在し、主要地方道高崎渋川線バイパス整備事業に伴い発掘調査が実施された有馬西田遺跡の調査報告書です。本遺跡の調査は、群馬県渋川土木事務所からの委託を受け、公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が平成28年1月から3月にかけて実施したものです。

今回の発掘調査では、古墳時代から中・近世にいたる間の５面の水田や多くの溝が検出されました。それらは度重なる洪水被害と、その被害から立ち上がり、復旧・復興を成しとげた有馬地区の人々の歴史があったことを示すものです。

これらの調査成果は、有馬遺跡や有馬廃寺など著名な遺跡が存在することで知られていた渋川市有馬地区の歴史に新たな資料を提供することとなるものと考えられます。そして、この報告書が、群馬県の歴史研究をはじめ、地域の資料として学校教育、郷土学習に役立てていただけるものと確信いたしております。

最後になりましたが発掘調査から報告書作成にいたるまで、群馬県県土整備部および渋川土木事務所、群馬県教育委員会文化財保護課、渋川市教育委員会および地元関係者の皆様からは種々のご指導、ご協力を賜りました。今回報告書を上梓するにあたり、これらの関係者の皆様に心より感謝の意を表し、序といたします。

平成29年12月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長　　中野三智男

例　言

1．本書は、(主)高崎渋川線バイパス(３期工区)社会資本総合整備(広域連携・新潟長野)事業に伴う、有馬西田遺跡の発掘調査報告書である。

2．有馬西田遺跡は群馬県渋川市有馬1543・1544-1・2、1559、1561-1・2・3、1565-1・2・3・4番地に所在する。

3．事業主体　　群馬県渋川土木事務所

4．調査主体　　公益財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団

5．整理主体　　公益財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団

6．発掘調査体制と期間は次のとおりである。

調査担当　　松村和男　立野喜紀

遺跡掘削請負工事　株式会社　歴史の杜

地上測量および空中写真撮影　技研コンサル株式会社

履行期間　　平成27年12月１日～平成28年３月31日

調査期間　　平成28年１月１日～平成28年３月31日

調査面積　　2,767㎡

7．整理事業の体制と期間は次のとおりである。

整理担当　　神谷佳明

履行期間　　平成28年10月１日～平成29年３月31日

整理期間　　平成28年10月１日～平成29年３月31日

8．本書作成関係者

編集・本文執筆　　神谷佳明・友廣哲也・徳江秀夫(第１章～第３章)、徳江秀夫(第５章)

遺物観察表　　神谷佳明・関邦一

デジタル編集　　齊田智彦

文責は以下のとおりである。

遺構写真　　発掘調査担当者

遺物写真　　友廣哲也・関邦一

9．テフラ分析　　(株)火山灰考古学研究所(第４章)

10．発掘調査及び報告書の作成にあたり群馬県教育委員会文化財保護課、群馬県渋川市教育委員会文化財保護課のご協力を得た。

11．発掘調査の記録資料と出土遺物は、群馬県埋蔵文化財調査センターで保管している。

凡　　例

1．本書で使用した遺構平面図の座標は、全て世界測地系(日本測地系2000平面直角座標Ⅸ系)を用いている。挿図中に使用した方位は、座標北を表している。

2．遺構平面図や遺構断面図に示した数値は標高であり、単位はメートルである。

3．遺構の主軸方位・走向は、長軸方向で北から東西90°以内を主軸とした。表記は北を基準とし、東に傾いた場合N-1°-Eとした。遺構の面積は、下端を計測した。

4．遺構平面図、遺物実測図の縮尺は各図にそれぞれ示した。

5．土層断面の色調は、農林水産省水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所票監修『新版標準土色帖1988版』に基づいている。

6．遺構図のトーンの凡例　攪乱　　小礫範囲

遺物図のトーンの凡例　漆と考えられる付着物

7．遺物観察表の記載方法は以下のとおりである。

・計測値は、口:口径、底:底径、台:高台径、高:器高、長:長さ、厚:厚さ(以上単位はcm)、重:重量(単位はｇ)。

・胎土観察における砂粒の表現は、0.2mm以下を細砂粒、0.2～2mmを粗砂粒、2mm以下を小礫とした。

色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖1988年版』に基づいている

8．降下火山灰の名称と年代は以下の通りである。

As-A：浅間山Aテフラ(天明三(1783)年)、As-B：浅間山Ｂテフラ(天仁元(1108)年)、As-Kk：浅間粕川テフラ(12世紀前半か)、Hr-FP：榛名山二ツ岳軽石(6世紀中葉)、Hr-FA：榛名山二ツ岳火山灰(5世紀末～6世紀初頭)、As-C：浅間山Cテフラ(3世紀末～4世紀初頭)

9．本書で記載した地図は、下記のものを使用した。

第１図　国土地理院　地勢図1：200,000「宇都宮」、「長野」

第２図　国土地理院　地形図1：25,000「金井」、「鯉沢」、「伊香保」、「渋川」を使用

第３図　渋川市都市計画基本図　1番1：2,500を渋川市の許可を得て使用

第10図　『群馬県史』通史編1　付図2「群馬県内主要地域の地形分類」を修正して使用

第11図　国土地理院　地形図1：25,000「伊香保」、「渋川」を使用

第12図　国土地理院　地形図1：25,000「金井」、「鯉沢」、「伊香保」、「渋川」

第49図　群馬郡古巻村全図を修正して使用

第50図　国土地理院　地形図1：25,000「伊香保」、「渋川」を使用

目　次

口絵
序
例言
凡例
目次
挿図目次
表目次
文中写真目次
写真目次

第１章　発掘調査の経過・・・1
　第１節　調査に至る経緯・・1
　第２節　調査の経過・・2
　第３節　調査の方法と調査面の設定・・3
　第４節　土層の堆積状況・・・4

第２章　有馬西田遺跡周辺の立地・・・10
　第１節　遺跡の地勢的環境・・10
　第２節　周辺の遺跡と歴史環境・・・11

第３章　検出された遺構・・・18
　第１節　遺跡の概要・・18
　第２節　１面・・19
　第３節　２面・・20
　第４節　３面・・21
　第５節　４面・・21
　第６節　５面・・22
　第７節　６面・・23

　遺物観察表・・54

第４章　自然科学分析・・・55

第５章　調査のまとめ・・・62

写真図版
抄録

挿図目次

第１図　遺跡の位置（１）……… 1
第２図　遺跡の位置（２）……… 2
第３図　遺跡調査の範囲 ……… 3
第４図　調査区域全体図 ……… 4
第５図　土層調査地点の位置 ……… 5
第６図　調査地点１～５土層断面図 ……… 6
第７図　調査地点16～20土層断面図 ……… 7
第８図　調査地点９～14土層断面図 ……… 8
第９図　調査地点６～８・15土層断面図 ……… 9
第10図　遺跡周辺の地形 ……… 10
第11図　周辺の遺跡（１）……… 12
第12図　周辺の遺跡（２）……… 13
第13図　１面全体図 ……… 25
第14図　１区１面１号土坑 ……… 26
第15図　１区１面１号・２号井戸 ……… 26
第16図　１区１面１号溝 ……… 27
第17図　１区１面２号・３号・７号溝 ……… 28
第18図　１区１面４・６号溝 ……… 29
第19図　１区１面５号溝 ……… 30
第20図　２区１面８～13号溝 ……… 31
第21図　２面全体図 ……… 32
第22図　１区２面14号溝 ……… 33
第23図　１区２面16号溝（１）……… 34
第24図　１区２面16号溝（２）……… 35
第25図　２区２面15・27溝 ……… 36
第26図　２面水田 ……… 37
第27図　２面水田部分図 ……… 38
第28図　３面全体図 ……… 39
第29図　１区３面17溝・水田 ……… 40
第30図　２面水田部分図 ……… 41
第31図　３面水田部分図 ……… 41
第32図　４面水田部分図 ……… 41
第33図　４面全体図 ……… 42
第34図　２区４面19号・20号溝・水田 ……… 43
第35図　５面全体図 ……… 44
第36図　１区・２区５面18溝・１区５面24号溝・１区５面橋状遺構 ……… 45
第37図　１区５面21～23号溝 ……… 46
第38図　５面水田 ……… 47
第39図　５面水田部分図 ……… 48
第40図　６面全体図 ……… 49
第41図　１区６面25・26号溝 ……… 50
第42図　６面水田 ……… 51
第43図　１面・２面・５面・６面出土遺物 ……… 52
第44図　５面出土木器 ……… 53
第45図　１区上段試掘トレンチの土層柱状図 ……… 59
第46図　１区中段西壁の土層柱状図 ……… 59
第47図　１区下段東壁の土層柱状図 ……… 59
第48図　１区上段・中段・下段試料採集地点 ……… 60
第49図　有馬西田遺跡の奈良・平安時代遺跡分布 ……… 63
第50図　有馬西田遺跡周辺の土地区画 ……… 64

表目次

第１表　周辺遺跡一覧表 ……… 14～17
第２表　溝計測表 ……… 24
第３表　井戸計測表 ……… 24
第４表　土坑計測表 ……… 24
第５表　遺物観察表 ……… 54
第６表　有馬西田遺跡におけるテフラ検出分析結果 ……… 58
第７表　屈折率測定結果 ……… 58

文中写真目次

写真１　１区下段東壁・試料３（As-B）……… 61
写真２　１区下段東壁・試料５（As-B）……… 61
写真３　１区下段東壁・試料８ ……… 61

写真目次

PL. 1　1．1区1面全景(上段)(北から)
2．1区1面全景(上段)(南東から)
PL. 2　1．1区1面全景(中段)(北から)
2．1区1面全景(中段)(南から)
PL. 3　1．1区上層断面(上段)(西から)
2．1区1面上段木材検出状態(北東から)
3．1区1面上段木材検出状態(北東から)
4．1区1面1号暗渠下面検出状態(北から)
5．1区1面遺物出土状態(中段)(北から)
6．1区1面遺物出土状態(中段)(北から)
7．2区5区画1面遺物出土状態(北西から)
8．1区1面1号土坑全景(南から)
PL. 4　1．1区1面1号土坑上層断面A-A'(南から)
2．1区1面1号井戸全景(南西から)
3．1区1面1号井戸全景(北から)
4．1区1面1号井戸掘方全景(南西から)
5．1区1面1号井戸上層断面A-A'(南から)
6．1区1面2号井戸全景(南西から)
7．1区1面2号井戸全景(南東から)
8．1区1面2号井戸上層断面A-A'(北東から)
PL. 5　1．1区1面2号井戸上層断面A-A'(南西から)
2．1区1面1号溝全景(南から)
3．1区1面1号溝全景(北から)
4．1区1面1号溝(南から)
5．1区1面1号溝(南から)
6．1区1面1号溝(北から)
7．1区1面1号溝掘方全景(南から)
8．1区1面1号溝上層断面A-A'(南から)
PL. 6　1．1区1面1号溝上層断面B-B'(南から)
2．1区1面1号溝上層断面C-C'(南から)
3．1区1面2号溝全景(北東から)
4．1区1面2号溝(南西から)
5．1区1面2号溝(南西から)
6．1区1面2号溝(北から)
7．1区1面2号溝(北東から)
8．1区1面2号溝(北東から)
PL. 7　1．1区1面2号溝(南西から)
2．1区1面2号溝上層断面A-A'(南から)
3．1区1面2号溝遺物出土状態(北東から)
4．1区1面2号溝遺物出土状態(北東から)
5．1区1面2号溝遺物出土状態(北東から)
6．1区1面2号溝遺物出土状態(南西から)
7．1区1面2号溝鉄片出土状態(南東から)
8．1区1面3号溝全景(南東から)
PL. 8　1．1区1面3号溝全景(南東から)
2．1区1面3号溝上層断面A-A'(南東から)
3．1区1面4号溝全景(南から)
4．1区1面4号溝上層断面A-A'(南から)
5．1区1面5号溝全景(北東から)
6．1区1面5号溝上層断面A-A'(南西から)
7．1区1面5号溝上層断面B-B'(南西から)
PL. 9　1．1区1面5号溝上層断面C-C'(西から)
2．1区1面5号溝上層断面D-D'(南西から)
3．1区1面5号溝上層断面E-E'(南西から)
4．1区1面5号溝遺物出土状態(南から)
5．1区1面6号溝全景(南から)
6．1区1面6号溝上層断面A-A'(南から)
7．1区1面6号溝上層断面B-B'(南から)
8．1区1面7号溝全景(南東から)
PL. 10　1．1区1面7号溝掘方全景(南西から)
2．2区1区画1面8号・9号溝全景(北西から)
3．2区1区画1面8号・9号溝全景(北西から)
4．2区1区画1面8号溝上層断面A-A'(北西から)
5．2区1区画1面8号溝(南東から)
6．2区1区画1面8号溝(南東から)
7．2区1区画1面8号溝(南東から)
PL. 11　1．2区1区画1面9号溝上層断面A-A'(北西から)
PL. 11　2．2区1区画1面10号～13号溝全景(北西から)
3．2区1区画1面10号～13号溝全景(南西から)
4．2区1区画1面10号溝上層断面A-A'(北西から)
5．2区1区画1面11号溝上層断面A-A'(北西から)
6．2区1区画1面12号溝上層断面A-A'(北西から)
7．2区1区画1面13号溝上層断面A-A'(南東から)
8．2区1区画1面13号溝上層断面A-A'(南東から)
PL. 12　1．1区・2区2面全景(南から)
2．1区2面全景(上段)(北から)
PL. 13　1．1区2面全景(中段)(北から)
2．2区2面全景(南から)
PL. 14　1．2区1区画2面全景(北から)
2．2区2区画2面全景(北から)
3．2区3区画2面全景(北から)
4．2区4区画2面全景(北から)
5．2区5区画2面全景(南から)
6．1区2面遺物出土状態(上段)(北東から)
7．1区2面遺物出土状態(上段)(南東から)
8．1区2面遺物出土状態(上段)(東から)
PL. 15　1．2区1区画2面遺物出土状態(西から)
2．2区1区画2面遺物出土状態(西から)
3．1区2面14号溝全景(南東から)
4．1区2面14号溝上層断面A-A'(南東から)
5．1区調査風景(南から)
PL. 16　1．2区2区画2面15号溝全景(西から)
2．2区2区画2面15号溝上層断面A-A'(西から)
3．1区2面16号溝全景(北東から)
4．1区2面16号溝遺物出土状態(北西から)
5．1区3面全景(上段)(北から)
PL. 17　1．1区3面全景(上段)(西から)
2．1区3面下段確認状態(東から)
3．1区3面検出状態(上段)(西から)
4．1区3面遺物出土状態(上段)(北西から)
5．1区3面17号溝全景(北東から)
6．2区2区画3面全景(南から)
7．2区4区画3面全景(北から)
8．2区1区画4面全景(北から)
PL. 18　1．2区1区画4面調査風景(北西から)
2．2区2区画4面全景(北から)
3．2区5区画4面19号・20号溝全景(北から)
4．2区5区画20号溝上層断面A-A'(北から)
5．1区・2区5面全景(南から)
PL. 19　1．1区5面全景(北から)
2．1区5面全景(上段)(南から)
PL. 20　1．1区5面水田(上段)(南から)
2．1区5面水田(上段)(南から)
PL. 21　1．1区5面全景(中段)(北から)
2．1区5面足跡全景(上段)(東から)
3．1区5面足跡全景(上段)(東から)
4．1区5面遺物出土状態(上段)(北から)
5．1区5面木材検出状態(中段)(南西から)
6．2区1区画5面全景(北から)
7．2区1区画5面遺物出土状態(西から)
8．2区2区画5面全景(北から)
PL. 22　1．2区2区画5面全景(南から)
2．2区4区画5面全景(北から)
3．2区4区画5面全景(南から)
4．1区5面18号・21号～23号溝全景(南東から)
5．1区5面18号溝上層断面A-A'(北西から)
6．1区5面18号溝上層断面A-A'(北西から)
7．1区5面18号溝上層断面A-A'(北西から)
8．1区5面18号溝、橋状遺構、24号溝上層断面A-A'(西から)
PL. 23　1．1区5面18号溝、橋状遺構上層断面A-A'(西から)
2．1区5面18号溝、橋状遺構、24号溝上層断面A-A'(西から)
3．1区5面18号溝石列、橋状遺構上層断面A-A'(西から)
4．1区5面18号溝、橋状遺構掘方全景(西から)
5．1区5面18号溝、橋状遺構北側掘方(西から)

PL. 23　6．1区5面18号溝，橋状遺構南側掘方(西から)
　　7．1区5面橋状遺構検出状態(南西から)
　　8．1区5面橋状遺構検出状態(南東から)
PL. 24　1．1区5面橋状遺構木材検出状態(北西から)
　　2．1区5面橋状遺構木材検出状態(北西から)
　　3．1区5面橋状遺構木材検出状態(南東から)
　　4．1区5面橋状遺構木材検出状態(南東から)
　　5．1区5面橋状遺構木材検出状態(北西から)
　　6．2区4区画5面18号溝全景(西から)
　　7．2区4区画5面18号溝遺物出土状態(北西から)
　　8．2区4区画5面18号溝遺物出土状態(北西から)
PL. 25　1．2区4区画5面18号溝遺物出土状態(西から)
　　2．2区4区画5面18号溝遺物出土状態(西から)
　　3．2区4区画5面18号溝遺物出土状態(西から)
　　4．1区5面24号溝遺物出土状態(北西から)
　　5．1区5面24号溝遺物出土状態(北西から)
　　6．1区5面24号溝遺物出土状態(南東から)
　　7．1区5面24号溝木材検出状態(北西から)
　　8．1区5面24号溝木材検出状態(南東から)
PL. 26　1．1区5面21号溝全景(南から)
　　2．1区5面22号溝全景(南から)
　　3．1区5面水田全景(東から)
　　4．1区5面水田全景(東から)
　　5．1区5面水田水口検出状態(北から)
　　6．1区5面水田水口検出状態(北から)
　　7．1区5面水田足跡検出状態(東から)
　　8．1区5面水田足跡検出状態(東から)
PL. 27　1．1区5面水田足跡検出状態(東から)
　　2．1区5面水田足跡検出状態(東から)
　　3．1区6面全景(上段)（北東から）
　　4．1区6面遺物出土状態(上段)（東から）
　　5．1区6面水田足跡検出状況(南東から)
PL. 28　1．1区6面25号溝全景(東から)
　　2．1区6面25号溝土層断面(南東から)
　　3．1区6面26号溝全景(北西から)
　　4．1区6面26号溝土層断面A-A'（北東から）
　　5．2区2区画6面全景(北から)
PL. 29　1．1区トレンチ水田面検出西壁土層断面(東から)
　　2．1区南壁土層断面(北から)
　　3．1区東壁土層断面(西から)
　　4．1区Br-FA確認土層断面(中段)（西から）
　　5．1区Br-FP確認土層断面(中段)（西から）
　　6．1区Br-FP・FA検出状況(中段)（西から）
　　7．1区Br-FP・FA検出状況(下段)（西から）
　　8．2区5区画調査区5土層断面(北から)
PL. 30　1．1区調査地点10土層断面(西から)
　　2．1区調査地点15土層断面(南から)
　　3．1区最終確認(中段)（西から）
　　4．2区4区画調査地点17土層断面(東から)
　　5．2区2区画調査地点19土層断面(東から)
　　6．2区1区画調査地点20土層断面(東から)
　　7．2区1区画トレンチ全景(北から)
　　8．2区2区画調査風景(南から)
PL. 31　1面・2面・5面・6面出土遺物

第１章　発掘調査の経過

第１節　調査に至る経緯

主要地方道高崎渋川線は、高崎市と渋川市を最短で結び、県央部を縦断する重要な道路として機能している。

しかし、市街地を走り、幅員が狭い、さらに右折車線があまりないなどの要因から、朝夕の通勤時間帯をはじめ、慢性的な交通渋滞を生じていた。

この解決策として計画されたのが高崎市浜尻町から渋川市街地石原を繋ぐ全長15.1㎞のバイパスの整備事業である。バイパス整備は分割して進められ、１期工区工事計画から２期工区工事計画が設定され、現在２期工事までが終了している。

１期工区工事計画は、高崎市小八木町から高崎市金古町までの6.2㎞で、平成14年３月に開通している。１期工事計画では、小八木志志貝戸遺跡、冷水村東遺跡等11ヶ所に及ぶ埋蔵文化財発掘調査が実施され、その成果については報告書にまとめられ、すでに刊行済みである。

これに続く２期工区は、高崎市金古町から吉岡町小倉の5.4㎞で、平成24年３月に開通をした。２期工区工事計画では、榛東村長谷津遺跡、吉岡町十日市遺跡等６ヶ所で遺跡が確認され、発掘調査が実施された。その成果をまとめた報告書もすでに刊行されている。

これに引き続き、３期工区工事計画は、平成14年から開始され、小倉から渋川市JR渋川駅の南西部までの2.6㎞が開始された。３期工区の工事計画は平成30年３月の終了を目指し、現在工事中である。３期工区工事計画においても、埋蔵文化財包蔵地を通過することが判明したため、埋蔵文化財の保存措置に向けての行政的な準備が進められることとなった。

有馬西田遺跡については、小倉、石原間の３期工区工事計画を前に、平成26年12月に群馬県県土整備部渋川土木事務所からの依頼を受け、発掘調査の必要性とその範囲の確定をするための試掘調査が群馬県教育委員会文化財保護課によって実施された。その結果、有馬西田遺跡から水田遺構の畔や遺物が検出された。これらの試掘調査結果をもとに、埋蔵文化財の保存措置が必要な旨を、群馬県教育委員会文化財保護課から渋川土木事務所へ通知するとともに、地元の渋川市教育委員会と保存措置についての協議を行った。埋蔵文化財と開発事業との調整を図るために記録保存としての発掘調査を行うことが決定された。

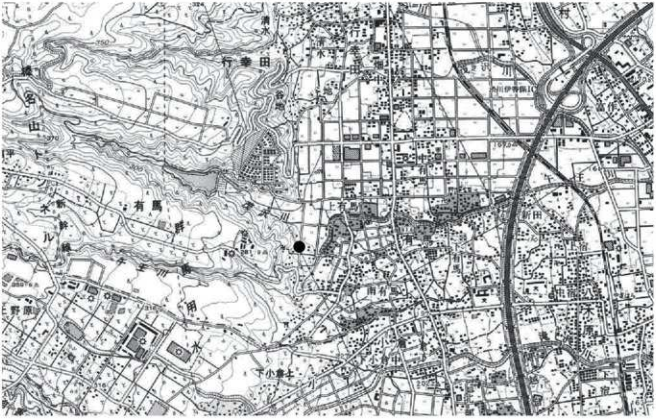
第１図　遺跡位置（１）
（国土地理院1/200,000地勢図「宇都宮」平成23年６月「長野」平成24年５月発行を使用）

第２節　調査の経過

有馬西田遺跡の発掘調査は、群馬県県土整備部渋川土木事務所からの委託を受け、平成28年１月１日から平成28年３月31日までの３ヶ月間、発掘調査対象地2,767㎡について調査を行った。調査成果については平成28年10月から平成29年３月までの６ヶ月間にわたり整理作業を実施し、報告を本書としてまとめた。

平成28年度

１月５日　調査事務所設営。
　　器材搬入準備。
　　調査担当者2名で調査開始。
　　１区表土掘削開始。
６日　キャリーダンプ搬入。遺構確認。作業開始。
12日　１区土坑、溝確認。
21日　２区１区画表土掘削。遺構検出作業。
27日　１区井戸斯面測量。溝全景写真撮影。
28日　遺構平面測量。溝全景写真撮影。
２月１日　井戸掘り下げ作業。遺構断面測量。土層断面写真撮影。
３日　１区浅間Ｂ軽石下遺構精査。１面全景写真撮影。
12日　１区上段遺構検出作業。１区上段２面遺物出土状況撮影。遺構平面測量。
16日　１区上・中段２区２面遺構精査。
23日　１区３面遺構検出作業。遺物出土状況写真撮影。
３月１日　１区上段５面遺構精査。２区２面下掘削作業。
４日　２区４面精査。２区４・５面全景写真撮影。
15日　２区５面精査。
18日　１・２区全景写真撮影。
22日　現場調査作業終了。現場撤収準備。
31日　調査事務所撤収。



第２図　遺跡の位置（２）

第３節　調査の方法と調査面の設定

調査区の設定は国家座標区系に合わせ、調査区内に１辺５ｍのグリッドを設定した。グリッド表記については国家座標値の下３桁を用いた。調査区割は南北方向の現道をはさんだ西側を１区とし、１区は南が高く３段になるため、南から上段・中段・下段とした。東側の２区は北から１区画～５区画に区画分けをした。遺構番号は調査区全体を通して番号を付した。

発掘調査に伴う掘削作業はバックホーで行った。表土を除去した後は、発掘作業員による鋤簾で精査を行い、遺構掘削は移植ゴテを用いて調査を行った。

遺跡内で使われる第１～６面とは有馬西田遺跡内での層位呼称で本遺跡内で確認された軽石泥流下面の層位である。以下、遺構確認面の層序を示す。

第１面　浅間Ｂ軽石層下面

天仁元(1108)年に噴火し、降下した浅間Ｂ軽石(以下、As-B)層下である。As-Bの堆積は、１区ではやや安定しているが、２区ではブロック状に確認された。

第２面　第１泥流層下面(平安時代)

第１泥流層の堆積は、遺跡全体で薄い地点で(２区北部) 30cm、厚い地点で１ｍを測る。泥流層下から水田遺構が確認できた。１～２区のほぼ全面に東西方向の畔が確認されている。西から東へ、そして、南から北に傾斜する棚田状になっている。水田面上から９世紀後半から10世紀にかかる完形の須恵器椀が出土している。

第３面　第２泥流層下面(奈良・平安時代)

淡い灰黄褐色の砂礫で薄く覆われている。水田耕作土と畔が部分的に確認されている。２面で確認された水田耕作土に比べ、黒味が強い。水田耕作土中より土師器片が出土している。

第３図　遺跡調査の範囲

第４面　第３泥流層下面(奈良時代)

２区内で東西方向、南北方向の畔の一部が確認されている。水田耕作土などの一部が確認され、厚い地点では数cmの灰黄褐色の砂礫が堆積していた。耕作土は第３面の耕作土より黒味が強い。

第５面　第４泥流層下面(古墳～奈良時代)

１区の一部と２区全体で等高線に沿って東西の畔が確認された。１区では畔の脇に水路が確認された。水田耕作土は第２～第５面で検出された水田耕作土の中で一番黒味が強い。水田を覆う灰黄褐色の砂礫の厚さは約10～20cmを測る。１区で溝４条が確認され、１条は２区に延びる。１区では橋脚に使用したと考えられる杭が打ち込まれ、その脇から用途不明の削り込んだ木材が確認されている。木器はすべて鉄状工具の削り痕が認められる。

最終第６面でローム層を確認するためにさらに掘り下げた。しかし、洪水泥流層が厚く、ローム層は確認できず、旧石器の調査はできなかった。

遺構の計測、測量は原則として平面、断面測量においては１/10、１/20、１/40、１/100と遺構ごとに選択して行い、平面、断面測量は業者に委託した。

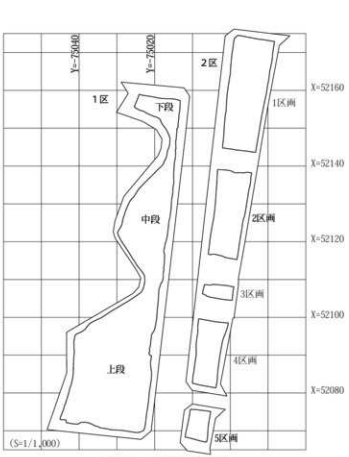
記録写真撮影には35㎜デジタルカメラとブローニーモノクロフィルム６×７版カメラを使用した。遺跡の全景写真は高所作業車を使用して撮影を行った。

整理業務は平成28年度10月1日から平成29年３月31日まで作業を実施した。整理作業は遺構図の確認、出土遺物の写真撮影、デジタル編集を行い、３月31日に修了した。

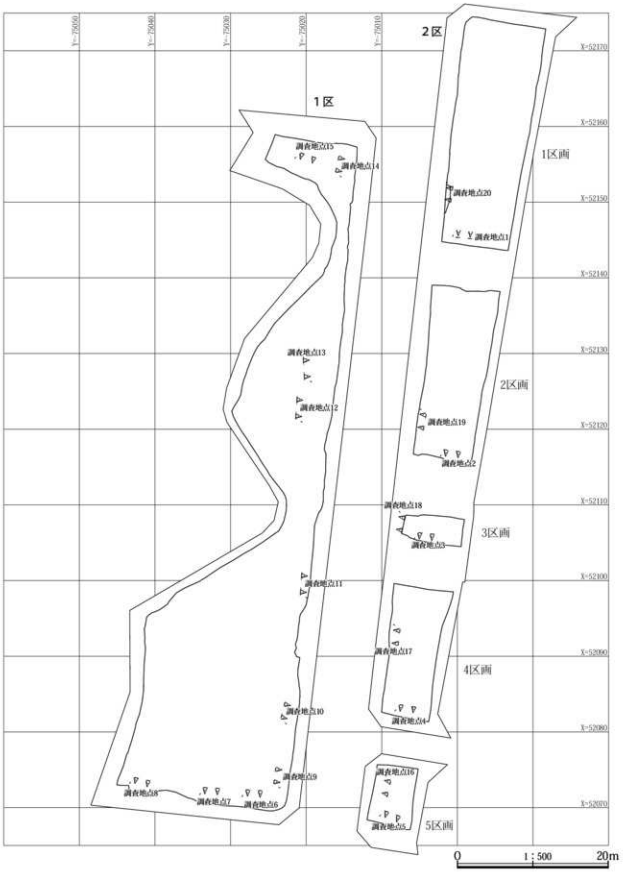
第４節　土層の堆積状況

本報告書の中でたびたび記述しているが、遺跡の立地が榛名山東麓の尾根先にあたるため、本遺跡内では多くの火山災害それに伴う水害を受けている。このため各区ごとに土層の堆積状況が異なる。さらに同じ区画でも数m離れただけでも堆積状況が異なっている。

このため基本土層と呼称できるような調査全体を普遍する土層の層位は提示することができない。従って各区画内の２ヶ所の土層断面を掲載し、土層の堆積状況を示した。



第４図　調査区域全体図



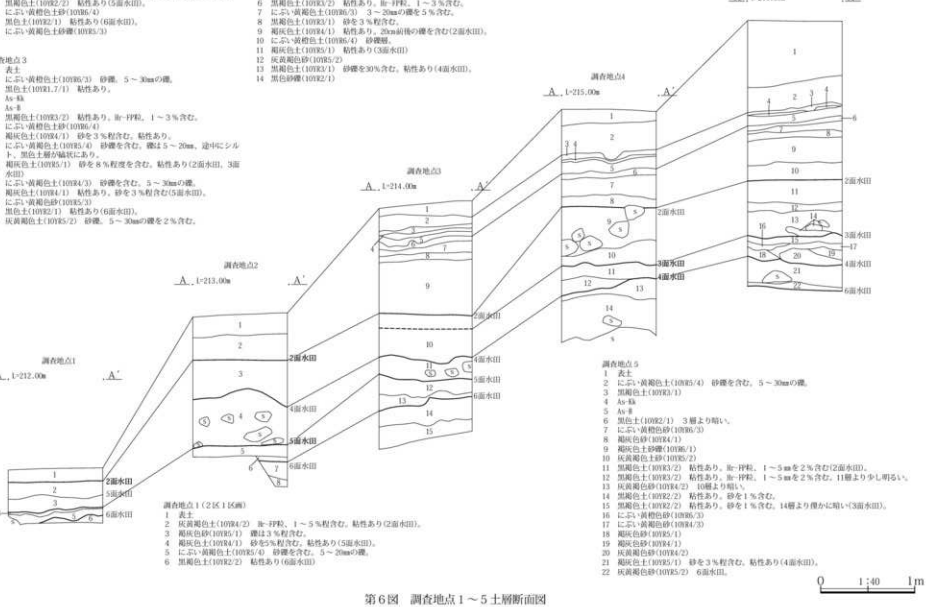
第５図　土層調査地点の位置

調査地点2（2区2区画）
1　表土
2　灰黄褐色砂(10YR4/2)
3　灰黄褐色土(10YR4/2)　Hr-FP粒 1～5㎜を3％程含む。粘性あり(0面水田)。
4　褐灰色土砂礫(10YR5/1)　礫は5㎜～20㎜程の大小のものがある。
5　黒褐色土(10YR2/2)　粘性あり(5面水田)。
6　にぶい黄橙色土砂(10YR6/4)
7　黒色土(10YR2/1)　粘性あり(6面水田)。
8　にぶい黄褐色土砂礫(10YR5/3)

調査地点3
1　表土
2　にぶい黄橙色土(10YR6/3)　砂礫。5～30㎜の礫。
3　黒色土(10YR1.7/1)　粘性あり。
4　As-Kk
5　As-B
6　黒褐色土(10YR3/2)　粘性あり。Hr-FP粒。1～3％含む。
7　にぶい黄橙色土砂(10YR6/4)
8　褐灰色土(10YR4/1)　砂を3％程含む。粘性あり。
9　にぶい黄褐色土(10YR5/4)　砂礫を含む。礫は5～20㎜。辺中にシルト、黒色土層が縞状にあり。
10　褐灰色土(10YR5/1)　砂を8％程度を含む。粘性あり(2面水田、3面水田)
11　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　砂礫を含む。5～30㎜の礫。
12　褐灰色土(10YR4/1)　粘性あり。砂を3％程含む(5面水田)。
13　にぶい黄褐色砂(10YR5/3)
14　黒色土(10YR2/1)　粘性あり(6面水田)。
15　灰黄褐色土(10YR5/2)　砂礫。5～30㎜の礫を2％含む。

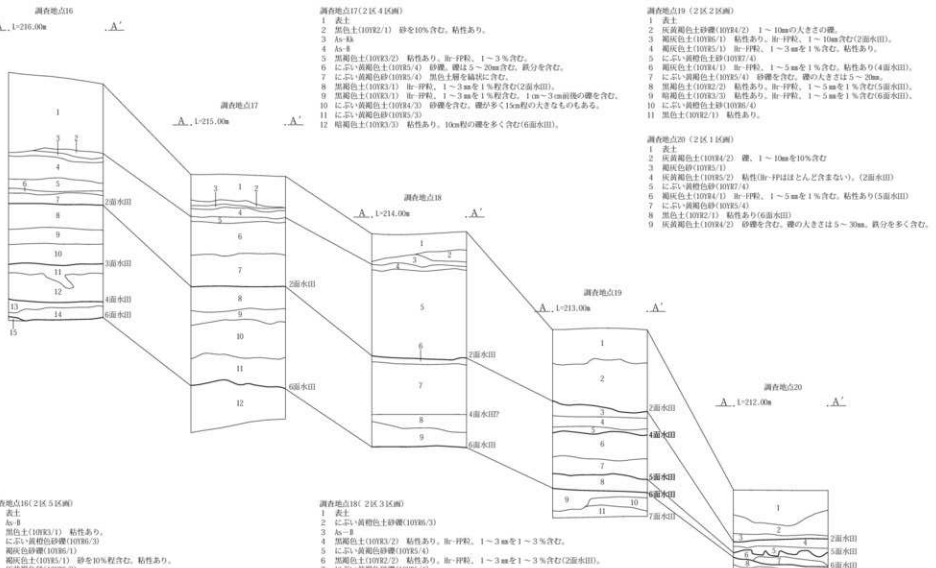
調査地点4（2区4区画）
1　表土
2　にぶい黄橙色土(10YR6/3)　砂礫を含む。5～30㎜の礫。
3　黒色土(10YR2/1)　砂を10％含む。粘性あり。
4　As-Kk
5　As-B
6　黒褐色土(10YR3/2)　粘性あり。Hr-FP粒。1～3％含む。
7　にぶい黄橙色土(10YR6/3)　3～20㎜の礫を5％含む。
8　黒褐色土(10YR3/1)　砂を3％程含む。
9　褐灰色土(10YR4/1)　粘性あり。20㎜前後の礫を含む(2面水田)。
10　にぶい黄橙色土(10YR6/4)　砂礫層。
11　褐灰色土(10YR5/1)　粘性あり(3面水田)
12　灰黄褐色砂(10YR5/2)
13　黒褐色土(10YR3/1)　砂礫を30％含む。粘性あり(4面水田)。
14　黒色砂礫(10YR2/1)

調査地点5
1　表土
2　にぶい黄褐色土(10YR5/4)　砂礫を含む。5～30㎜の礫。
3　黒褐色土(10YR3/1)
4　As-Kk
5　As-B
6　黒色土(10YR2/1)　3層より暗い。
7　にぶい黄橙色砂(10YR6/3)
8　褐灰色砂(10YR4/1)
9　褐灰色土砂礫(10YR5/1)
10　灰黄褐色土砂(10YR5/2)
11　黒褐色土(10YR3/2)　粘性あり。Hr-FP粒。1～5㎜を2％含む(2面水田)。
12　黒褐色土(10YR3/2)　粘性あり。Hr-FP粒。1～5㎜を2％含む。11層より少し明るい。
13　黒褐色砂(10YR4/2)　10層より暗い。
14　黒褐色土(10YR2/2)　粘性あり。砂を1％含む。
15　黒褐色土(10YR2/2)　粘性あり。砂を1％含む。14層より僅かに暗い(3面水田)。
16　にぶい黄褐色砂(10YR6/3)
17　にぶい黄褐色砂(10YR4/3)
18　褐灰色砂(10YR5/1)
19　褐灰色砂(10YR4/1)
20　灰黄褐色砂(10YR4/2)
21　褐灰色土(10YR5/1)　砂を3％程含む。粘性あり(4面水田)。
22　灰黄褐色砂(10YR5/2)　6面水田。



調査地点1（2区1区画）
1　表土
2　灰黄褐色土(10YR4/2)　Hr-FP粒、1～5％程含む。粘性あり(2面水田)。
3　褐灰色砂(10YR5/1)　礫は3％程含む。
4　褐灰色土(10YR4/1)　砂を5％程含む。粘性あり(5面水田)。
5　にぶい黄褐色土(10YR5/4)　砂礫を含む。5～20㎜の礫。
6　黒褐色土(10YR2/2)　粘性あり(6面水田)

第6図　調査地点1～5土層断面図



調査地点16（２区５区画）
1　表土
2　As-B
3　黒色土(10YR3/1)　粘性あり。
4　にぶい黄橙色砂礫(10YR6/3)
5　褐灰色砂礫(10YR6/1)
6　褐灰色土(10YR5/1)　砂を10%程含む。粘性あり。
7　灰黄褐色砂(10YR6/2)
8　黒褐色土(10YR3/2)　粘性あり。lir-FP粒、１～５mmを２％含む(2面水田)
9　褐灰色土(10YR4/1)　粘性あり。lir-FP粒、１～５mmを２％含む。a層よりやや明るい。
10　灰黄褐色砂(10YR5/2)
11　黒褐色土(10YR2/2)　粘性あり。砂を１％含む(3面水田)。
12　灰黄褐色砂(10YR4/2)
13　褐灰色土(10YR5/1)　砂を３％程含む。粘性あり(4面水田)。
14　灰黄褐色砂礫(10YR5/2)　20cm程の礫を含む。
15　黒褐色土(10YR3/1)　粘性あり。１～５mmの礫を３％含む(6面水田)。

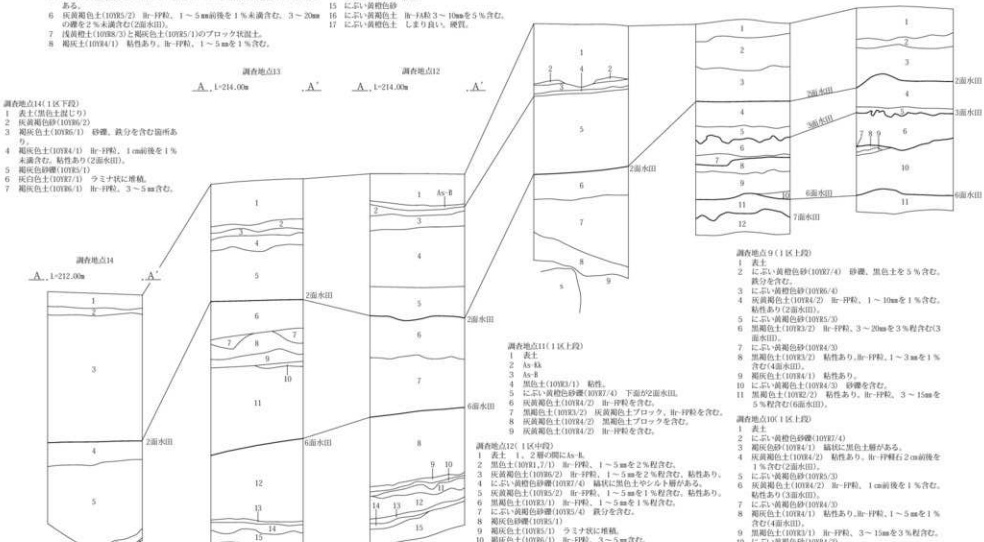
調査地点17（２区４区画）
1　表土
2　黒色土(10YR2/1)　砂を10%含む。粘性あり。
3　As-Ka
4　As-B
5　黒褐色土(10YR3/2)　粘性あり。lir-FP粒、１～３％含む。
6　にぶい黄褐色土(10YR5/4)　砂礫、礫は５～20mm含む。鉄分を含む。
7　にぶい黄褐色砂(10YR5/4)　黒色土層を縞状に含む。
8　黒褐色土(10YR3/1)　lir-FP粒、１～３mmを１％程含む(2面水田)。
9　黒褐色土(10YR3/1)　lir-FP粒、１～３mmを１％程含む。１cm～３cm前後の礫を含む。
10　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　砂礫を含む。礫が多く15cm程の大きなものもある。
11　にぶい黄褐色(10YR5/3)
12　暗褐色土(10YR3/3)　粘性あり。10cm程の礫を多く含む(6面水田)。

調査地点18（２区３区画）
1　表土
2　にぶい黄橙色土砂礫(10YR6/3)
3　As-B
4　黒褐色土(10YR3/2)　粘性あり。lir-FP粒、１～３mmを１～３％含む。
5　にぶい黄褐色砂礫(10YR5/4)
6　黒褐色土(10YR2/2)　粘性あり。lir-FP粒、１～３mmを１～３％含む(2面水田)。
7　にぶい黄褐色砂礫(10YR5/4)
8　にぶい黄褐色土(10YR5/3)　粘性あり。
9　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　砂礫を含む。５～30mmの大きさの礫(6面水田)。

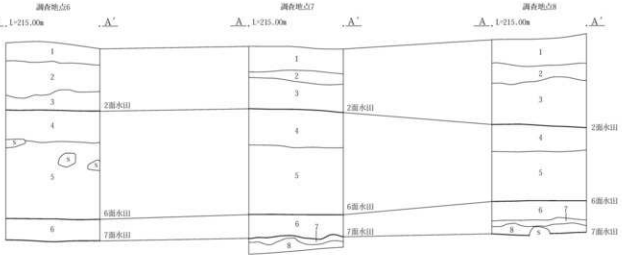
調査地点19（２区２区画）
1　表土
2　灰黄褐色土砂礫(10YR4/2)　１～10mmの大きさの礫。
3　褐灰色土(10YR6/1)　粘性あり。lir-FP粒、１～10mm含む(2面水田)。
4　褐灰色土(10YR5/1)　lir-FP粒、１～３mmを１％含む。粘性あり。
5　にぶい黄橙色土砂(10YR7/4)
6　褐灰色土(10YR4/1)　lir-FP粒、１～５mmを１％含む。粘性あり(4面水田)。
7　にぶい黄褐色土(10YR5/4)　砂礫を含む。礫の大きさは５～20mm。
8　黒褐色土(10YR2/2)　粘性あり。lir-FP粒、１～５mmを１％含む(5面水田)。
9　暗褐色土(10YR3/3)　粘性あり。lir-FP粒、１～５mmを１％含む(6面水田)。
10　にぶい黄橙色土砂(10YR6/4)
11　黒色土(10YR2/1)　粘性あり。

調査地点20（２区１区画）
1　表土
2　灰黄褐色土(10YR4/2)　礫、１～10mmを10%含む
3　褐灰色砂(10YR5/1)
4　灰黄褐色土(10YR5/2)　粘性(lir-FP)はほとんど含まない。(2面水田)
5　にぶい黄橙色砂(10YR7/4)
6　褐灰色土(10YR4/1)　lir-FP粒、１～５mmを１％含む。粘性あり(5面水田)
7　にぶい黄褐色砂(10YR5/4)
8　黒色土(10YR2/1)　粘性あり(6面水田)
9　灰黄褐色土(10YR4/2)　砂礫を含む。礫の大きさは５～30mm。鉄分を多く含む。

第７図　調査地点16～20土層断面図



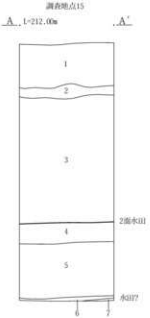
第8図　調査地点9～14土層断面図



調査地点6　（１区上段）
1　表土
2　にぶい黄橙色土(10YR7/4)　砂礫、縞状に黒色土を含む。鉄分を少量含む。
3　灰黄褐色砂(10YR5/2)
4　灰黄褐色土(10YR4/2)　Hr-FP粒。１～５mm前後を１％未満含む（２面水田）。
5　にぶい黄褐色砂礫(10YR4/3)　15cmほどの礫が含まれる。
6　黒褐色土(10YR2/2)　粘性。Hr-FP粒。１～15mmを５％程含む（７面水田）。

調査地点7（１区上段）
1　表土
2　にぶい黄橙色土(10YR7/4)　砂礫、縞状に黒色土を含む。
3　灰黄褐色砂(10YR5/2)
4　灰黄褐色土(10YR4/2)　粘性あり。Hr-FP粒。１～10mmを１％未満含む(2面水田)。
5　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　砂礫を含む。
6　黒褐色土(10YR2/2)　Hr-FP粒。10～20mmを５％程含む(6面水田)。
7　褐灰色土(10YR5/1)　粘性あり。Hr-FP粒。3cm前後を５％含む(7面水田)。
8　褐灰色土(10YR6/1)　１～３cmの礫を５％程含む。鉄分を含む。

調査地点8（１区上段）
1　表土
2　にぶい黄橙色土(10YR7/4)　砂礫、黒色土を５％含む。鉄分を少量含む。
3　灰黄褐色砂(10YR5/2)
4　灰黄褐色土(10YR4/2)　Hr-FP粒。１cm前後を１％未満含む。粘性あり。(2面水田)
5　にぶい黄褐色砂(10YR4/3)
6　黒褐色土(10YR3/2)　Hr-FP粒。10～20mmを５％程含む。粘性あり(6面水田)。
7　黒褐色土(10YR2/2)　７層より粘く粘性あり。
8　にぶい黄褐色土(10YR5/3)　砂礫、黒色土が15％程混じる(7面水田)。



調査地点15
1　表土
2　黒褐色土(10YR3/1)　粘性あり。
3　褐灰色土(10YR6/1)　砂礫、鉄分を含む箇所あり。
4　褐灰色土(10YR4/1)　Hr-FP軽石１cm前後を１％未満含む。粘性あり(2面水田)。
5　褐灰色砂礫(10YR5/1)
6　灰白色土(10YR7/1)　ラミナ状に堆積。
7　褐灰色土(10YR6/1)　Hr-FP粒。３～５mm含む。

第９図　調査地点６～８・15土層断面図

第２章　有馬西田遺跡周辺の立地

第１節　遺跡の地勢的環境

有馬西田遺跡の所在する渋川市は関東平野の西北部に位置し、榛名山東麓裾野にある。標高は約210mを測る。遺跡からは、北に子持山、北東に赤城山が望め、遺跡は、全体として南から北に、西から東に緩やかに傾斜している。地勢は榛名山、浅間山噴出物が認められ、火山堆積物に厚く覆われている。渋川市北部には吾妻郡鳥居峠付近を源流とする吾妻川が流下している。さらに同市内北部で利根川と合流する。

有馬西田遺跡は、渋川市内の西部にあたる榛名山の一尾根端下に位置するため、火山災害、洪水等を複数回受けている。遺跡周辺には榛名山麓の谷筋から東流する小河川が多く認められ、有馬西田遺跡の東側には午王川、南側を滝沢川が流下している。傾斜地であるため、有馬西田遺跡の火山噴出物は崩落や水害を受け、安定した

1 (SDS)榛名-渋川テフラ堆積面
2 (VW)谷壁
3 (FV)扇状地(中期更新世)
4 (HDA)行幸田岩屑なだれ堆積面
5 (IDS)榛名-伊香保テフラ堆積面
6 (FTC)扇状地(後期更新世後半)
7 (JDA)陣場岩屑なだれ堆積面
8 (GS)緩斜面および土石流漸変型谷底平野
9 (VP)谷底平野および後背湿地
10 (FH)扇状地(完新世)
11 (CB)河成段丘(旧中洲：完新世)
12 (YB)広瀬川低地帯の後背湿地(浅間Ｂテフラ降灰後)
13 (YC)広瀬川低地帯の旧中洲(浅間Ｂテフラ降灰後)
14 (TTC)河成段丘(後期更新世後半)
15 (FM)扇状地(後期更新世前半)
16 (OS)火山原面
17 流れ山

第10図　遺跡周辺の地形

層位をなさず、調査区内では地点が異なると同じ層位をなさないことが多く確認された。このため調査で上面から１～５面と冠していても同じ調査面がすべて同じ文化面とは異なることがある。（１区ではAs-Bがやや安定して確認され、２区ではAs-Bがブロック状に確認されている。例・１区第１面と２区第２面の暗渠の遺構等）。また、崩落水害が頻繁に起こったため、安定した基本土層を持たず、別の区あるいは同じ区内でも統一した土層が確認することができない。このため調査の確認面は少ない出土遺物と火山灰及び覆土中の軽石等で確認した。出土遺物は少量で掲載に得る遺物は10点で、他は小破片であった。

居住に関わる遺構はなく、土坑の他は溝、井戸のみである。また、水田は、畔が残るが、区画全体を検出したものはなく畔内側の面積を計測できたものはなかった。畠等の遺構は確認することができなかった。

さらに各区画での被災状況も単一でないため、各区画内での時代面の決定には希少な遺物の年代観に頼った。

第２節　周辺の遺跡と歴史環境

有馬西田遺跡は群馬県渋川市に所在し、榛名山東麓端下に位置する。周辺には多くの遺跡が確認されている。

ここでは有馬遺跡周辺の遺跡の分布状況を説明するにあたり、２枚の遺跡分布図を作成した。第11図は、有馬西田遺跡に近接する遺跡の分布状況を示したものである。第12図は、榛名山火山災害と周辺遺跡の関係を見るため、有馬西田遺跡から北側に対象を広げて図幅を設定したものである。

旧石器時代

本遺跡北西約５～600mに所在する行幸田山遺跡（８）が上げられる。旧渋川市内では現在唯一の旧石器時代遺跡である。本遺跡北方に所在し、谷地を挟み尾根の上段に立地する。出土層位は浅間・板鼻褐色軽石層（約１万６千年～２万年前）中の地層とローム最上層（約１万年～１万１千年前）中の２面が確認されている。浅間・板鼻褐色軽石層からはすり石と剥片が検出され、砂岩製両刃礫器がローム最上層から出土した。

縄文時代

有馬西田遺跡の西側、榛名山麓末端尾根上には有馬城ノ上遺跡(114)や有馬城ノ上西遺跡(115)などの縄文時代の遺跡が立地する。有馬城ノ上西遺跡では陥穴が検出されている。午王川流域の台地上では有馬後田遺跡（２）や神宮寺西遺跡(10)などで前期を中心とした集落の調査が行われている。以下、時期別の状況について記する。

草創期の土器は、中郷田尻遺跡(73)や白井北中道遺跡(59)で出土している。白井北中道遺跡では、隆起線文土器が、片刃打製石斧や有舌尖頭器、木葉形尖頭器などの石器群とともに出土している。県内では水上町・前橋市・笠懸町・太田市内などで確認されている。早期の遺跡は殆ど確認されていないが、尖底土器が本遺跡の北西1.5kmに空沢遺跡(32)、利根川の左岸、赤城町に所在する三原田城遺跡(105)で数点ではあるが押し型文土器(山型、楕円、格子文)を出土している。前期前葉の資料では中筋遺跡(28)、空沢遺跡、図幅外になるが堀込遺跡、半田南原遺跡が上げられる。これらの土器は縄文を基調とし、円形の竹管文やループ文等が認められる。

中期は空沢遺跡と行幸田山遺跡に代表される。行幸田山遺跡では阿玉台式土器が出土しており、中期から後期にかかる遺跡である。型式名では勝坂・阿玉台式から加曽利Ｅ４式までに相当する。この２遺跡では新潟県の焼町式や東北地方の大木式の出土が認められ、長野・山梨の影響を受けた曽利式土器が認められた。本県では長野原町の調査で曽利式土器がたくさん見つかっている。これらの土器群は吾妻川ルートをたどってきたと考えられる。

後期の土器は空沢遺跡、諏訪ノ木遺跡(37)で称名寺式期の深鉢が出土している。

弥生時代

弥生時代は前期、中期、後期に分けられるが、渋川市内では前期から確認されている。渋川市川島町に南大塚遺跡が所在する。県内では同時期の遺跡は藤岡市の沖Ⅱ遺跡があるが、前期の遺跡としては極めて少ない。

南大塚遺跡は、昭和54年市道拡幅工事で確認された遺跡で、土坑の中から壺、甕、高台付鉢等の土器が出土した。中期の遺跡としては行幸田遺跡、押手遺跡がある。

後期は多くの遺跡が確認され、有馬遺跡（３）、中期から継続する有馬条里遺跡（４）、中村遺跡（７）等が上げられる。

この３遺跡は近接して所在し、後期には礫床墓が確認

されている。出土土器は、中期は岩櫃山式土器、栗林式土器(竜見町式土器)、後期になると樽式土器が主体となる。有馬遺跡の礫床墓からは樽式土器と鹿角製の柄を持つ鉄剣が出土し、他にも青銅製鋼、鉄製鋼、管玉、勾玉等の副葬品が認められる。また、有馬遺跡では人形土器が礫床墓から出土し、有馬条里遺跡でも人形土器の鼻の破片や腕のようなものが出土している。また、縄文時代と同じように他地域の土器が出土している。有馬遺跡周辺では長野県や北陸系、畿内系土器、東海系、北関東系、東北系土器等が多く出土し、鉄製品とも合わせ、他地域との交流、交易があったことが確認されている。鹿角製の柄は高崎市新保田中村前遺跡で出土し、県内の交易が活発に行われていたことがわかる。

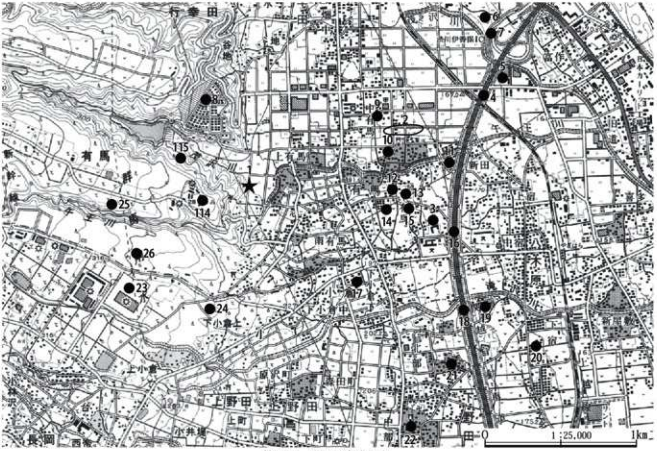
この他に、午王川北側の沖積地に面した台地縁辺には有馬後田遺跡や神宮寺西遺跡、有馬寺畑遺(14)などで後期の集落が検出されている。

古墳時代

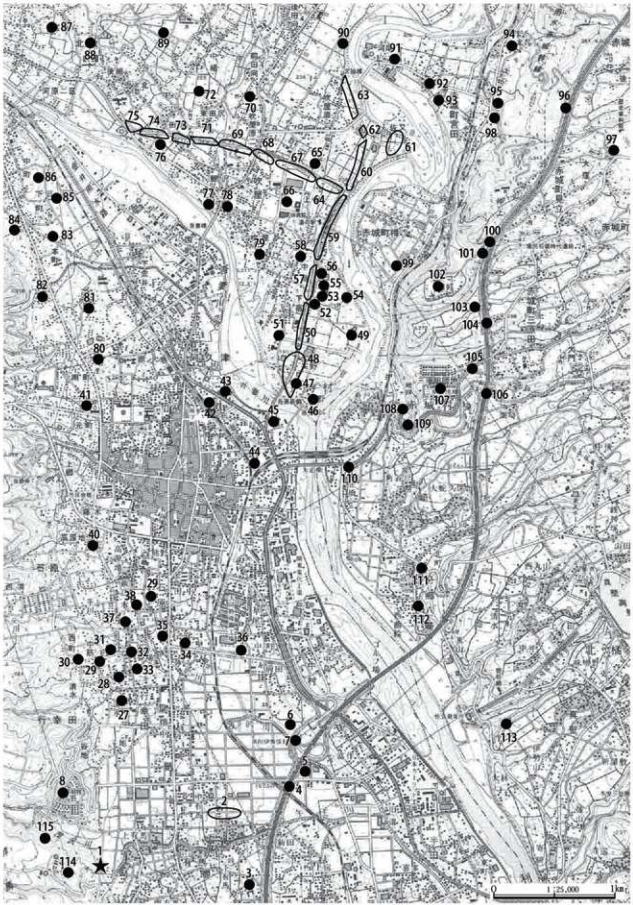
古墳時代は前期、中期、後期の３時期に分けられる。前期は北町遺跡(111)、有馬遺跡、有馬条里遺跡等の集落遺跡が確認され、他地域の土器が弥生時代からさらに増え、他地域との交流が一段と活発になったことを示している。前期の古墳としては一辺26×21mの方墳行幸田遺跡Ａ区１号墳がある。

古墳時代になると榛名山の火山活動が盛んになり、渋川市内の遺跡は榛名山の火山災害で火山灰、火山泥流で厚く覆われるようになった。このため後世の手が届かないままの状態が保たれたまま調査できた遺跡が多く確認されている。

中期から後期の著名な遺跡としては中筋遺跡、黒井峯遺跡(89)が上げられる。中筋遺跡は、集落が榛名山起源の火山灰、火砕流(Hr-FA)により埋没していた。黒井峯遺跡は榛名山起源の軽石で埋没し、白井北中道遺跡や吹屋犬子塚遺跡(67)などの白井・吹屋遺跡群ではこの榛名山起源の軽石(Hr-FP)でおおわれた下から馬の蹄跡が確認され、５世紀後半から６世紀にかけて、牧の原型が存在したことが分かっている。さらに近年では金井東裏遺跡(85)では６世紀初頭Hr-FA下から甲装着人骨を含む４体の被災人骨、屋敷跡、畠、祭祀遺構、古墳等が、金井下新田遺跡(83)では「囲い状遺構」、鍛冶遺構、人骨、馬遺存体などが確認され、注目を集めている。



第11図　周辺の遺跡(１)



第12図　周辺の遺跡
（国土地理院1/25000地形図「金井」平成21年５月「鯉沢」平成21年６月「伊香保」平成24年９月「渋川」平成14年10月発行を使用）

第１表　周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	所在地	概要	文献
1	有馬西田遺跡	洲川市有馬字宮前1543他	古墳時代以降中近世にいたる間の水田５面を調査する。	本報告の遺跡。
2	有馬後田遺跡	洲川市有馬字後田他1319-2	３地点を調査。縄文時代前期集落、弥生時代後期集落、古墳時代前期～後期集落、中期初頭溝、奈良・平安時代集落、古墳、溝、地下式壙	洲川市教育委員会『市内遺跡Ⅰ』1988、『市内遺跡Ⅵ』1993、『市内遺跡Ⅰ』2008
3	有馬遺跡	洲川市有馬・八木原	弥生時代集落・環状墓、Hr-FA下畠、古墳、奈良・平安時代の集落	群馬県埋蔵文化財調査事業団『有馬遺跡Ⅰ・大久保遺跡』1989
4	有馬条里遺跡	洲川市八木原字堀上、堀下	古墳時代～平安時代の集落・土坑・溝、古墳時代As-C下畠、Hr-FP下水田	洲川市教育委員会『有馬条里遺跡』1983、群馬県埋蔵文化財調査事業団『有馬条里遺跡Ⅰ』1989
5	八木原中田遺跡	洲川市八木原1361他	奈良・平安時代集落	洲川市教育委員会『市内遺跡Ⅲ』1990
6	中村岡前遺跡	洲川市中村字岡前439他	奈良・平安時代集落、古墳時代Hr-FP下放牧地・馬跡・水田、Hr-FA下水田?	洲川市教育委員会『中村岡前遺跡』2001
7	中村遺跡	洲川市中村445他	弥生～近世集落、古墳、江戸時代As-A下畠・水田	群馬県教育委員会・洲川市教育委員会『中村遺跡』1986
8	行幸田山遺跡	洲川市行幸田字三重街道1560他	縄文時代集落、古墳時代前期・中期古墳、中世墓址	洲川市教育委員会『行幸田山遺跡』1987
9	有馬中井遺跡	洲川市有馬字中井231-1-2・241-1	平安時代集落	洲川市教育委員会『市内遺跡ⅩⅣ』2001、『市内遺跡18』2005
10	神宮寺西遺跡	洲川市有馬1335-1	縄文時代集落、弥生時代集落・円形周溝墓、奈良時代集落	洲川市教育委員会『市内遺跡Ⅰ』1988
11	八木原久保遺跡	洲川市八木原字久保224-14他	３地点で調査。奈良・平安時代集落、近世以降の水田	洲川市教育委員会『八木原久保遺跡』1997、『市内遺跡Ⅹ』1997、『市内遺跡ⅩⅡ』1999
12	有馬久宮間戸遺跡	洲川市有馬字久宮間戸492-5他	古墳時代、奈良・平安時代集落、江戸時代墓壙	洲川市教育委員会『有馬久宮間戸遺跡』1997、『市内遺跡Ⅹ Ⅰ』1998、『市内遺跡ⅩⅢ』2000
13	有馬廃寺遺跡	洲川市有馬字寺畑466-1他	平安時代集落、弥生時代集落、平安時代集落、江戸時代瓦	洲川市教育委員会『有馬廃寺跡発掘調査概報』1987、『有馬廃寺跡』1988、『市内遺跡Ⅰ』2008
14	有馬寺畑遺跡	洲川市有馬字寺畑484他	弥生時代集落・周溝墓、古墳時代畠、奈良・平安時代集落・溝	洲川市教育委員会『市内遺跡ⅩⅢ』2000、『有馬寺畑遺跡』2014
15	有馬高貝戸遺跡	洲川市有馬字高貝戸452-4、-5他	古墳時代末～奈良・平安時代集落	洲川市教育委員会『市内遺跡Ⅰ』1988
16	有馬小貝戸遺跡	洲川市有馬429-2他	奈良時代集落	洲川市教育委員会『有馬小貝戸遺跡』1997
17	小倉屋敷遺跡	吉岡町小倉	中世堀・土居	群馬県教育委員会『群馬県の中世城館跡』1988
18	滝沢古墳	吉岡町大字下野田1165番地	終末期古墳	群馬県教育委員会・吉岡町教育委員会『七日市遺跡・滝沢古墳・女塚遺跡』1986
19	滝沢遺跡	吉岡町大字下野田字滝沢1449-1	奈良・平安時代集落	吉岡町教育委員会『滝沢遺跡』1997
20	半田剣城遺跡	半田字剣城691-1	奈良・平安時代集落、中世館址	洲川市教育委員会『市内遺跡Ⅸ』洲川市教育委員会1996
21	見城遺跡	吉岡町下野田	中世城館址	『群馬県の中世城館址跡』群馬県教育委員会1988
22	野田の内出遺跡	吉岡町下野田	中世堀	『群馬県の中世城館址跡』群馬県教育委員会1988
23	平石遺跡	吉岡町下野田	縄文時代前期～中期遺物包含層、古墳時代Hr-FA下畠	吉岡町教育委員会『平石遺跡群発掘調査報告書』1988
24	小倉庚申塚遺跡	吉岡町小倉字庚申塚695他	終末期古墳	吉岡町教育委員会『小倉庚申塚遺跡』1992
25	小倉古墳群	吉岡町大字小倉字築地602番地　他	終末期古墳を中心とした古墳群	洲川市教育委員会『有馬堂山古墳群』1999
26	有馬堂山古墳群	洲川市有馬字堂山1970番地　他	午王川上流に立地する。洲川市域に20基ほどの終末期古墳。小倉古墳群に近接、同一古墳群となすと考えられる	洲川市教育委員会『有馬堂山古墳群』1999
27	行幸田畑中遺跡	洲川市行幸田865-1	弥生時代後期集落、古墳時代Hr-FA下畠・古墳、平安時代集落	洲川市教育委員会『市内遺跡Ⅴ』1992
28	中筋遺跡	洲川市行幸田西1156他	古墳時代中期～後期集落・畠・祭祀・垣根・道・溝・古墳。縄文時代集落・土坑。弥生時代集落。奈良時代集落・小鍛冶。平安時代集落	洲川市教育委員会『中筋遺跡』1987、『中筋遺跡第２次』1988他
29	鍛屋遺跡	洲川市行幸田1026	古墳時代集落、平安時代集落	洲川市教育委員会『市内遺跡Ⅰ』1998
30	行幸田西遺跡	洲川市行幸田1212-1	縄文時代土坑・ピット。古墳時代集落、中世方形竪穴遺構	洲川市教育委員会『市内遺跡Ⅴ』1992
31	伊勢森南遺跡	洲川市行幸田1073-1	縄文時代溝	洲川市教育委員会『市内遺跡Ⅰ』1989
32	空沢遺跡	洲川市行幸田942他	縄文時代集落・土坑・列石、弥生時代円形周溝墓、古墳時代古墳群(5世紀後半・6世紀後半・7世紀)、奈良・平安時代集落、近世墓	洲川市教育委員会『空沢遺跡』1978、『空沢遺跡第２次概要報告書』1979他
33	行幸田寺後遺跡	洲川市行幸田918-3他	縄文時代集落・墓壙・土坑・ピット、奈良・平安時代集落	洲川市教育委員会『市内遺跡Ⅵ』1993
34	石原東遺跡	洲川市石原742-1他	奈良・平安時代集落、古墳時代Hr-FP下水田	洲川市教育委員会『石原東・中村日焼田遺跡』1991、『石原東遺跡(Ⅱ)』1994、『石原東遺跡(Ⅲ)』1995
35	石原古墳群	洲川市石原951他	弥生時代後期集落、古墳時代Hr-FP上古墳、Hr-FA下古墳	洲川市教育委員会『石原東古墳群』1997
36	中村日焼田遺跡	洲川市中村190他	江戸時代As-A下水田・溝	洲川市教育委員会『石原東・中村日焼田遺跡』1991

No.	遺跡名	所在地	概要	文献
37	諏訪ノ木遺跡	洪川市石原1182-5他	縄文時代土坑・ピット、古墳時代溝・古墳、平安時代集落・墓壙、時期不明配石墓	洪川市教育委員会『諏訪ノ木』1981
38	石原久保貝塚A遺跡	洪川市1034-1	古墳時代集落	洪川市教育委員会『市内遺跡VI』1993
39	石原久保貝塚B遺跡	洪川市994-1	古墳時代集落	洪川市教育委員会『市内遺跡VI』1993
40	高源地東Ⅰ遺跡	洪川市石原字高源地1751-3	縄文時代集落・配石遺構・土坑、古墳時代集落・祭祀遺構、奈良・平安時代集落・溝・土坑・鉄生産関連遺物、中・近世掘立柱建物、方形周溝墓・耕作痕	群馬県埋蔵文化財調査事業団『高源地東Ⅰ遺跡』2006
41	虚空蔵塚古墳	洪川市洪川123	終末期古墳	群馬県教育委員会『群馬県古墳総覧』2017
42	坂之下遺跡	洪川市坂下町934-1	平安時代集落	群馬県教育委員会『坂之下遺跡発掘調査報告書』1988
43	坂下町古墳群	洪川市坂下町933他	古墳時代Hr-FA下古墳	日本考古学協会『日本考古学年報15』1962
44	東町古墳	洪川市東町2001-4	古墳時代Hr-FA下古墳	群馬県史編さん委員会『群馬県史　資料編3』1981
45	東町関下遺跡	洪川市東町字関下	江戸時代As-A下品・水田	群馬県埋蔵文化財調査事業団『東町関下遺跡』1998
46	白井天野遺跡	洪川市白井天野	古墳時代Hr-FP上古墳、平安時代集落、中世～近世墓壙	群馬県埋蔵文化財調査事業団『白井大宮Ⅱ遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団2002
47	二位屋城跡	洪川市白井字二位屋	中世城跡	『群馬県古城塁址の研究』1972
48	白井二位屋遺跡	洪川市白井字二位屋2149-1他	奈良・平安時代集落・土坑・掘立柱列、古墳時代Hr-FP下放牧地、中世～近世土壙・獣埋葬土坑・堀・池	群馬県埋蔵文化財調査事業団『白井遺跡群(白井二位屋)－集落編Ⅰ』1994、『白井遺跡群-古墳時代編』1997、『白井遺跡群-中世・近世編』1993、子持村教育委員会『白井二位屋遺跡Ⅲ』2005、創価学会/毛野考古学研究所『白井二位屋遺跡４』2012
49	渡屋遺跡	洪川市白井	古墳時代Hr-FA下集落、平安時代集落・製鉄遺構	群馬県埋蔵文化財調査事業団『白井大宮Ⅱ遺跡』2002
50	白井南中道遺跡	洪川市字南中道	古墳時代Hr-FP下・放牧地、奈良・平安時代集落・土坑・ピット、中世～近世土坑	群馬県埋蔵文化財調査事業団『白井遺跡群(白井南中道)－集落編Ⅱ』1996、『-古墳時代編』1997、『-中世・近世編』1998
51	白井城南部遺跡	洪川市白井	平安時代集落、戦国時代土坑	群馬県埋蔵文化財調査事業団『白井大宮Ⅱ遺跡』2002
52	加藤塚遺跡	洪川市白井2289-1	Hr-FP上終末期古墳	『群馬県古墳総覧』2017
53	白井掛岩遺跡	洪川市白井字掛岩360-1他	縄文時代前期集落、平安時代集落、古墳時代後期古墳	洪川市教育委員会、技研コンサル株式会社『白井掛岩遺跡』2016
54	白井大宮Ⅱ遺跡	洪川市白井372	縄文時代配石遺構・土坑、古墳時代Hr-FP下畦・馬蹄痕・土坑・倒木痕、平安時代集落・竪穴状遺構	群馬県埋蔵文化財調査事業団『白井大宮Ⅱ遺跡』2002
55	白井大宮遺跡	洪川市白井字大宮10341	古墳時代Hr-FP下畠・放牧地・道・倒木痕・馬蹄跡、平安時代遺跡、中世土壙墓	群馬県埋蔵文化財調査事業団『白井大宮Ⅱ遺跡』1993
56	金比羅塚古墳	洪川市白井字大宮	Hr-FP上終末期古墳	群馬県埋蔵文化財調査事業団『白井大宮Ⅱ遺跡』2002
57	白井丸岩遺跡	洪川市白井	古墳時代Hr-FP下放牧地、中世～近世墓壙・土坑	群馬県埋蔵文化財調査事業団『白井遺跡群(白井丸岩)－古墳時代編』1997、『白井遺跡群-中世・近世編』1998
58	白井宿遺跡	洪川市白井	中世～近世城下町・宿場(市場)町	群馬県埋蔵文化財調査事業団『白井大宮Ⅱ遺跡』2002
59	白井北中道遺跡	洪川市白井	古墳時代Hr-FP下放牧地、中世～近世堀・畠・墓壙・溝・土坑	群馬県埋蔵文化財調査事業団『白井遺跡群(白井北中道)－古墳時代編』1997、『白井遺跡群-中世・近世編』1998、『白井北中道遺跡(道の駅地点)』2000、スナガ環境測設㈱『白井北中道遺跡』２　2014
60	白井北中道Ⅲ遺跡	洪川市白井	縄文時代集落・掘立柱建物・配石遺構、弥生～古墳集落、古墳時代Hr-FP下放牧地・道、平安時代集落、中・近世掘立柱建物・土坑・ピット・溝	群馬県埋蔵文化財調査事業団『白井北中道Ⅲ遺跡(１)－弥生時代以降編』2009、『白井北中道Ⅲ遺跡(２)－縄文時代編』2009
61	白井在父遺跡	洪川市白井1089-19他	縄文時代前期～後期・晩期遺物包含層、古墳時代Hr-FP下畝状遺構・道、縄文時代土坑・窪地古代末～近世掘立柱建物・竪穴状遺構・柵列・畠・土壙墓	子持村教育委員会『白井在父遺跡発掘調査報告書』2005、洪川市教育委員会『白井在父遺跡Ⅱ』2010
62	白井十二遺跡	洪川市白井字十二1126-3他	縄文時代集落・土坑、古墳時代Hr-FP下放牧地、中・近世掘立柱建物・土坑・	群馬県埋蔵文化財調査事業団『白井十二遺跡』2008
63	吹屋伊勢森遺跡	洪川市吹屋	縄文時代集落・土坑、古墳時代Hr-FP下品・放牧地、近世土坑・溝	群馬県埋蔵文化財調査事業団『吹屋伊勢森遺跡』2006
64	白井北中道Ⅱ遺跡	洪川市白井	縄文時代前期・土坑・集石、古墳時代Hr-FP下放牧地、中世～近世土坑・溝	群馬県埋蔵文化財調査事業団『白井北中道Ⅱ・吹屋犬子塚・吹屋中原遺跡旧石器・縄文時代』1998『白井北中道Ⅱ・吹屋犬子塚・吹屋中原遺跡古代・中近世』1996
65	吹屋恵久保遺跡	洪川市吹屋660番地1他	古墳時代集落、Hr-FP下畠・窪地・道・垣・馬蹄跡・樹木痕・踏跡	洪川市教育委員会『吹屋恵久保遺跡』2006
66	源空寺裏遺跡	洪川市吹屋	古墳時代Hr-FP下馬蹄跡、境界	群馬県埋蔵文化財調査事業団『年報11』1992
67	吹屋犬子塚遺跡	洪川市吹屋	旧石器時代ブロック、縄文時代集落・土坑、古墳時代Hr-FP下放牧地・水田・畠、中・近世土坑・溝・道	群馬県埋蔵文化財調査事業団『白井北中道Ⅱ・吹屋犬子塚・吹屋中原遺跡旧石器・縄文時代』1998『白井北中道Ⅱ・吹屋犬子塚・吹屋中原遺跡古代・中近世』1996

№	遺跡名	所在地	概要	文献
68	吹屋中原遺跡	洲川市吹屋	旧石器時代ブロック、縄文時代集落・土坑、古墳時代Hr-FP下放牧地・畠・道・祭祀・陸畠代、中世～近世土坑・溝	群馬県埋蔵文化財調査事業団『白井北中道Ⅱ・吹屋犬子塚・吹屋中原遺跡旧石器・縄文時代』 1998 『白井北中道Ⅱ・吹屋犬子塚・吹屋中原遺跡古代・中近世』1996
69	中郷恵久保遺跡	洲川市中郷・吹屋	縄文時代集落・土坑、古墳時代前期・中期集落・土坑、Hr-FA下水田、Hr-FP下水田・畠・放牧地、平安時代集落	群馬県埋蔵文化財調査事業団『中郷恵久保遺跡』2006
70	八幡神社遺跡	洲川市中郷	縄文時代前期、古墳時代前期集落・土壙墓、古墳時代Hr-FP下集落・堀・畠・樹木痕	群馬県埋蔵文化財調査事業団『年報11』1992
71	吹屋三角遺跡	洲川市吹屋	縄文時代集落・水場、古墳時代Hr-FP下・Hr-FA下水田、中・近世溝	群馬県埋蔵文化財調査事業団『吹屋三角遺跡』2007
72	田尻11地点遺跡	洲川市中郷	弥生時代集落、古墳時代Hr-FP下集落・方形周溝墓・道	子持村教育委員会『田尻遺跡-第11地点』2005
73	中郷田尻遺跡	洲川市中郷	縄文時代集落・土坑、弥生時代集落・土坑、古墳時代Hr-FA下集落・土坑・溝・祭祀跡・水田、Hr-FA上集落、畠、Hr-FP下集落・水田・畠、平安時代集落・土坑・溝	群馬県埋蔵文化財調査事業団『中郷田尻遺跡』2007
74	吹屋鞍屋遺跡	洲川市吹屋664-60	縄文時代集落、古墳時代中期集落・掘立柱建物・土坑・溝、古墳時代Hr-FA下水田・畠、Hr-FP下水田・畠・放牧地、平安時代集落・掘立柱建物・土坑・溝・井戸	群馬県埋蔵文化財調査事業団『吹屋鞍屋遺跡』2007
75	北牧大境遺跡	洲川市北牧	古墳時代Hr-FP下・Hr-FA下水田・平安時代集落、中近世掘立柱建物跡・土壙墓	群馬県埋蔵文化財調査事業団『北牧大境遺跡』2004
76	吹屋１～Ⅲ号墳	洲川市吹屋字鞍屋	Hr-FP上古墳	子持村教育委員会『子持村誌　上巻』1987
77	鯉沢瓜田遺跡	洲川市吹屋字瓜田100-5他	古墳時代Hr-FP下・Hr-FA下水田	子持村教育委員会『鯉沢瓜田遺跡』2000
78	吹屋瓜田遺跡	洲川市吹屋字瓜田100他	古墳時代Hr-FP下・Hr-FA下水田	群馬県埋蔵文化財調査事業団『吹屋瓜田遺跡』1996
79	白井城跡	洲川市白井字吹屋715-1・洲川市郷方173-2	近世土坑	洲川市教育委員会『洲川市市内遺跡10』2017 『市内遺跡9』2016
80	金井原遺跡	洲川市1232-4	中世以降の塚	洲川市教育委員会『市内遺跡Ⅵ』1993
81	金井製鉄遺跡	洲川市金井字前原1343	平安時代製鉄炉・木炭窯	洲川市教育委員会『金井製鉄遺跡』1975
82	金井前原古墳	洲川市金井字逆川1586-8	古墳時代古墳、Hr-FA下か	洲川市教育委員会『洲川市内遺跡4』2011
83	金井下新田遺跡	洲川市金井字下新田	縄文時代集落・周溝墓、弥生時代集落・周溝墓、古墳時代囲い状遺構・祭祀遺構・集落・畿内遺構、足跡と馬蹄痕、平安時代の炭窯	群馬県埋蔵文化財調査事業団『年報34』2015、『年報35』2016
84	西裏遺跡	洲川市金井西裏2159他	古墳時代集落	群馬県教育委員会・洲川市教育委員会『中村遺跡』1986
85	金井東裏遺跡	洲川市金井字東裏	縄文時代集落・土坑・ピット、古墳時代中期集落・古墳、Hr-FA下集落・祭祀遺構・道・畠	群馬県埋蔵文化財調査事業団『年報34』2015、『金井東裏遺跡　甲着装人骨等詳細調査報告書』2017
86	金井丸山古墳	洲川市金井字東裏1806-1	古墳時代Hr-FA下古墳	洲川市教育委員会『丸山古墳』1978
87	畑中遺跡	吉岡町大字北下字畑中193-3	平安時代集落・土坑・溝	吉岡町教育委員会『畑中遺跡』2000
88	北牧相ノ田遺跡	洲川市北牧字相ノ田5-3他	古墳時代Hr-FP下水田、平安時代集落	子持村教育委員会『北牧相ノ田遺跡』2000
89	黒井峯遺跡	洲川市北牧・中郷	古墳時代Hr-FP下集落・水田・水場	子持村教育委員会『黒井峯遺跡発掘調査報告書』1990
90	吹屋遺跡	洲川市吹屋	旧石器、縄文時代集落・墓壙・土坑、古墳時代Hr-FP下放牧地・道・掘立柱建物、近世土坑・耕作坑	群馬県埋蔵文化財調査事業団『吹屋遺跡』2007
91	宮田河岸古墳群	洲川市宮田	Hr-FP上古墳群	群馬県『上毛古墳総覧』1983
92	宮田寄居遺跡	洲川市赤城町宮田字中島323他	弥生・古墳時代集落、中世城館	赤城村教育委員会『宮田寄居』1998 『宮田諏訪原遺跡Ⅰ・Ⅱ』2005
93	宮田遺跡	赤城町宮田字中島282他	古墳時代Hr-FP下水田	群馬県史編さん委員会『群馬県史　資料編2』1986
94	宮田諏訪原遺跡	洲川市赤城町宮田字諏訪原	古墳時代Hr-FA下祭祀・畠・集落・竪穴状遺構・集石、Hr-FP直下祭祀・畠・集石	赤城村教育委員会『宮田諏訪原遺跡Ⅰ・Ⅱ』2005
95	宮田愛宕遺跡	洲川市赤城町宮田字愛宕1201-1	古墳時代Hr-FP下樹木祭祀跡	赤城村教育委員会『宮田愛宕遺跡』1998
96	勝保沢中ノ山遺跡	洲川市赤城町勝保沢字前ノ原479-481・中ノ山1318	旧石器時代、縄文時代集落・集石・土壙、古墳時代集落・土壙・炭窯	群馬県埋蔵文化財調査事業団『勝保沢中ノ山遺跡Ⅰ』1988、『勝保沢中ノ山遺跡Ⅱ』1989
97	寺内遺跡	洲川市赤城町勝保沢字寺内110-6	古墳時代集落Hr-FA・Hr-FP下集落、中近世溝(堀)跡、城跡	赤城村教育委員会『寺内(勝保沢城)遺跡発掘調査概報』1986
98	宮田廟ノ木遺跡	洲川市赤城町宮田字廟ノ木1386-4他	古墳時代集落・祭祀跡・却跡	赤城村教育委員会『宮田廟ノ木遺跡』1995
99	樽場前塚古墳	洲川市赤城町樽507	古墳時代後期古墳	洲川市赤城歴史資料館『馬の考古学』2008
100	見立畑井遺跡	洲川市赤城町見立字畑井422-1他	旧石器時代、縄文時代集落・土坑、弥生時代終末～古墳時代初頭集落	赤城村教育委員会『見立畑井遺跡・見立大久保遺跡』1985
101	見立畑井Ⅱ遺跡	洲川市赤城町見立字畑井443-1	古墳時代方形周溝墓・石郭・道跡・樹木痕	赤城村教育委員会『見立畑井Ⅱ遺跡』2005

№	遺跡名	所在地	概要	文献
102	見立相撲遺跡	渋川市赤城町見立字上相撲517・下相撲538	縄文時代集落、弥生時代集落・土坑、古墳時代集落・掘立柱建物・井戸	赤城村教育委員会『見立相撲遺跡Ⅰ・Ⅱ』2005
103	諏訪西遺跡	渋川市赤城町三原田字諏訪上	旧石器時代、縄文時代集落	群馬県埋蔵文化財調査事業団『中畦・諏訪西遺跡』1986
104	中畦遺跡	渋川市赤城町三原田字中畦348	縄文時代集落・土坑、古墳時代古墳	赤城村教育委員会『中畦・諏訪西遺跡　横野地区遺跡群Ⅰ』2000
105	三原田城遺跡	渋川市赤城町三原田字観音前825-1他	縄文時代集落・土壙、古墳時代集落・円墳・土壙墓・掘立柱建物、近世の溝・土壙	群馬県埋蔵文化財調査事業団『三原田城遺跡・八崎城址・八崎塚・上杏梨子古墳』1987
106	房谷戸遺跡	渋川市北橘町八崎字上房谷戸・栗崎	旧石器、縄文時代集落・土壙、古墳時代～平安時代集落・土壙、中世館址	群馬県埋蔵文化財調査事業団『房谷戸遺跡Ⅰ』1989『房谷戸遺跡Ⅱ』1992
107	三原田遺跡	渋川市赤城町三原田	縄文時代集落	群馬県教育委員会・群馬県企業局『三原田遺跡1巻』1980・『三原田遺跡2巻』1990・『三原田遺跡3巻』
108	樽船戸遺跡	渋川市赤城町樽字船戸658他	古墳時代前期集落・祭祀	赤城村教育委員会『樽船戸遺跡』1999
109	樽遺跡	渋川市赤城町樽字山田704-1	弥生時代後期集落	赤城村教育委員会『赤城村内遺跡Ⅱ』1996
110	田尻遺跡	渋川市北橘町八崎字田尻	弥生時代後期集落	北橘村教育委員会『八崎の溝居・田尻遺跡』1999
111	北町遺跡	渋川市北橘町八崎字北町・五輪田	旧石器時代、縄文時代前期・中期・後期集落、古墳時代前期集落	北橘村教育委員会『北町遺跡・田ノ保遺跡』1996
112	田ノ保遺跡	渋川市北橘町分郷八崎字上田ノ保・観音前	縄文時代環状集石遺構、古墳時代Ⅲr-FA下水田・Hr-FP下水田、平安時代AS-B下水田	北橘村教育委員会『北町遺跡・田ノ保遺跡』1996、『田ノ保遺跡Ⅲ』2001
113	水泉寺地区遺跡	渋川市北橘町真壁字西浦・上塚原・下塚原	古墳時代後期～奈良・平安時代集落、古墳	北橘村教育委員会『水泉寺地区遺跡群』1990
114	有馬城ノ上遺跡（有馬城址）	渋川市有馬城ノ上2094他	縄文時代、中世、有馬城の坪の桝形を調査。土塁、濠を確認。	渋川市教育委員会『市内遺跡Ⅴ』1992
115	有馬城ノ上西遺跡	渋川市有馬	縄文時代・陥穴	渋川市教育委員会『石原東遺跡(Ⅲ)』1995

渋川市内には大型の古墳は現在のところ確認されていないが、中小規模の古墳としては、行幸田山遺跡、空沢遺跡、金井丸山古墳(86)、金井諏訪古墳、坂下町古墳群(43)、東町古墳(44)などの５世紀後半に築造された古墳や古墳群が知られている。

また、中期には半島や大陸から馬が搬入されたとされ、白井遺跡群で発見された蹄跡が金井東裏遺跡や金井下新田遺跡でも確認されている。さらに渋川市内では韓式系と呼ばれる半島系の土器が出土し、半島系の積石塚古墳も多く確認されるなど渡来系の文化が認められる。

終末期の主要古墳としては截石切組積の横穴式石室を主体部に有する虚空蔵塚古墳(41)が著名である。また、同時期の群集墳は有馬遺跡南西方の丘陵上に有馬堂山古墳(26)や小倉古墳群(25)が形成されている。

奈良・平安時代

奈良・平安時代になると、有馬寺畑遺跡や有馬遺跡、神宮寺西遺跡などに代表されるよう午王川北側台地上には広範囲にわたり、この時期の集落の形成が認められる。有馬字寺畑周辺では８世紀後半から９世紀初頭の布目瓦が採集されることから有馬廃寺の存在が指摘されてきた。

午王川と茂沢川に挟まれた水田地帯、いわゆる「有馬田圃」中にも有馬条里遺跡や八木原沖田遺跡(５)などで当該期の集落が展開している。有馬条里遺跡という遺跡名が示すように、一帯は、条里制が施行された地域とされている。その後の土地改変により、条里水田の検出はないものの、条里区画の存在を想起させる１町間隔で東西に走る溝の発見などがある。

また、隣接する半田地区においても半田中原南原遺跡や半田薬師遺跡など大規模な集落の形成が明らかとなっている。半田中原南原遺跡では広大な土地を区画する溝が検出され、馬を飼育する牧の遺構と考えられている。『延喜式』にある上野御牧の一つ、「有馬嶌牧」の可能性が考えられている。なお、この地域は古代群馬郡有馬郷の一部に比定されている。

中近世

中近世には足利系渋川氏と源系渋川氏が鎌倉幕府武士として登場する。その後、長尾氏が入り、江戸時代には幕府直轄領、旗本領地になる。有馬西田遺跡の西側丘陵上には有馬城が築城されている。丘陵の崖端を利用して築かれた有馬城ノ上遺跡の遺跡名で、坪の桝形部分の調査が行われている。

また、有馬西田遺跡の西側には1678（延宝６）年開山の曹洞宗泰叟寺が、その南側には若伊香保神社が鎮座している。

第３章　検出された遺構と遺物

第１節　遺跡の概要

ここでは遺跡の概要を示しておきたい。１・２区と遺跡内を区割りし、さらに細分しての調査を行ったが、遺跡立地は前述のように榛名山東麓に位置し、西から東へ傾斜している。調査地は山裾の尾根の下部に位置し、茂沢川、午王川の間にある。このような地勢のため、かなりの回数の水害、それに伴うたびたびの泥流の堆積と土砂崩落等が遺跡内での断面観察によって、明らかとなっている。このため生活の場としては適さず、集落は造られることはなかった。しかしながら、たびたびの洪水にもかかわらず、遺跡調査区内全域で水田を造っていることが確認された。従って本遺跡の概要は各区ごとを述べるのではなく、一括でまずは遺跡の概要として示したい。

洪水による災害を受けた水田面は、今回の調査で確認しただけで５面が分かっている。しかし、水田の耕作土を確認したのが５面で、耕作土がすべて洪水で流されていればさらに多くなることが指摘できる。洪水災害も一方向のみではなく、裾野を流れ、北や南からの水の流れが想定できる。そのような中で、中近世面では排水が必要な湿地となっていたことがうかがえる。非常に不安定な場所で、何度にもわたって復旧活動を繰り返し、水田耕作を行なっていたことがわかる遺跡である。

１区は調査面が、上中下の３段に分かれており、第１面のAs-B直下面を検出したところ、南から北へ向かい調査で検出した平坦面が低くなるという結果が得られた。従って、この状況はAs-B降下以前に山体の崩落や水の流れ等で造られた地勢と考えることができる。

１区の第１面はAs-B堆積下面であるが、この面で確認される溝や井戸等はAs-Bの更に上の洪水層から掘り込まれており、As-B降下以降の遺構である。１区では１面１～７号溝が確認されている。覆土は洪水等の榛名山二ッ岳を給源とするHr-FP混じりの砂礫層で充填される。堆積状況から洪水は山裾をも削り、古墳時代後期に降下したHr-FPをも運んできている。

１区の１～７号溝は、溝の中央に井戸を持つ構造が２基ある。井戸は溝よりも標高が低くなっている。溝には直径10cm、長さ１mの皮付の丸太がおかれ、その壁面に沿い、石を置き、さらにその上に蓋をするように、大きな石が設置されている。また、井戸の中に円形を描くように置かれている石から、井戸内部に丸太が設置され、井戸周囲の石と連動していることがわかる。井戸と溝は同時期の構造物と考えられる。

この構造物は、暗渠排水と考えられ、溝から流れてきた水を溜め、浸透させる排水用の井戸と考えることができる。１・２号井戸はこのような排水を溜める井戸であり、飲料用の井戸ではない。この井戸に溜まる水は、丸太や石の間を流れてきたもので、飲料水には適していない。飲料用の井戸に排水を引き込むことはなく、また、飲料用であれば井戸の縁の石列はこのような粗い置き方はせず、密閉性が必要となろう。このような構造では排水を集めるための井戸とするほうが妥当であると考える。従って溝と排水用井戸は同時期に機能していたものと理解できる。

また、２区２面調査の際に同じ構造を持つ溝が確認されている。１区同様溝の底面に丸太を敷き、左右に石を置き、さらに上を石で覆っている２区８～13号溝である。２区においてはAs-Bが純層で確認されていないため、２面とされたが同じ構造を溝内に持ち、さらに溝内の覆土が同じHr-FP混じりの砂質土であることから１区１～７号溝と同時期の暗渠排水溝と考えるのが妥当である。２区の土層断面から見るとAs-Bはブロックで確認される。これは、洪水等によりAs-Bが流されたためと考えられる。従って、１区のAs-B下面は２区の２面と同じ文化面と考えることができる。２区２面には排水用の井戸は確認されていないが、１・２区での暗渠排水溝の掘り込み面が高いこと等から中近世でも新しい時期が当てられる。２区では溝に付設して造られる排水用井戸の確認はない。排水用の溝と重複することが、時間差というよりも機能上の理由でつながっているものと考えられる。また、丸太の上に大型の石を１列に並べるものと、やや小

さいものを充填するものがあるが、機能的には全く同じものといえる。石の大きさの違いは、構築の時間差であるかもしれないが、同じ意図をもって造られ、構造に変わりはなく、排水を目的とした溝である。溝の中には丸太がなく、石だけのものなどもあるが、排水を必要とした時間幅の中で造られたことに変わりはない。また、暗渠排水の溝の上にも洪水層が認められ、１区１～７号・２区８～13号溝はあまり長い時期を経過したわけではないと考えられる。複数回の洪水被害の間の排水が必要な時期にあたる。暗渠の溝が造られた時はかなり構造的にしっかりしたものを造っており、かなり有効に排水がなされたものと考えられる。１区２号溝内の石や丸太等の間には赤色の酸化面が認められる。土壌の酸化は使用時のものか、埋没後のものか判断できない。時期はAs-B降下以降、掘り込み面の高さ等から中近世に比定される。

３面の調査では泥流層下から３面水田を検出した。水田の痕跡を面的に検出することができた調査区は１区上段の南側部分と２区の２～５区画で、わずかな畔の高まりと段差を検出したにとどまった。この他に１区上段で東西方向に延びる17号溝を検出した。

４面の調査では泥流層下から４面水田を検出した。水田区画が検出されたのは２区の１～４区画である。５区画でも調査地点５の土層堆積状況の観察により、水田面の存在が想定されたが、深所調査となり、調査範囲が狭小となったこと、南北方向に延びる19・20号溝との関係から、面的な確認はできなかった。

５面の調査では泥流下から５面水田を検出した。水田面を検出することができたのは１区上段と２区の１～５区画である。その他に１区上段から現道を横断し２区４区画に延びる東西溝の18号溝を検出した。また、その南側に18号溝とほぼ重複する形で24号溝が検出された。21～23号溝は、１区上段北側で検出された南北溝である。

同じく１区上段の東側調査区境、18・24号溝が調査区外に延びる地点で後述する橋状遺構を検出した。

６面の調査では１区上段で水田区画と25・26号の２条の溝を、２区２区画において水田区画の一部を検出した。

以上が１面から６面までの遺跡の概要であるが、調査時の所見では６面水田の下層にも水田が存在した可能性が指摘されている。

１区上段南側調査区境に設定した調査地点６～８の土層堆積状況の観察で、調査地点６の６層下面、調査地点７の７層上面、調査地点８の８層下面に水田面の存在が想定されたが、面的な検出には至らなかった。同じ水田面の存在は、調査地点19の11層上面においても指摘されている。第７図、第９図で７面水田の注記を付した箇所である。さらに、１区下段に設定した調査地点15でも７面水田よりも層位的に下層となる水田面の存在が想定されている。

第２節　１面

（第13・43図、第５表、PL．１～３・13・31）

第１節で詳述したように１面では１区で土坑１基、溝７条、浅間Ｂ軽石(As-B)下の水田を検出した。また、２区からは溝６条を検出した。各遺構の基本情報は第２～４表に一覧を掲載した。

１区１号土坑(第14図、第４表、PL．３・４)

１区中段の南側に位置する。圃場整備時の重機の影響で、形状はゆがんでおり、長径2.39m、短径1.62m、深さ0.3mを測る。主軸方位はＮ－54°－Ｗである。

出土遺物はなく、覆土中にHr-FPが混じっている。

時期は中近世と考えられる。

１区１号井戸・１号溝

（第15・16図、第２・３表、PL．４～６）

１号井戸は１区１面中段に位置し、１号溝と連動している構造物であると考えられる。規模は長軸2.10m、短軸1.63m深さ0.42mを測る。形状は楕円形を呈し、長軸はＮ－90°を指す。楕円形の内側には石が丸く円を描くように0.4～0.5m、厚さは0.3～0.4mの規模の石で囲んである。

１号溝は、幅0.54～1.24m、深さは0.03～0.40mを測る。暗渠排水溝の構造は、溝の走行方向に向かい底面に２列並行に置かれる。丸太の太さは約10cmで、丸太が動かないように溝の壁に沿い石で固めている。さらに丸太を覆うように石が載せられている。水みちを確保するものと考えられる。

井戸と溝が同時に使われた暗渠と考える根拠は、溝内に敷かれた丸太が井戸を囲む石に達していること、そして、丸太の上にも溝と同様に石を配していることにある。この水みちを通り、排水用の井戸に導水されることが解る。井戸の深さは溝より0.4～0.5mほど低い。また、溝

の壁の掘り込み面は、As-Bより0.2～0.3m高いことが断面で分かっている。このため確認された溝の深さが１号溝では0.03mという状況が起こっている。井戸はさらに深いことが想定される。

１区２号井戸・２号溝

（第15・17図、第２・３表、PL. ４～７）

２号井戸は１区上段に位置し、規模は長軸2.00m、短軸1.74m、深さ0.31mを測る。形態は楕円形を呈し、長軸はＮ－24°－Ｗを指す。１号井戸同様、大型の石で底面を丸く囲んでいる。１号井戸と同じように２号溝に連動している。ただし、１号井戸のように構造的に連動している根拠は薄い。しかし、２号井戸内の円形に並べてある石に向かい２号溝から石が井戸に接するように配してある。２号溝内に設置されている丸太と石の積み方は１号溝と同様である。１号井戸と１号溝の構造と同様と考えることができ、前例と同様の暗渠排水用施設と考えることができる。

１区１面３～７号溝

（第17～19図、第２表、PL. ７～10）

１区１面では暗渠排水用の１・２号溝と２基の井戸の他に５条の溝が検出された。３～７号溝である。４号溝は１区上段西寄りにあり、覆土中には石が充填され、排水用の井戸等の施設は伴わないが、暗渠排水の溝と考えられる。また、２号井戸北東部に３号溝、７号溝が東から２号溝につながっている。この２条の溝の覆土には石が充填されており、暗渠排水用溝と考えられる。

５・６号溝は２号井戸の南に位置し、１号溝や２号溝などの暗渠用の溝とは形態がやや異なり、蛇行している。覆土は黄褐色土が主体の砂礫層で埋まっており、洪水時等の水の流路となったものと考えられる。

２区１面８～13号溝

（第20図、第１表、PL.10・11）

２区１区画では６条の溝が確認されてた。形状・規模は第２表のとおりであり、走行はいずれも東西方向である。構造は、８号溝は溝底面に丸太を置き、周側線囲と上面に石を配すなど１区の暗渠排水溝と同じ構造を持つ暗渠排水溝である。９号溝は石だけの配置で、12号溝は丸太が部分的に確認され、石を配している。８～10号溝は調査区西端でつながっており、排水を集めている。また、11～13号溝は２区中央部でつながっており、排水を集めている。

１区で検出した溝は総じて南北方向に走向を取り、２区は東西方向を指している。２区には排水用の井戸はないが調査区域外東西のどちらかにあったことが想定される。

１面水田（第13図）

１区中段のX＝52,125、Y＝75,020の周辺で浅間Ｂ軽石（As-B）下面から低い畔状の高まりや等高線に沿った段を有する部分を検出した。段差は東西方向に延びるもので、３ケ所確認した。一番北側と中央の段差は南から北に向かって下がるものであった。段差の比高は中央で0.03m、北側で0.06mである。一番南側で検出した段差は北から南に下がるものであった。

浅間Ｂ軽石直下には厚さ1cm未満の洪水層が堆積する部分があり、直径５～８cm程度の丸い窪みを埋めていた。調査の所見として、しばらく耕作されていなかった水田面の凹凸の可能性が指摘されている。それ以外の部分では緩い傾斜や浅い落ち込みはあったものの、全体にほぼ平坦な面をなし、畔など耕作の痕跡は確認できなかった。

第３節　２面

（第21・43図、第５表、PL.12～15・31）

１・２区２面

泥流層下から水田区画を検出した。検出は１区・２区の各調査区全域にわたる。泥流の厚さは２区１区画などの薄いところで0.3m、１区下段などの厚いところで１m程であった。この他に、14～16号、27号溝の溝４条が確認されている。溝の基本情報は第２表に掲載した。

２面水田（第26・27・30図）

２面水田は、各調査区の合計で53区画が確認された。区画全体の形状が確認されたのは水田８と20で、その他は一部分の検出にとどまっている。また、現道を挟んだ１区中段の水田４～10と２区２区画の水田40～45が同一区画になる可能性が考えられることから確認数は見かけ上の数である。

全体の傾向として、畔は、等高線に沿って東西方向に帯状に延びており、南から北に傾斜する緩斜面に棚田状の水田区画が造成されていたことがわかる。１区上段南端の水田26の標高は214.09m、１区下段水田１の標高が209.81mである。両地点の高低差は4.28mである。

１区下段では３区画が検出され、それぞれに水口が確認され、田越しにかけ流して排水がなされていたことがわかった。水口の幅は0.41m、取排水部分は水流により削られ凹みがつくられていた。

１区中段部分では水田３～11の区画を検出した。前述のとおり、棚田状に造成されており、水田３と11の両端の直線距離31.84mに対し、高低差は1.23mであった。西側に迫る丘陵斜面との境には幅0.65mほどの道状の平坦面が廻り、水田８の西側の上幅0.3m、下幅0.9mの畔状の高まりに接続していた。

個々の区画の状況を見ると、南北方向の長さが水田４、4.62m、水田５、3.24m、水田６、3.38m、水田７、3.04m、水田９、3.36mと比較的均等に区分されていることがわかる。水田６の残存長は11.20m、水田７の残存長は11.22mである。

面積は、水田８が22.18㎡、水田20が14.52㎡である。残存面積は水田６で37.58㎡、水田７で28.41㎡である。

畔の規模は、比較的均等であった。いくつかを提示すると、水田６と７の間の畔は、上幅0.12m、下幅は0.6m、水田面との比高差は水田７側で0.01～0.04m、水田６側で0.04～0.1mである。水田７と水田９の間の畔は上幅0.13m、下幅0.54m、比高差は、水田７側で0.1m、水田９側で0.05mを測った。

１区上段では間を16号溝が貫通していたが、合計15の区画が確認された。この部分の区画には規則性が認められなかったが、水田15と16の間の南北方向の畔は上幅0.44m、下幅0.95mと他と比較して幅広いものであった。

水田17と19、水田12と13の間には水口が見られた。

２区の調査部分では、２～４区画で検出された区画は段差が確認されたものが大半であった。１区画では東西に帯状に延びると考えられる区画が高低差1.17mの間で、９段、11区画検出された。２区画では高低差0.95mの間で、７段、７区画が確認された。

２面水田面の一部からは、足跡や直径10cm前後の丸い落ち込みが無数確認された。丸い落ち込みについては蹄跡ではなく、稲株の痕跡である可能性が考えられている。

１区上段６の水田床土から平安時代、９世紀から10世紀初頭の所産とされる須恵器椀(第43図６)が出土しており、２面水田の耕作年代の上限を浅間Ｂ軽石の降下年代に、下限をこの土器の製作年代とすることできる。

１区14号溝(第22図、第２表、PL.15)

１区下段北東部に位置し、南東流する。２面の水田面を壊しており水田耕作面より新しい。洪水時の流水の痕跡である可能性が高い。覆土にはHr-FPが混じる。

２区15号・27号溝(第25図、第２表、PL.16)

27号溝は２区２区画に南北方向に検出された。27号溝の西に東西方向の15号溝がつながっている。両溝ともに水田面を壊していることから水田を耕作した時期より新しいものである。

１区16号溝(第23・24図、第２・５表、PL.16・31)

16号溝は１区南部を南北方向、その後西に走行を変える。検出長は35.2mである。底面には水流によって形成された多数の窪みが検出され、直径１mを超える大礫も突き刺さっていた。

本溝は現道を挟んだ２区においても１～３区画で検出された。１区に続く２区３区画では調査区西端で、東側法面の一部が確認された。２区画では略南北方向に弱く蛇行しする約22.2mを検出した。１区画では上層からの削平を受け、掘り込みが確認できなかったが、約10.95mを検出し、東側調査区外に及んでいた。全体の推定長は、105.95mである。底面の標高は、１区南端の最高地点で213.15m、２区１区画北東端で210.37mであり、両地点の高低差は2.78mである。

上記14・15号溝の覆土には１面溝と同じHr-FPが混じる覆土を持ち、このことからも水田より新しいと考えられる。

第４節　３面

(第28図、PL.16・17)

３面の調査では１区上段面に水田の畔、17号溝、２区２～５区画で水田の畔を確認した。

17号溝の基本情報は第２表に掲載した。

３面水田(第29・31図)

調査区合計で20区画の畔や段差を検出した。１区上段では南側部分で南東から北西方向に傾斜する地形に則した区画が４区画分検出された。水田面と畔は、淡い灰黄褐色の砂礫によって埋没していたが、畔は上からの耕作により削平され、残存状況は不良であった。畔の幅は0.4mほどである。

２区２区画では高低差0.72mの間で８段８区画が確認

された。畔に規模は、水田６と７の間で、上幅0.12m、下幅0.44m。高さは0.02 ～ 0.04mある。２区３区画では狭い調査区の中に４区画の水田面が確認された。

水田耕作土は５面の耕作土と比較して黒味が薄く、２面水田より黒味が強いものであった。

水田面の標高は、２区４区画の水田20で213.47m、２区１区画北端の水田５で210.88mと、両地点の高低差は2.59mである。

17号溝（第29図・第２表、PL.17）

１区上段に位置し、東西方向に走る。東ではやや北に向かう。西側一部は流水により、壊されている。

第５節　４面

（第33図、PL.17・18）

１区内には遺構は確認されていない。

２区１～４区画で水田の畔を確認した。１区画内では東西南北、２区画内では北西から南東、３区画内では南北、４区画内では東西に畔を確認した。

５区画内で19・20号溝を確認した。２条の溝の基本情報は第２表に掲載した。

４面水田（第32・34図）

２区１区画～４区画の調査で合計18区画の水田を検出した。水田面は、厚いところで、厚さ数cmの淡い灰黄褐色の砂礫に覆われていた。１区画南側寄りで６区画、２区画で８区画と比較的良好な区画を検出することができた。

２区画では長さ21.36m、高低差0.93mの調査区の中に７段８面の区画を確認することができた。水田10～14までの畔の走行がほぼ平行に走行しており、ここでも地形の傾斜に則した水田の造成が行われていたことがわかる。水田11、水田12、水田13の南北方向の長さは、それぞれ、3.12m、2.44m、3.48mである。

畔の規模は、水田10と11の間の上端が0.22m、下端が0.58m、11と12の間が上端0.26m、下端0.75mである。畔は上からの耕作によって削平され、低くなっていた。高さは、水田10と11の間で0.11m、11と12の間で0.12mである。

水田耕作土は、３面水田よりも黒味が強く、５面水田に近いもので、若干淡い色調であった。２区１区画南東隅には水田面に多数の大型礫が顔を出していた。２区画の北側寄り、水田７～10の面にも礫が放置されたままの状態で耕作が行われていたと考えられる状況が確認できた。

水田面の標高は、２区４区画南端寄りの水田18で212.84m、１区画の水田１北東寄りで210.26mを測り、両地点の高低差は2.58mとなる。

19号・20号溝（第34図・第１表、PL.18）

南北方向に並走するように２条に走る溝が確認されている。

第６節　５面

（第35・43・44図・第５表、PL.18・19・31）

１区上段・２区１～５区画で水田面を検出した。溝は１区上段と２区４区画内で東西方向に走る18号溝を検出した。１区上段において21～24号溝を確認した。各溝の基本情報は第２表に掲載した。

５面水田（第38・39図、PL.20・21・26・27）

１区上段と２区の各区画で検出された。区画数は合計で45区画である。水田面は、厚さ約0.1 ～ 0.2cmの灰黄褐色の砂礫に覆われていた。区画は、等高線に沿った東西方向の畔を基調としている。

１区上段部分では15区画が検出された。東西方向に帯状を呈すると考えられる水田面を、南北方向に直角に交差する畔で区画している。水田３の北端と水田15の南端の高低差は0.51mである。足跡の残存状況から水田面はさらに北側に広がっていたと考えられる。

水田３～12までの南北方向の長さは水田2.0m（水田９）～ 3.44m（水田４）である。西側の区画はあとわずかで区画の西辺に達すると考えられるが、残存長は水田５で13.16m、水田７で12.4m、水田９で12.56mを測る。残存面積は、水田５が28.51㎡、水田７が25.07㎡、水田９が25.99㎡である。

畔の規模は、水田３と５の間で上幅0.16m、下幅が0.48m、水田９と11の間で上幅0.16m、下幅が0.42mである。水田面との比高差は水田３と５の間で0.07～0.11m、水田９と11の間で0.14mである。

水田面は平坦に仕上げられているが、高低差が認められるものも多くあった。いずれの区画においても足跡と丸い窪みが多数残されていた。残された足跡からは、畔を超えて、複数の区画を横断したような形跡はなく、区画内

を東西方向の畔に沿うように動いた様子が多く見られた。他の調査区においても足跡の検出状況は同様である。

水口は、１区の調査で、２種類の設置方法があることが確認された。一つは畔が交差する地点に、南西から北東の区画に向けて、斜めに給排水する形をとるものである。もう一つは東西方向の畔の途中を切って南側の区画から北側の区画へ給配水する形をとるものである。前者は、水田５から４へと、水田９から10へ水口を開けている。後者は、水田５と７、水田６と８、水田10と12の間に水口が設置されているものである。水口近くに礫が置かれることはなかった。２区の調査区画からは水口が確認されていない。

１区上段北西部分では水田１の東側で、南北方向の畔と畔脇を延びる23号溝が確認された。畔は、上幅0.22mのものが23号溝の両脇から検出されている。

２区においても等高線に沿って、東西方向を基調とする区画が検出された。１区画では東西方向の畔や段差と交差する南北方向の畔や段差が検出された。確認された区画は14区画である。東西方向の畔や段差にはほぼ一定の走行が見られるが、水田20や22は段差の東端が弧を描き始めている。調査区内の水田面の高低差は1.02mである。

２区画では畔の残存状況が悪く、南北方向の畔と北西方向から南東方向に延びる段差を確認した。区画の短軸方向の長さは、水田35で3.4m、水田36で2.68mである。段差の高さは、0.07 ～ 0.09mである。調査区内の水田面の高低差は0.89mである。

１区画、２区画とも水田面に多数の礫が頭を出しており、４面水田にもまして、礫だらけの耕土で耕作が行われていたことがわかる。

２区５区画水田45の標高は212.95m、１区画水田16の標高は209.37mで、両地点の高低差は3.58mである。

18号溝（第36図・第２表、PL.22～25）

18号溝は１区上段から東西に走り、２区４区画へ続く。18号溝は北から南に向かい走る21～23号溝に合流し、標高差から見ると２区への排水溝でもあり、給水溝とも考えることができる。

21～23号溝（第37図・第２表、PL.22・26）

21号溝は１区上段に位置し、南北に走る。18号溝に合流する。水田へ給排水用の溝の可能性が指摘できる。

橋状遺構・24号溝

（第36図・第２・５表、PL.25・31）

１区上段18号溝が東壁で調査区外へ向かう断面際に橋脚と考えられる構造物が検出された。18号溝の南には一部、24号溝が確認された。２条の溝が重なるような位置に、垂直に打ち込まれた2本の木柱（第44図11・12）と板材が出土している。

木柱は丸太をそのまま使用し、地面に打ち込み埋まっている

部分は樹皮が付いたままであった。これに対し地表に出ている部分は鉄製工具のようなもので細かく表面を削り、滑らかな面を出している。また、南側24号溝内に転倒した状態で製品が確認された（第44図13）。丸太の中央部を細く削りだしたもので、用途不明である。法量は第５表のとおりである。

第７節　６面

（第40・43図、第５表、PL.・28・31）

１区上段で水田と溝を２条確認した。

２区２区画においても水田区画を検出した。溝の基本情報は第２表に掲載した。

６面水田（第42図）

１区上段の北側部分で、統一性に欠ける区画10区画を検出した。上位からの攪乱を受け、残存状態は不良であった。水田４は長軸の長さ5.82m、短軸の長さ3.78mと矩形に近い平面形状であった。面積は18.76㎡である。

２区では２区画の南東部分で３区画の段差を検出した。水田12の南北方向の残存長が2.48mである。段差の比高さ0.08mであった。

25・26号溝は掘り込みの南北両側、水田区画との間に畔が取り付いている。このことから、両溝は、６面水田と同時期に存在していたものと考えられる。

25・26号溝（第41図・第２表、PL.28）

25号溝は東西方向に走り、調査区外へと延びる。覆土中にはHr-FPを含み、下半はシルト層が主体である。

26号溝は西側で北と南側に分流し、東西方向へ走る。覆土にHr-FP、下半はシルト層を持つ。

６面からは土師器杯が出土している（第43図10）。

第２表　溝計測表

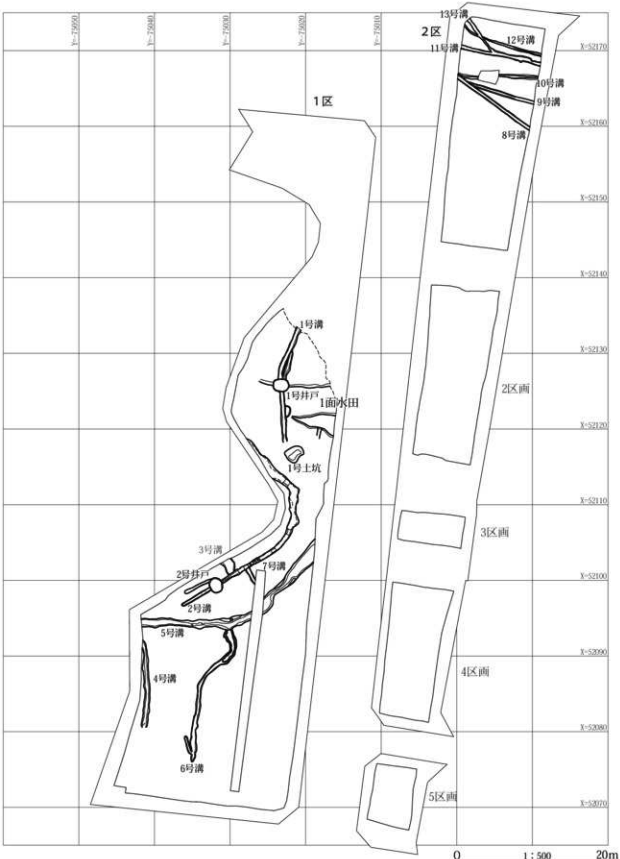
区	面	番号	位置(グリッド)	規模(m)			走行方向	備考	挿図番号
				長	幅	深			
1	1	1	X=52,118～52,133 Y=-75,020～-75,023	15.45	0.54 ～ 1.24	0.03 ～ 0.40	N-10°-E	１号井戸と併存	第16図
1	1	2	X=52,096～52,118 Y=-75,020～-75,036	32.08	0.44 ～ 0.20	0.07 ～ 0.40	N-50°-E N-40°-W	２号井戸、３・７号溝と重複	第17図
1	1	3	X=52,100～52,103 Y=-75,029～-75,031	1.86	0.90 ～ 1.56	0.21	N-20°-W	２号溝と併存	第17図
1	1	4	X=52,080～52,092 Y=-75,040・-75,041	11.06	0.44 ～ 0.84	0.03 ～ 0.14	N- 5°-W		第18図
1	1	5	X=52,093～52,105 Y=-75,018～-75,043	26.50	0.68 ～ 1.81	0.17 ～ 0.47	N-40°-E	６号溝と重複	第19図
1	1	6	X=52,076～52,093 Y=-75,029～-75,038	19.42	0.18 ～ 0.82	0.04 ～ 0.14	N-35°-E	５号溝と重複	第18図
1	1	7	X=52,100～52,101 Y=-75,026～-75,027	2.15	0.48 ～ 0.62	0.12	N-30°-W	２号溝と重複	第17図
2	1	8	X=52,159～52, 166 Y=-75,990～-75,999	11.75	0.46 ～ 0.58	0.09 ～ 0.80	N-55°-W	９号・10号溝と重複	第20図
2	1	9	X=52,161～52,166 Y=-75,989～-75,998	9.16	0.38 ～ 0.50	0.02 ～ 0.60	N-73°-E	８号溝と重複	第20図
2	1	10	X=52,166・52,167 Y=-75,9879～-75,999	10.60	0.30 ～ 0.61	0.23	N-90°	８号溝と重複	第20図
2	1	11	X=52,168～52,170 Y=-75,988～-75,999	10.71	0.36 ～ 0.86	0.02 ～ 0.28	N-80°-W	13号溝と重複	第20図
2	1	12	X=52,169～52,173 Y=-75,988～-75,998	11.10	0.14 ～ 0.40	0.13 ～ 0.27	N-70°-W	13号溝と重複	第20図
2	1	13	X=52,169～52,174 Y=-75,994～-75,998	5.40	0.20 ～ 0.44	0.47	N-35°-W	11号・12号溝と重複	第20図
1	2	14	X=52,144～52, 157 Y=-75,014～-75,025	17.32	1.30 ～ 1.58	0.14 ～ 0.50	N-60°-W		第22図
2	2	15	X=52,133・52,134 Y=-75,001～-75,003	1.70	0.50 ～ 0.66	0.12	N-90°	27号溝と重複	第25図
1・2	2	16	X=52,071～52,154 Y=-74,992～-75,041	105.95	2.00 ～ 6.80	0.25 ～ 1.07	N-10°～19°-E N-80°-W	１・２区に渡って検出。 長さは未調査部分含む。	第23・24図
1	3	17	X=52,085～52,089 Y=-75,021～-75,040	19.00	0.46 ～ 0.72	0.11 ～ 0.22	N-70°-E N-90°		第29図
1	5	18	X=52,085～52,090 Y=-75,004～-75,039	20.04	0.56 ～ 1.90	0.08 ～ 0.80	N-80°-W	21号・23号・24号溝と重複	第36図
2	4	19	X=52,069～52,073 Y=-75,007～-75,009	4.33	0.40 ～ 0.64	0.07 ～ 0.09	N-10°-E		第34図
2	4	20	X=52,069～52,072 Y=-75,007・-75,008	2.78	0.26 ～ 0.43	0.12 ～ 0.24	N-15°-E		第34図
1	5	21	X=52,090～52,093 Y=-75,038・-75,039	3.32	0.40 ～ 0.70	0.15 ～ 0.18	N-30°-W	18号溝と重複	第37図
1	5	22	X=52,093～52,095 Y=-75,034～-75,038	3.24	0.70 ～ 0.98	0.21 ～ 0.33	N-50°-E		第37図
1	5	23	X=52,089～52,097 Y=-75,032～-75,034	8.38	0.44 ～ 0.68	0.17 ～ 0.25	N-20°-W	18号溝と重複	第37図
1	5	24	X=52,084～52,087 Y=-75,022・-75,023	2.38	0.74	0.30	N- 7°-W	18号溝と重複	第36図
1	6	25	X=52,098～52,100 Y=-75,021～-75,030	8.48	0.54 ～ 0.62	0.03 ～ 0.14	N-85°-E		第41図
1	6	26	X=52,086～52,094 Y=-75,021～-75,038	23.26	0.24 ～ 0.82	0.04 ～ 0.27	N-65°-E N-10°-E		第41図
2	2	27	X=52,120～52,137 Y=-75,000～-75,005	18.38	0.30 ～ 1.10	0.02 ～ 0.12	N-25°-E N-10°-E	15号溝と重複	第25図

第３表　井戸計測表

区	面	番号	位置(グリッド)	規模(m)			主軸方位	備考	上面形態	挿図番号
				長径	短径	深				
1	1	1	X=52,126 Y=-75,023・-75,024	2.10	1.63	0.42	N-90°	１号溝と併存	楕円形	第15図
1	1	2	X=52,099・52,100 Y=-75,036・-75,037	2.00	1.74	0.31	N-24°-W	２号溝と併存	楕円形	第15図

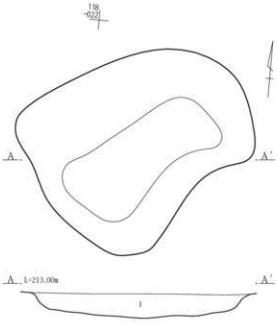
第４表　土坑計測表

区	面	番号	位置(グリッド)	規模(m)			主軸方位	備考	上面形態	挿図番号
				長径	短径	深				
1	1	1	X=52,116・52,117 Y=-75,021・-75,022	2.39	1.62	0.30	N-54°-W		楕円形	第14図


X=79950
X=79940
X=79930
X=79920
X=79910
X=52170
X=52160
X=52150
X=52140
X=52130
X=52120
X=52110
X=52100
X=52090
X=52080
X=52070
1区
2区
13号溝
12号溝
11号溝
10号溝
9号溝
8号溝
1号溝
1号井戸
1面水田
1号土坑
2区画
3区画
4区画
5区画
3号溝
2号井戸
7号溝
2号溝
5号溝
4号溝
6号溝
0
1:500
20m

第13図　１面全体図

1区1面1号土坑

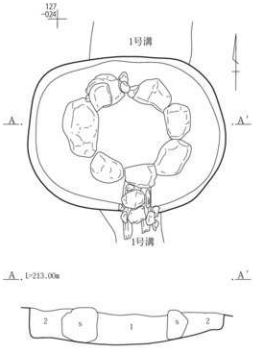


1区1面1号土坑SPA-A'
1　黒褐色土(10YR3/2)　角礫及び直径１～２cm程のHr-FP粒を両方合わせて10%程度含む。しまりやや良い(圃場整備時に重機で踏まれ、硬化している)。

0　1:40　1m

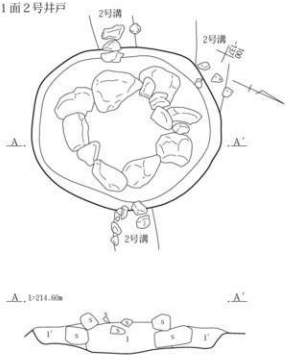
第14図　1区1面1号土坑

1区1面1号井戸



1区1面1号井戸SPA-A'
1　褐灰色土(10YR6/1)　砂及び同シルト層(自然堆積土)層粒の砂とシルトの互層。しまり悪い。
2　褐灰色土(10YR6/1)　黒色土ブロックを７%程含む。１層よりしまり良い(埋め土)。

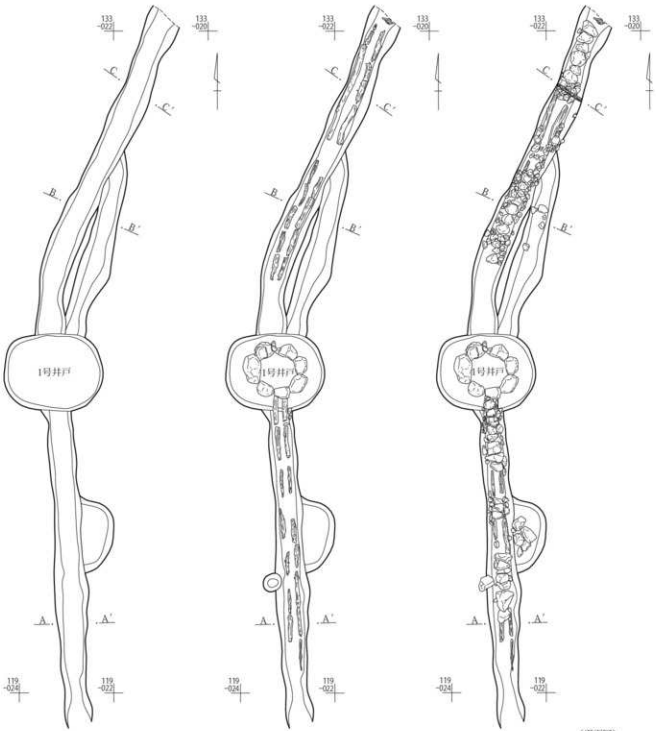
1区1面2号井戸



1区1面2号井戸SPA-A'
1　灰黄褐色土(10YR5/2)　直径５～10mm程のHr-FP粒を７%程度含む。しまり良い。
1'　1層とほぼ同じだが、黒色土を３%程含む。

0　1:40　1m

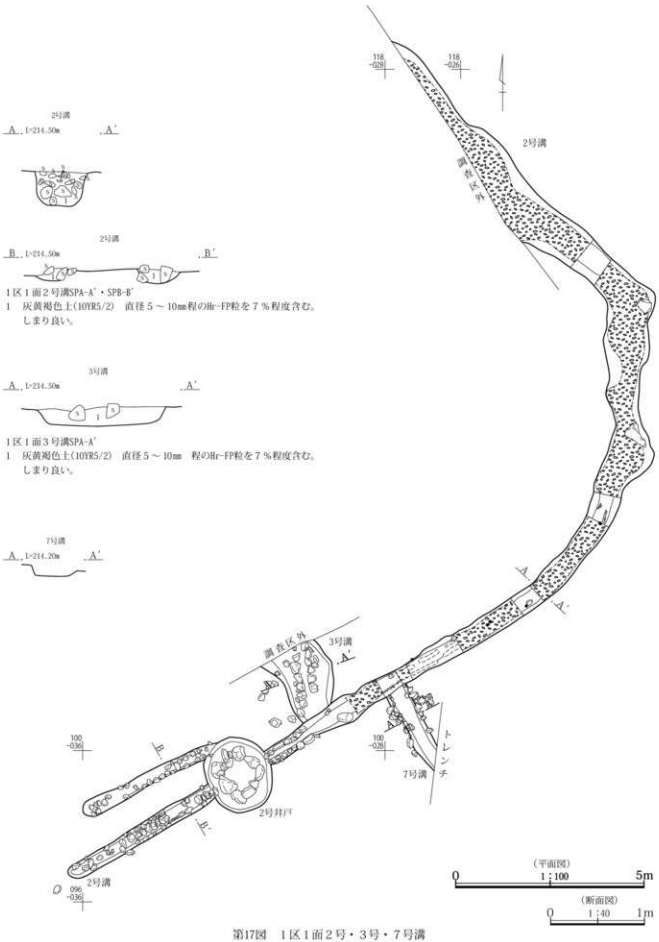
第15図　1区1面1号・2号井戸



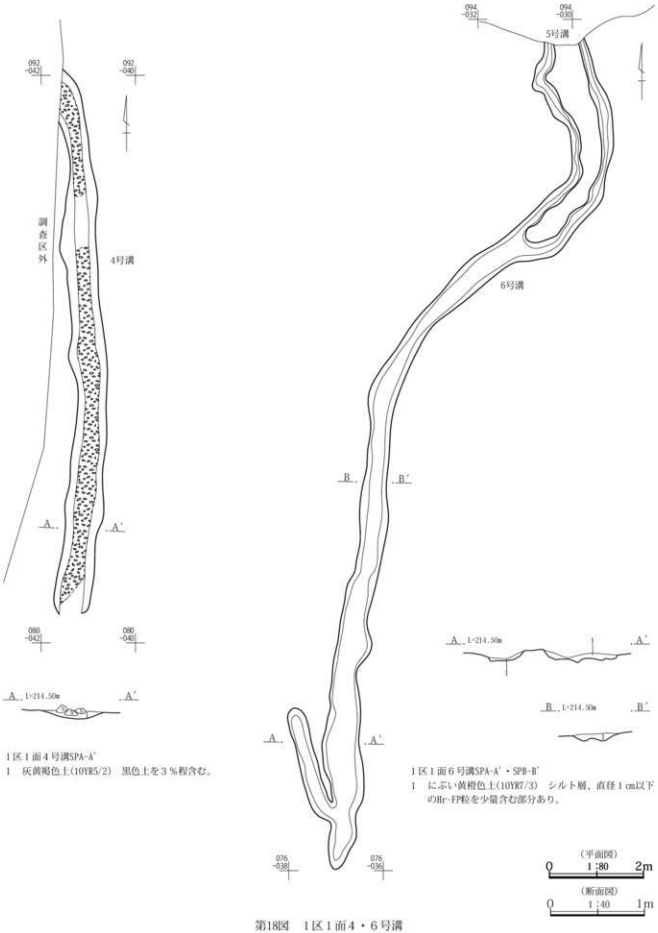
１区１面１号溝SPA-A′～SPC-C′
1　灰黄褐色土(10YR5/2)　砂礫層。直径１cm前後のHr-FP粒を10%程含む。

（断面図）
0
1:40
1m

第16図　１区１面１号溝



第17図　１区１面２号・３号・７号溝



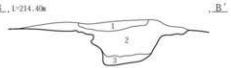
１区１面４号溝SPA-A′
1　灰黄褐色土(10YR5/2)　黒色土を３％程含む。

１区１面６号溝SPA-A′・SPB-B′
1　にぶい黄橙色土(10YR7/3)　シルト層、直径１cm以下のHr-FP粒を少量含む部分あり。

第18図　１区１面４・６号溝

1区1面5号溝SPA-A'

1　褐灰色土(10YR5/1)　砂質。細粒。しまり悪い。
2　黒色土(10YR2/1)　砂礫。直径1cm前後のHr-FP粒を10%程含む。



1区1面5号溝SPB-B'

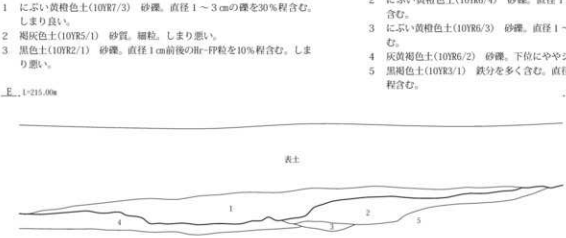
1　にぶい黄橙色土(10YR7/3)　砂礫。直径1～3cmの礫を30%程含む。しまり良い。
2　褐灰色土(10YR5/1)　砂質。細粒。しまり悪い。
3　黒色土(10YR2/1)　砂礫。直径1cm前後のHr-FP粒を10%程含む。しまり悪い。

1区1面5号溝SPC-C'

1　にぶい黄褐色土(10YR7/3)　砂礫。直径1～3cmの礫を30%程含む。しまり良い。
2　にぶい黄褐色土(10YR5/3)　直径1～2mmのHr-FP粒を3%程含む。やや粘性あり。
3　黒褐色土(10YR3/1)　粘性あり。
4　橙色土(5YR6/8)　砂礫。鉄錆多く、茶色味帯びる。直径1～3cmの礫を30%程含む。
5　褐灰色土(10YR5/1)　細粒砂がラミナ状に堆積。しまり弱い。

1区1面5号溝SPE-E'

1　黒褐色土(10YR3/2)　直径1～5cmのHr-FP粒を15%程含む(埋没土)。
2　にぶい黄橙色土(10YR6/4)　砂礫。直径1～10cmのHr-FP粒を10%程含む。
3　にぶい黄橙色土(10YR6/3)　砂礫。直径1～3cmのHr-FP粒を50%程含む。
4　灰黄褐色土(10YR6/2)　砂礫。下位にややシルト質部分あり。
5　黒褐色土(10YR3/1)　鉄分を多く含む。直径5mm前後のHr-FP粒を1%程含む。



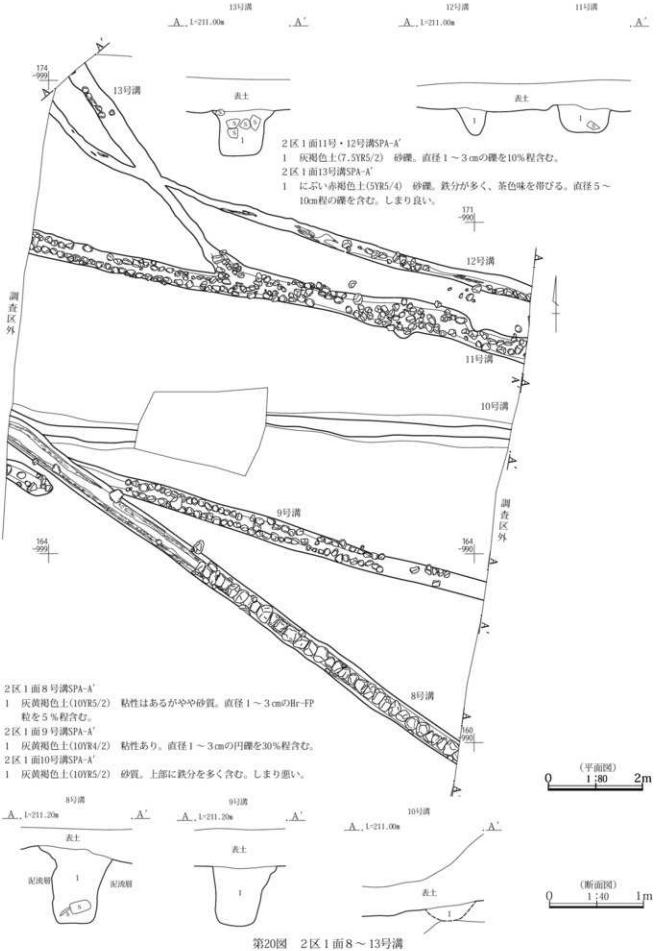
1区1面5号溝SPD-D'

7　褐灰色土(10YR5/1)　細粒砂がラミナ状に堆積。しまり弱い。

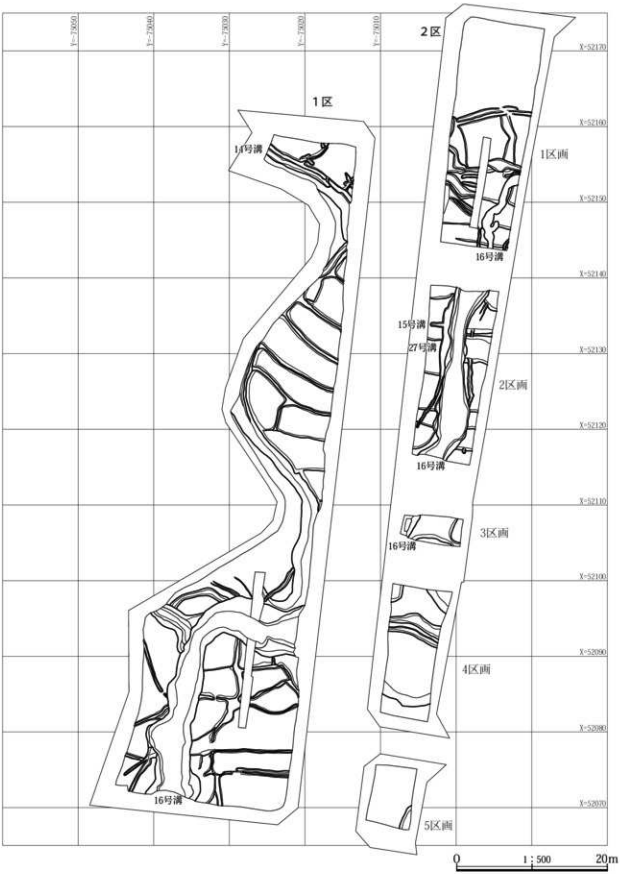
(平面図)
0　1:100　5m

(断面図)
0　1:40　1m

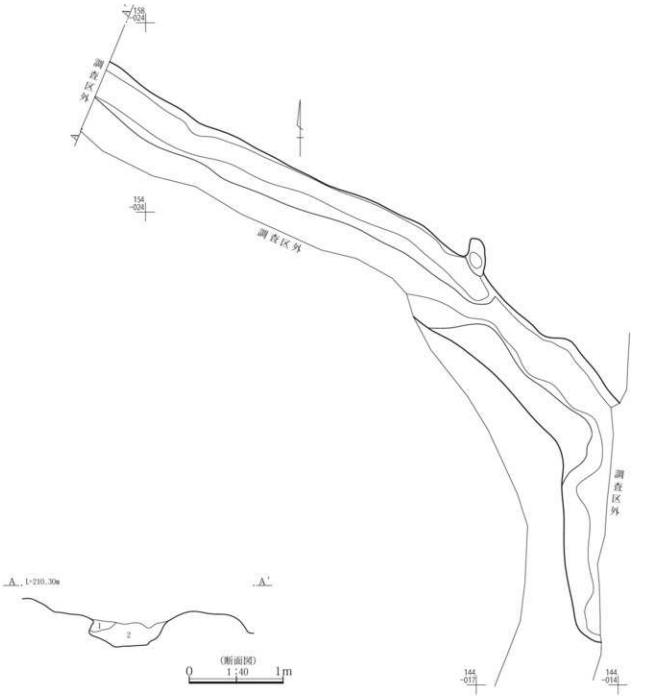
第19図　1区1面5号溝



第20図　２区１面８～13号溝


Y=-79500
Y=-79490
Y=-79480
Y=-79470
Y=-79460
Y=-79450
2区
1区
X=52170
X=52160
X=52150
X=52140
X=52130
X=52120
X=52110
X=52100
X=52090
X=52080
X=52070
14号溝
1区画
16号溝
15号溝
27号溝
2区画
16号溝
3区画
16号溝
4区画
16号溝
5区画
0
1：500
20m

第21図　２面全体図

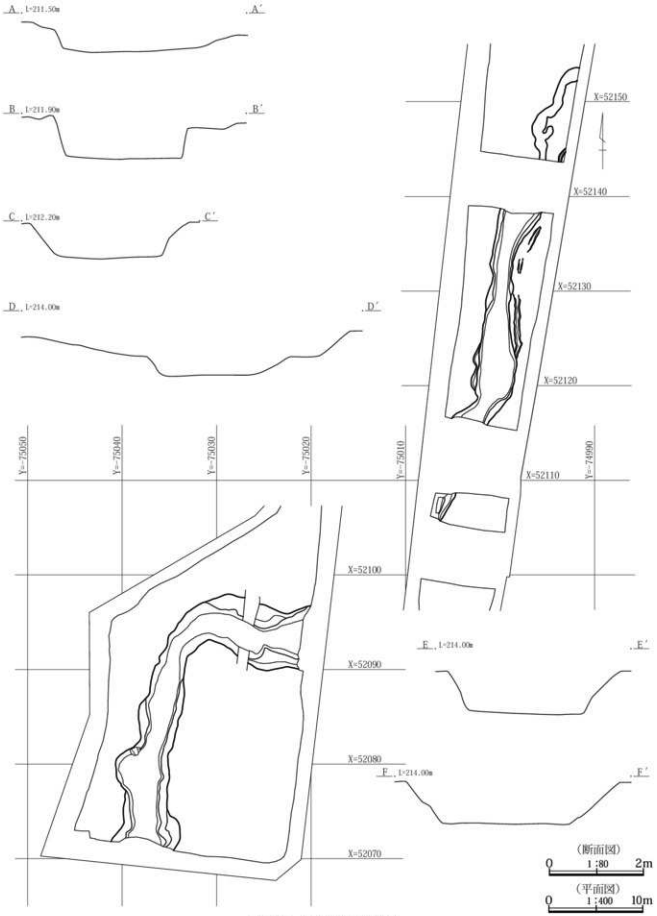


1区２面14号溝SPA-A'

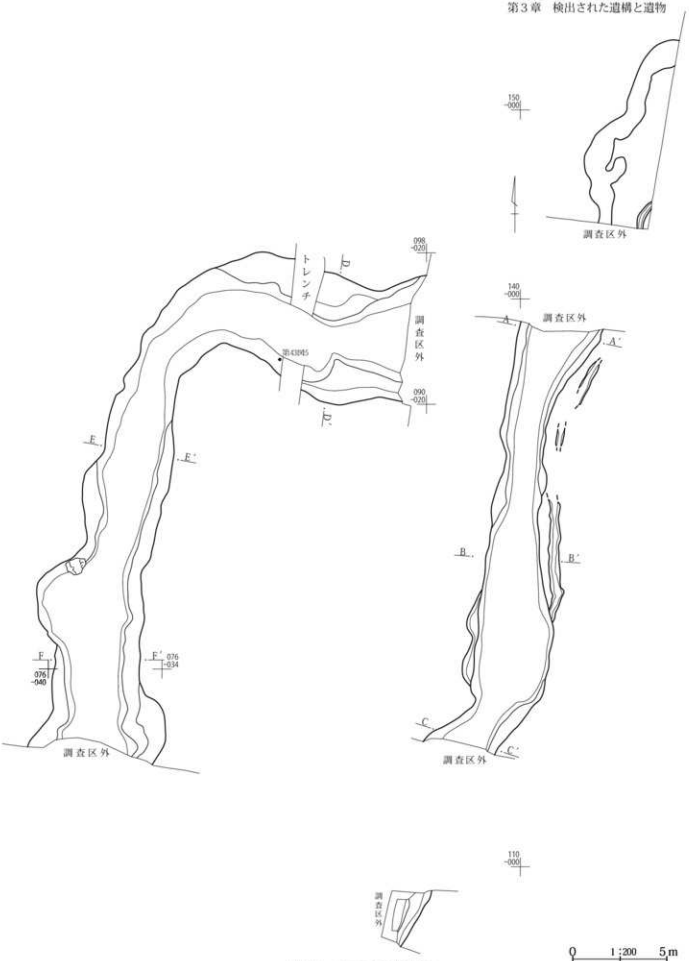
1　褐灰色土(10YR4/1)　粘性あり。直径１cm程のHr-FP粒を３％程度含む。

2　灰黄褐色土(10YR5/2)　砂礫。直径１cm程の礫を10％程度含む。しまり悪い。

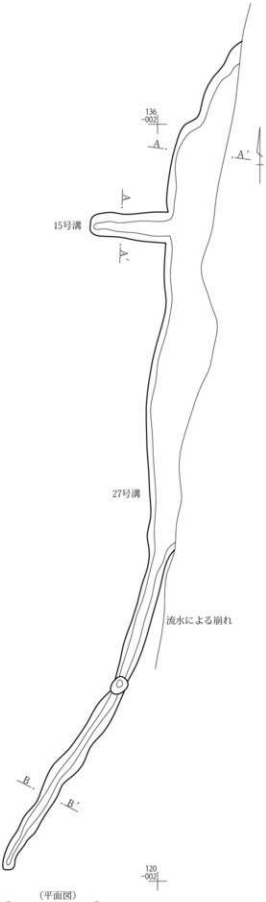
第22図　１区２面14号溝

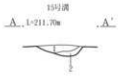


第23図　１区２面16号溝(１)



第24図　１区２面16号溝（２）



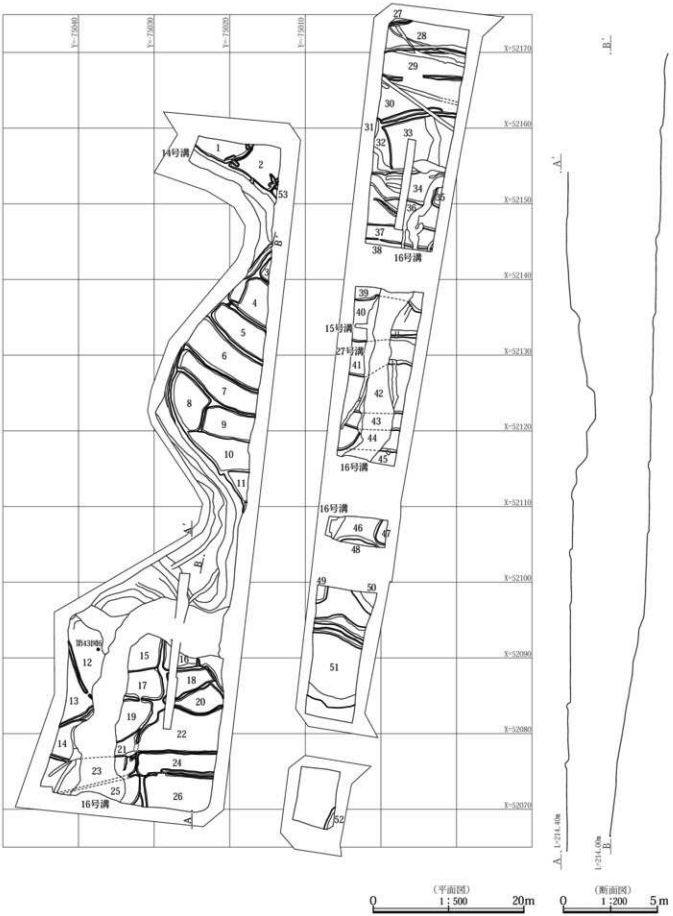


２区２面15号溝SPA-A'
1　黒褐色土(10YR3/2)　直径１～３cmのHr-FP粒を７％程含む。しまり良い。
2　明黄褐色土(10YR6/6)　砂礫。直径１～３cmのHr-FP粒を15％程含む。

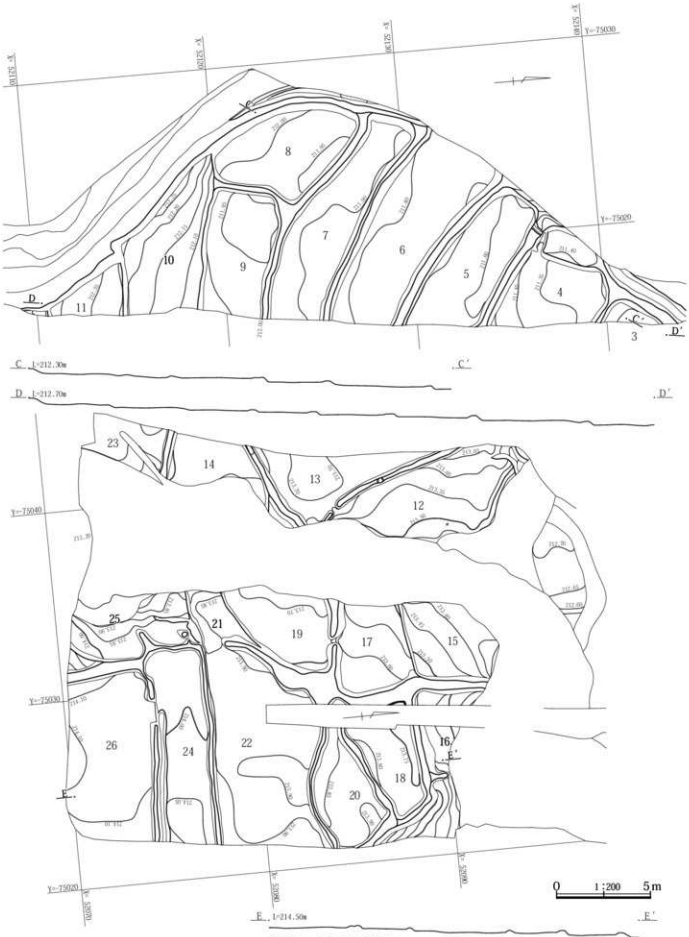
（平面図）
0　1:80　2m

（断面図）
0　1:40　1m

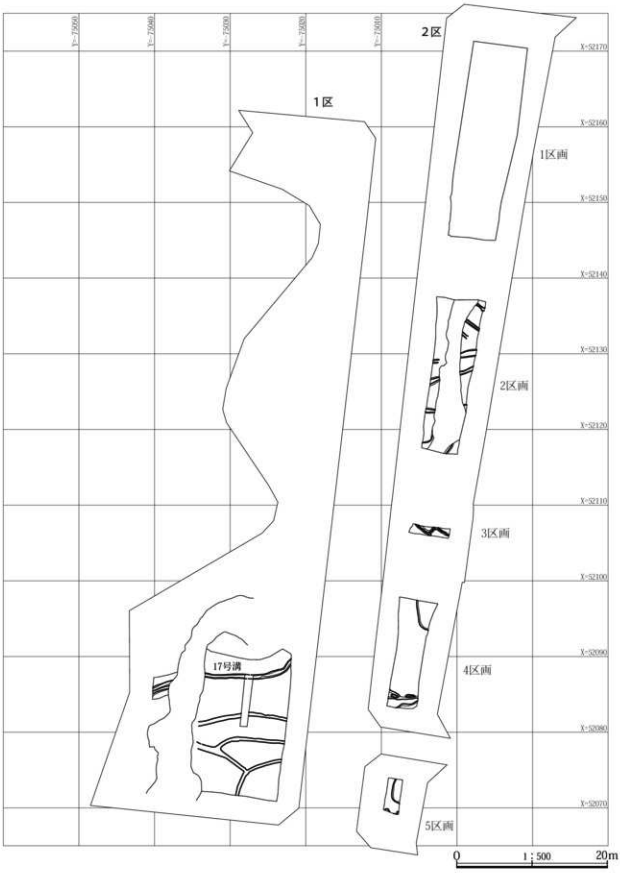
第25図　２区２面15・27溝


Y=79800
Y=79900
Y=79920
Y=79910
X=52170
X=52160
X=52150
X=52140
X=52130
X=52120
X=52110
X=52100
X=52090
X=52080
X=52070
14号溝
16号溝
15号溝
27号溝
第43図
A
A'
B
B'
A　L=214.40m
B'　L=214.00m
（平面図）
0　1:500　20m
（断面図）
0　1:200　5m

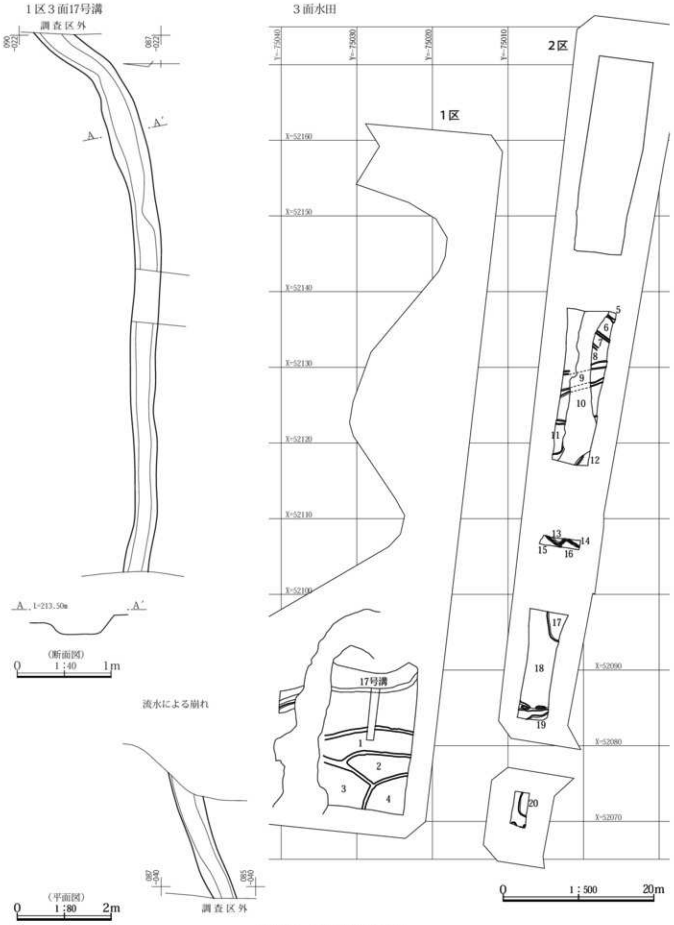
第26図　２面水田



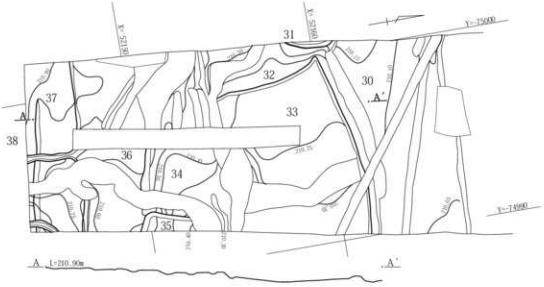
第27図　２面水田部分図


Y=-7990
Y=-7980
Y=-7970
Y=-7960
Y=-7950
2区
1区
X=-52170
X=-52160
X=-52150
X=-52140
X=-52130
X=-52120
X=-52110
X=-52100
X=-52090
X=-52080
X=-52070
1区画
2区画
3区画
4区画
5区画
17号溝
0
1：500
20m

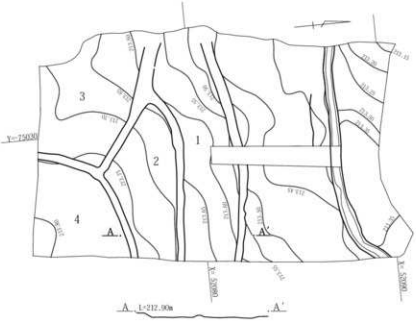
第28図　３面全体図



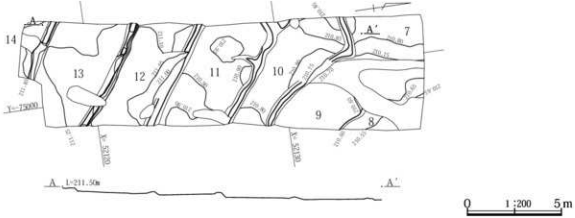
第29図　１区３面17溝・水田



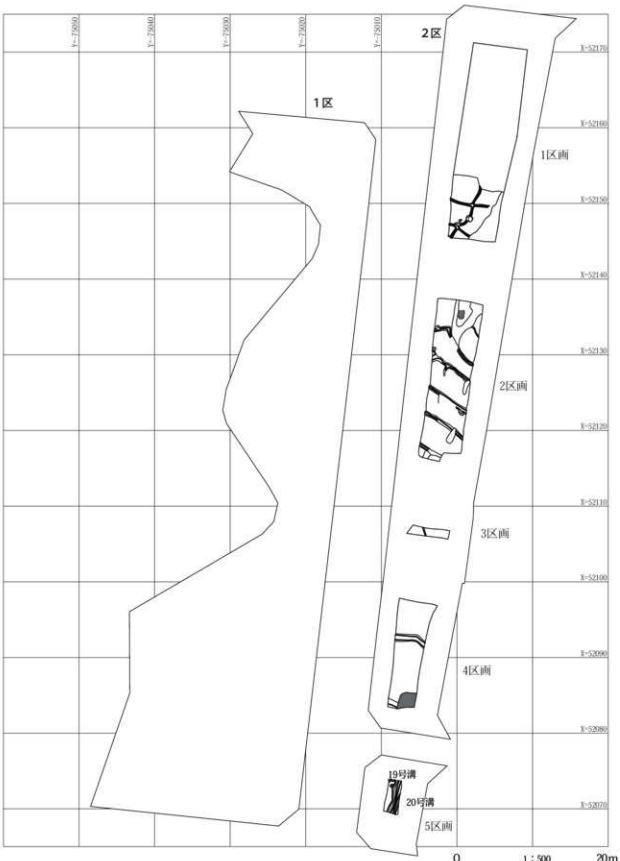
第30図　２面水田部分図



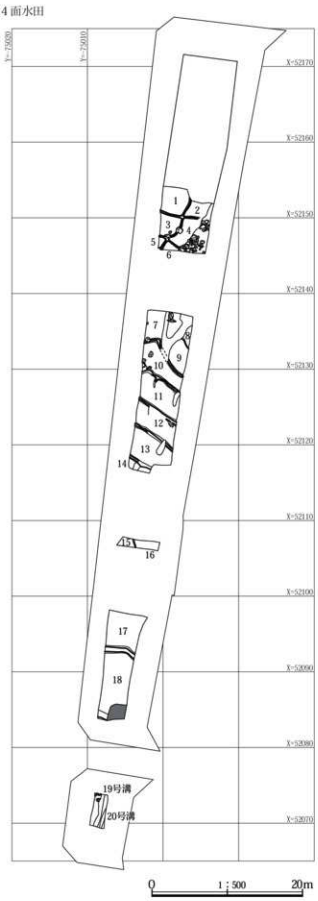
第31図　３面水田部分図



第32図　４面水田部分図


Y=75990
Y=75980
Y=75970
Y=75960
Y=75950
X=52170
X=52160
X=52150
X=52140
X=52130
X=52120
X=52110
X=52100
X=52090
X=52080
X=52070
1区
2区
1区画
2区画
3区画
4区画
5区画
19号溝
20号溝
0
1：500
20m

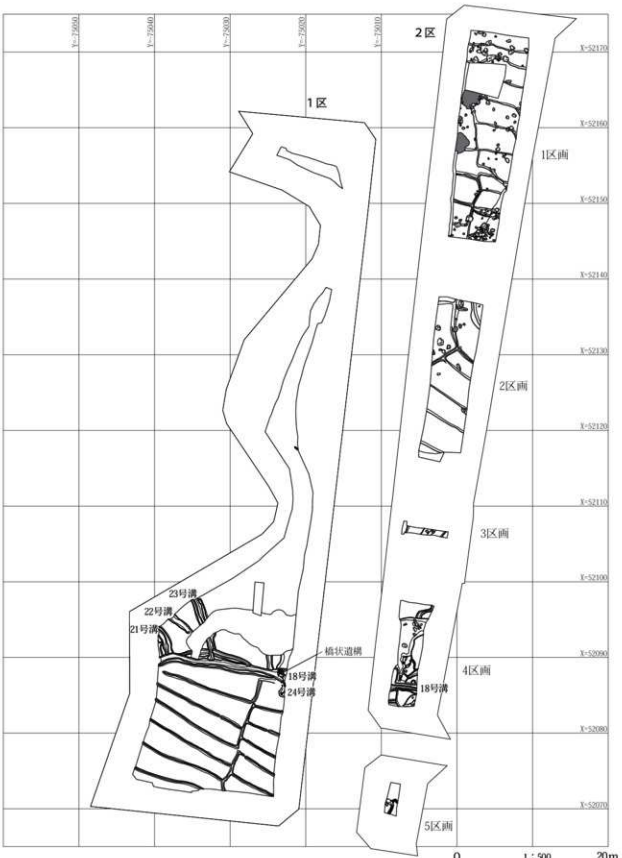
第33図　４面全体図



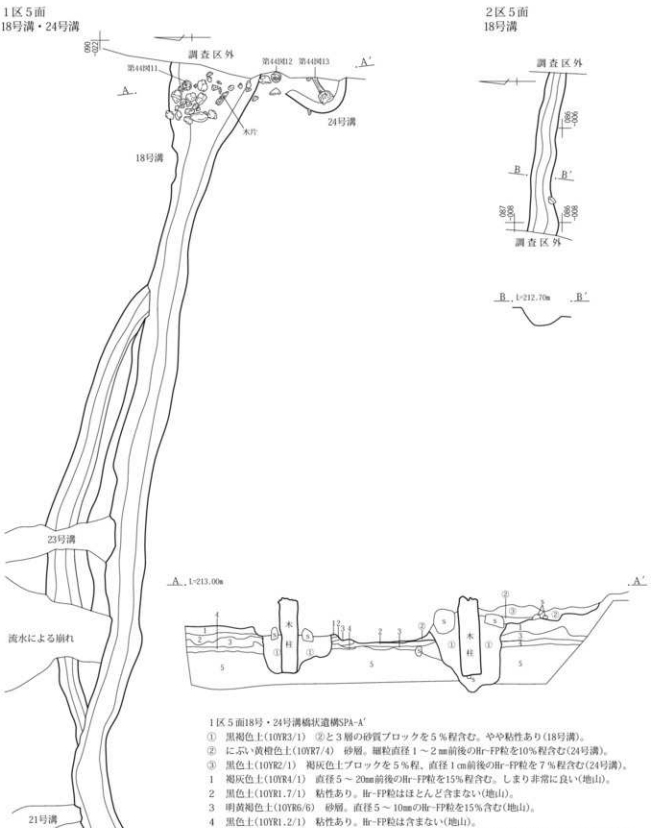
２区４面19号・20号溝SPA-A'

1　灰黄褐色土(10YR4/2)　Hr-FP粒をほとんど含まない(水田耕土)。
2　灰黄褐色土(10YR4/2)　直径５～30mmのHr-FP粒を10%程含む。
3　灰黄褐色土(10YR5/2)　砂質。直径１～３mm程のHr-FP粒を10%程度含む。４層ブロックを部分的に含む。
4　灰黄褐色土(10YR4/2)　１層に類似するが１層よりもやや暗い(水田耕土)。
4'　灰黄褐色土(10YR4/2)　４層に類似するが３層のブロックを40%程度含む。
5　灰黄褐色土(10YR5/2)　砂質。３層に類似するが直径３cm程の礫を含む。
6　灰黄褐色土(10YR5/2)　砂質。３層に類似するが４層のブロックを10%程含む。
7　にぶい黄褐色土(10YR5/3)　砂質。直径１～５mm程のHr-FP粒を30%程度含む。直径10～30cmのHr-FP塊を含む(19溝)。
8　にぶい黄橙色土(10YR6/3)　砂礫を含む。
9　灰黄褐色土(10YR5/2)　シルト層。黄褐色砂層を部分的に含む。
10　にぶい黄褐色土(10YR5/3)　砂質。直径１～３cm程のHr-FP粒を含む(20溝)。

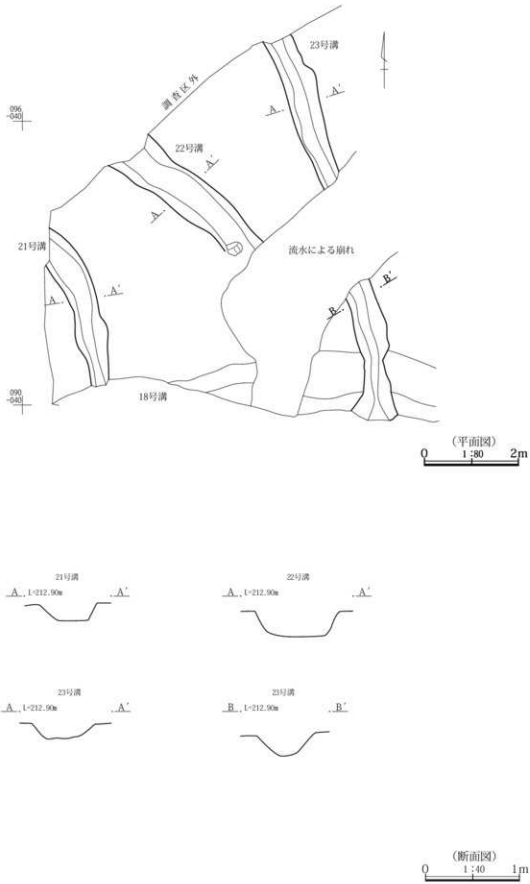
第34図　２区４面19号・20号溝・水田


Y=79950
Y=79940
Y=79930
Y=79920
Y=79910
2区
1区
X=52170
X=52160
X=52150
X=52140
X=52130
X=52120
X=52110
X=52100
X=52090
X=52080
X=52070
1区画
2区画
3区画
4区画
5区画
23号溝
22号溝
21号溝
橋状遺構
18号溝
24号溝
18号溝
0
1：500
20m

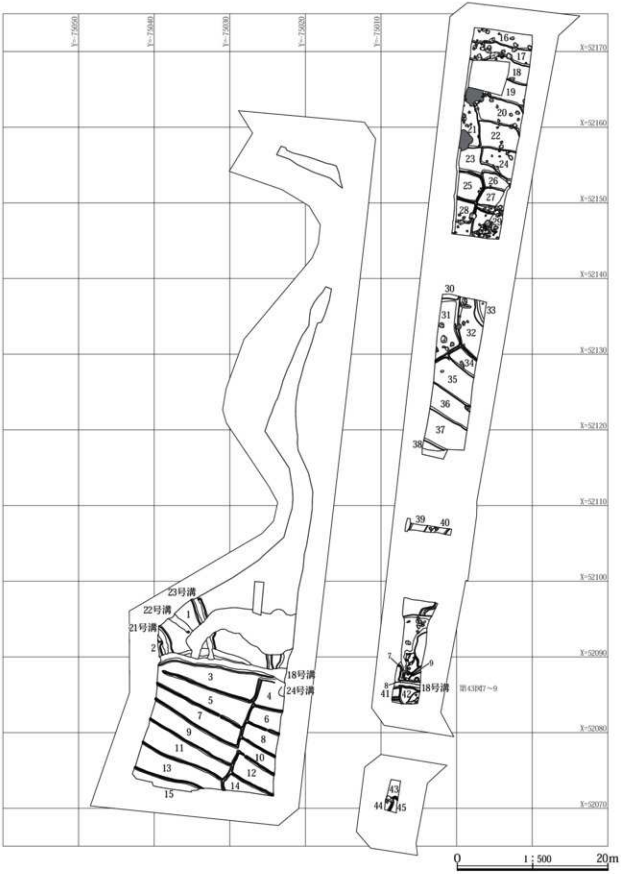
第35図　５面全体図



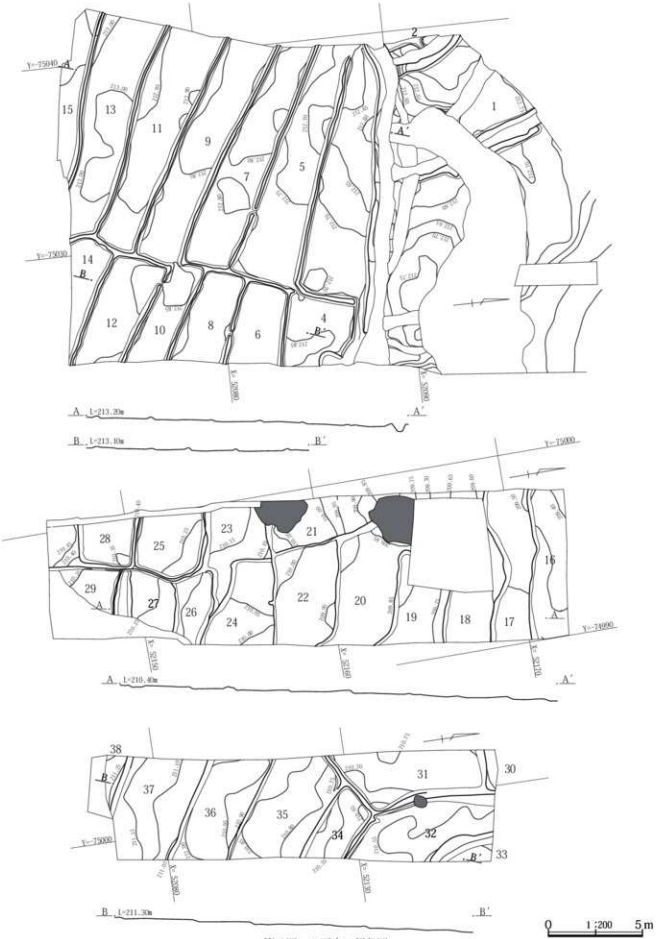
第36図　１区・２区５面18溝・１区５面24号溝・１区５面橋状遺構



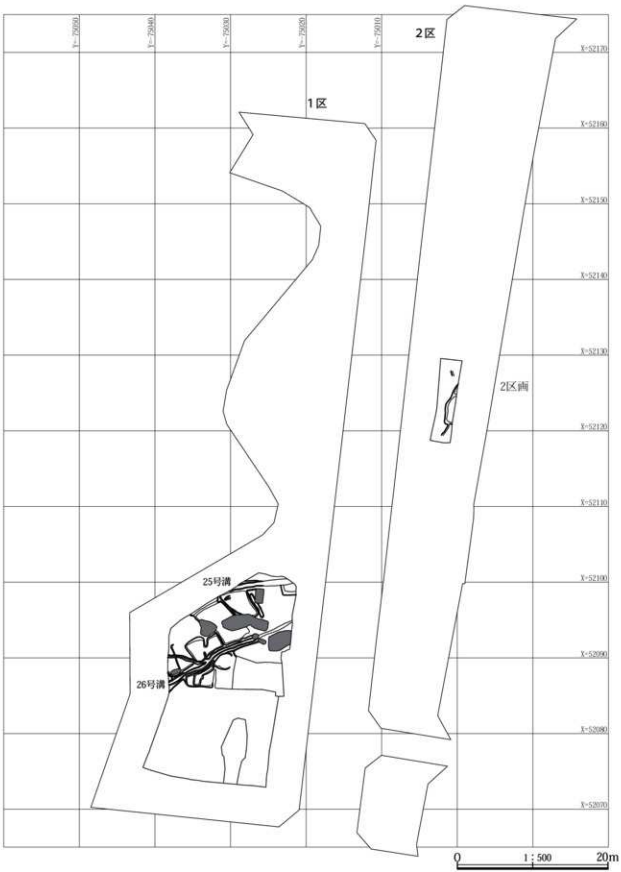
第37図　１区５面21～23号溝


X=75950
X=75940
X=75930
X=75920
X=75910
Y=52170
Y=52160
Y=52150
Y=52140
Y=52130
Y=52120
Y=52110
Y=52100
Y=52090
Y=52080
Y=52070
23号溝
22号溝
21号溝
18号溝
24号溝
18号溝
第43図7～9
0
1：500
20m

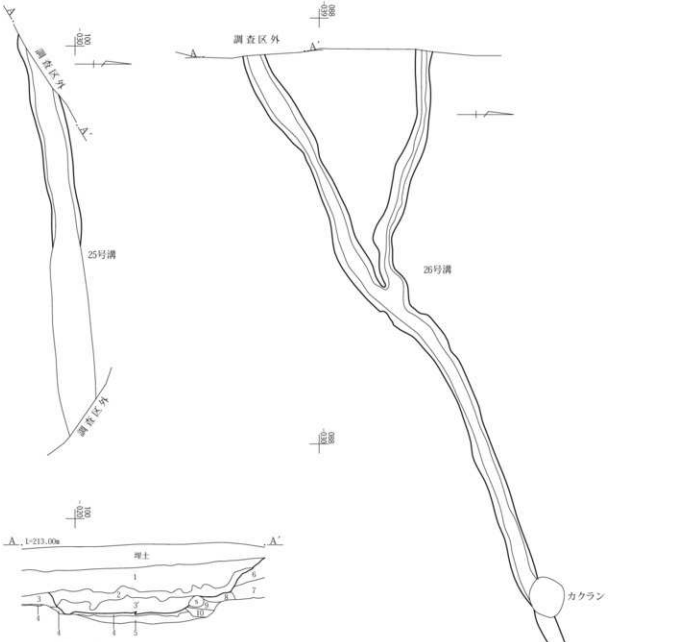
第38図　５面水田



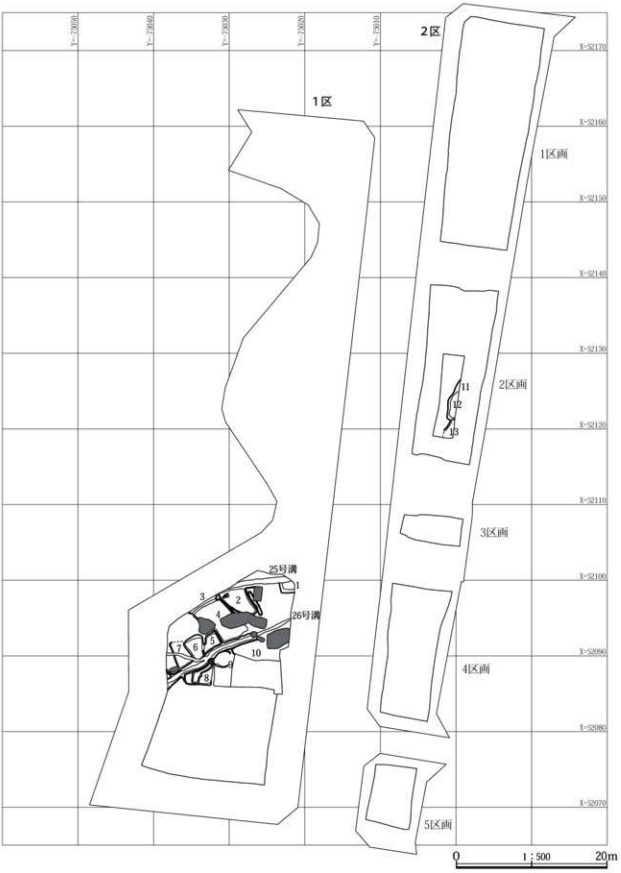
第39図　５面水田部分図


Y=79950
Y=79940
Y=79930
Y=79920
Y=79910
2区
1区
2区画
X=52120
X=52110
X=52100
X=52090
X=52080
X=52070
25号溝
26号溝
0
1：500
20m

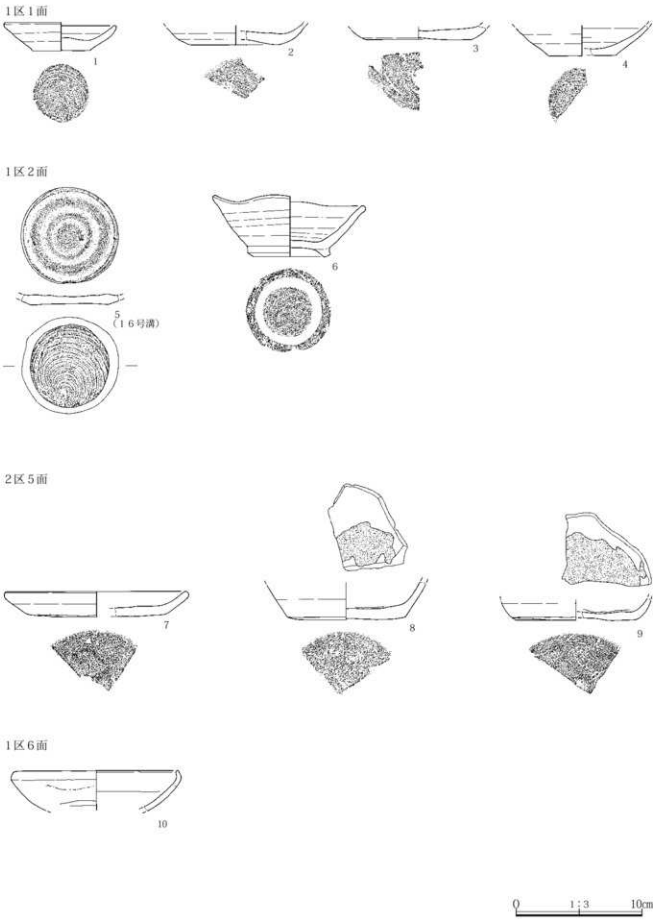
第40図　６面全体図



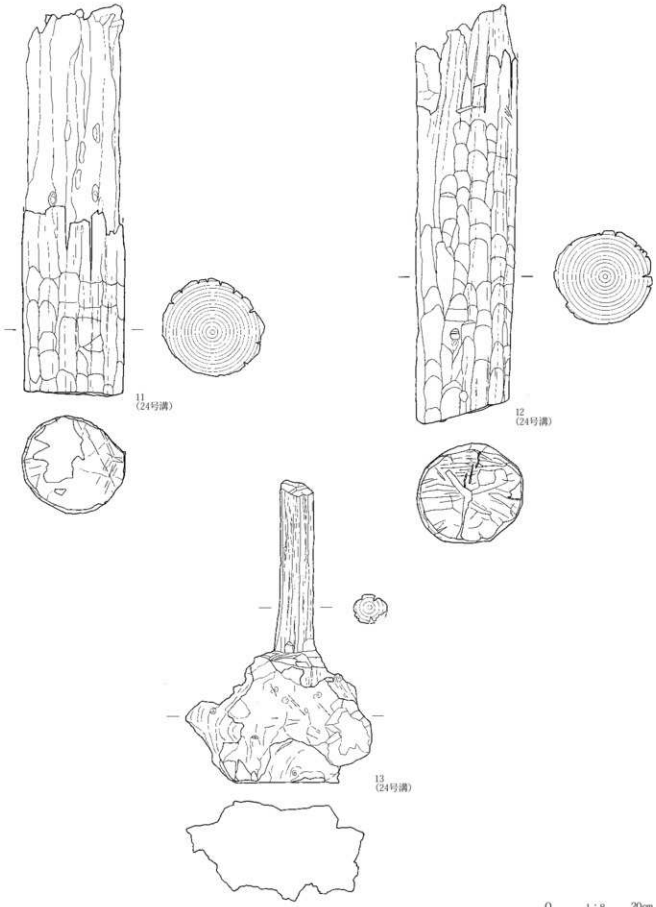
第41図　１区６面25・26号溝


X=-73950
X=-73940
X=-73930
X=-73920
X=-73910
2区
1区
X=-52170
X=-52160
1区画
X=-52150
X=-52140
X=-52130
2区画
11
12
13
X=-52120
X=-52110
3区画
X=-52100
25号溝
1
2
3
4
26号溝
5
6
7
8
10
X=-52090
4区画
X=-52080
X=-52070
5区画
0
1：500
20m

第42図　６面水田



第43図　１面・２面・５面・６面出土遺物



第44図　５面出土木器

第５表　遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値					胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第35図 PL.31	1	須恵器 杯	3/4	口 底	8.7 4.6	高	2.3		細砂粒/細砂粒/細砂粒	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	１区１面
第35図 PL.31	2	須恵器 杯	底部～体部下位片	底	7.0				細砂粒/酸化焔/にぶい橙	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	１区１面
第35図 PL.31	3	須恵器 杯	底部～体部下位片	底	8.4				細砂粒/酸化焔/にぶい橙	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	１区１面
第35図 PL.31	4	須恵器 椀	底部～体部中位片	底	5.4				細砂粒/還元焔/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	１区１面
第35図 PL.31	5	須恵器 杯	底部	底	6.1				細砂粒/還元焔/灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。周囲を再調整している。	１区２面 16号溝
第35図 PL.31	6	須恵器 椀	完形	口 底	11.7 6.9	台 高	5.6 4.9		細砂粒・粗砂粒/還元焔/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り後高台を貼付。	１区２面
第35図 PL.31	7	須恵器 皿	1/5	口 底	14.2 11.0	高	2.0		細砂粒/酸化焔/にぶい橙	ロクロ整形、回転右回りか、底部は手持ちヘラ削り。	２区５面
第35図 PL.31	8	須恵器 杯	底部～体部下位片	底	9.4				細砂粒/還元焔/灰白	ロクロ整形、回転右回りか、底部はヘラ削り。 内面に漆と考えられる付着物。	２区５面
第35図 PL.31	9	須恵器 杯	底部～体部下位片	底	9.6				細砂粒/還元焔/灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部は手持ちヘラ削り。 内面に漆と考えられる付着物。	２区５面
第35図 PL.31	10	土師器 杯	口縁部～体部下位	口 最	12.8 13.4				細砂粒/良好/にぶい黄橙	外面体部に輪積み痕が残る。口縁部は横ナデ、体部上半はナデ、下半はヘラ削り。	２区６面
第36図 PL.31	11	木製品		長 幅	83.0 22.6	厚 重(kg)	21.8 23.46			出土状況から橋脚と見られる木製品。芯持ちの丸木で側面は軸方向に沿って細長く削られ多面的な形状を呈する。上端は劣化により細くなり、下端部はほぼ直角に切断加工されている。	１区５面 24号溝
第36図 PL.31	12	木製品		長 幅	88.5 22.5	厚 重(g)	21.2 27.42			出土状況から橋脚と見られる木製品。芯持ちの丸木で側面は軸方向に沿って細長く削られ多面的な形状を呈する。上端は劣化により細くなり、下端部はやや斜めに切断加工されている。	１区５面 24号溝
第36図 PL.31	13	木製品		長 幅	64.0 29.4	厚 重(g)	26.2 12.28			立木の幹から根部分を含む加工品。幹側端部は上端部約40cmほどを細く輪状に加工、根側との境は受け状にやや斜めの段を形作る。両部分共に加工面に擦れ・摩耗等の痕跡は確認できない。下側は周囲に広がる根を切断しているが平坦面を作り出すような精緻な加工は見られない。	１区５面 24号溝

第４章　自然科学分析

有馬西田遺跡における発掘調査の工程の中で、土層中に堆積したテフラ(火山砕屑物、いわゆる火山灰)についての分析作業を火山灰考古学研究所の早田勉氏に委託した。分析の目的は、各調査面に関連する火山灰等の由来を特定し、遺構の時期を確定するためである。

以下、分析によって得られた成果を掲載する。

１．はじめに

関東地方北西部に位置する榛名火山とその周辺には、榛名山はもちろんのこと、浅間山や赤城山をはじめとする北関東地方とその周辺に分布する火山、中部地方や中国地方さらには九州地方など遠方に位置する火山から噴出したテフラ(火山砕屑物、いわゆる火山灰)が数多く降灰している。とくに後期更新世以降に降灰したそれらの多くについては、層相や年代さらに岩石記載的な特徴がテフラ・カタログなどに収録されており、考古遺跡などで調査分析を行いテフラを検出することで、地形や地層の形成年代さらには考古学的な遺物や遺構の年代などに関する研究を実施できるようになっている。

榛名山西麓にある有馬西田遺跡の発掘調査でも、層位が不明な土層が検出されたことから、地質調査を実施して土層やテフラ層の記載を行うとともに、高純度で分析試料を採取し、実験室内でテフラ分析(テフラ検出分析・火山ガラスの屈折率測定)を実施して、すでに年代が明らかにされている指標テフラの検出同定を実施することになった。調査の対象は、１区上段試掘トレンチ、１区中段西壁、１区下段東壁の３地点である。

２．調査分析地点の土層柱状図

（１）１区上段試掘トレンチ

調査地点のうち、最上方に位置する本地点では、下位より葉理が発達した海汰の良い灰白色砂層(層厚３cm以上)、黒褐色泥炭層(層厚10cm)、円磨された軽石混じり灰色泥流堆積物(層厚13cm，軽石の最大径28mm)、円磨された軽石混じり暗灰色泥層(層厚11cm，軽石の最大径36mm)、円磨された軽石を多く含む暗灰色泥層(層厚６cm，軽石の最大径22mm)、円磨された軽石混じり黒灰色泥層(層厚24cm，軽石の最大径28mm)、円磨された軽石混じり暗灰色泥質土(層厚11cm，軽石の最大径22mm)、淘汰の良い灰色砂層(層厚８cm)、砂混じり灰色土(層厚７cm)、白色軽石混じりでやや暗い灰色泥質土(層厚13cm，軽石の最大径17mm)、礫混じり暗灰色泥層(層厚７cm，礫の最大径24mm)、亜円礫混じりでやや暗い灰色泥質土(層厚25cm，礫の最大径54mm)、円磨された白色軽石混じり黄色砂層(層厚５cm，軽石の最大径14mm)、やや暗い灰色泥層(層厚４cm)、黄色砂層(レンズ状，最大層厚２cm)、暗灰色泥層(層厚３cm)が認められる(第37図)。

その上位には、さらに、円磨された白色軽石混じり灰色砂層(層厚25cm，軽石の最大径58mm，礫の最大径44mm)、黒泥層(層厚３cm)、円磨された白色軽石を多く含む灰色砂層(層厚３cm，軽石の最大径９mm)、暗灰色泥層(層厚0.6cm)、灰色砂層(層厚１cm)、円磨された軽石混じり灰色砂層(層厚12cm，軽石の最大径18mm)、灰色粘質土(層厚11cm)、黒灰褐色土(層厚３cm)、円磨された白色軽石混じり灰色砂層(レンズ状，最大層厚７cm，軽石の最大径３mm)、黒色泥(層厚0.2cm)、上部に円磨された軽石を多く含む灰色砂層(層厚８cm，礫の最大径16mm)、暗灰色土(層厚６cm)、灰色砂層(層厚２cm)、円磨された白色軽石混じり灰色砂層(層厚６cm，軽石の最大径７mm)が認められる。

（２）１区中段西壁

下位より黒色土(層厚２cm以上)、成層したテフラ層(層厚10cm)、暗灰褐色土(層厚３cm)、成層したテフラ層(層厚２cm)、黒色土(層厚0.5cm)、青灰色砂質細粒火山灰ブロック層(層厚４cm)、かすかに成層した青灰色砂層(層厚７cm)、亜円～亜角礫混じり盛土(層厚42cm)、暗灰褐色表土(層厚５cm)が認められる(第38図)。

これらのうち、下位の成層したテフラ層は、下部がかすかに成層した灰色がかった褐色細粒軽石層(層厚８cm，軽石の最大径３mm)と、上部の桃色砂質細粒火山灰層(層厚２cm)からなる。このテフラ層は、層相から1108(天仁元)年に浅間火山から噴出した浅間Ｂテフラ(As-B，荒牧，1968，新井，1979，町田・新井，1992，2003，

2011)の可能性が考えられる。このテフラ層については、テフラ検出分析を実施して、指標テフラとの同定精度の向上を図った。

一方、上位の成層したテフラ層は、下部の青灰色粗粒火山灰層(層厚１㎝)と、上部の青灰色細粒火山灰層(層厚１㎝)からなる。このテフラ層については、層相から、1128（大治３)年に浅間火山から噴出したと考えられている浅間粕川テフラ(As-Kk，早田，1991，1996，2004)と思われる。

(３)１区下段東壁

下位より黄灰色砂層(層厚７㎝以上)、上部に白色軽石を多く含む灰色砂層(層厚13㎝，軽石の最大径114㎜)、黒褐色泥層(層厚0.8㎝)、灰色砂層(層厚５㎝)、暗褐色砂質泥層(層厚0.9㎝)、黒泥層(層厚0.3㎝)、上部に黄白色軽石を多く含む黄灰色砂層(層厚10㎝，軽石の最大径８㎜)、暗灰色泥層(層厚１㎝)、灰色シルト質砂層(層厚0.8㎝)、円磨された黄白色軽石混じり黄色砂層(層厚19㎝，軽石の最大径13㎜)、灰色砂層(層厚１㎝)、黄灰色砂層(層厚４㎝),暗灰色泥層(層厚0.8㎝)、灰色砂層(層厚１㎝)、軽石混じり黄灰色砂層(層厚３㎝，軽石の最大径７㎜)、灰色砂層(層厚２㎝)、円磨された黄白色軽石混じり灰褐色粘質土(層厚12㎝，軽石の最大径14㎜)が認められる(第39図)。

その上位には、下位より暗灰褐色土(層厚３㎝)、黒色土(層厚２㎝)、細粒の黄桃色凝灰質砂層(層厚２㎝)、黒色土(層厚0.8㎝)、成層したテフラ層(層厚13㎝)、青灰色砂質細粒火山灰ブロック混じり暗灰色土(層厚５㎝)、盛土(層厚18㎝以上)が認められる。これらのうち、成層したテフラ層は、下位より黄灰色細粒軽石層(層厚４㎝，軽石の最大径６㎜)、青灰色砂質細粒火山灰層(層厚１㎝)、暗灰色粗粒火山灰層(層厚１㎝)、橙色粗粒火山灰層(層厚１㎝)、黄灰色粗粒火山灰層(層厚３㎝)、桃褐色粗粒火山灰層(層厚２㎝)、桃色砂質細粒火山灰層(層厚２㎝)からなる。このテフラ層は、層相からAs-Bと考えられる。また、その上位の土層中にブロック状に含まれる青灰色砂質細粒火山灰は、層位や層相からAs-Kkと思われる。

３．テフラ検出分析

(１)分析試料と分析方法

テフラ層などの堆積状態が良い１区下段東壁において、発掘調査担当者によりテフラの可能性が考えられた細粒の黄桃色凝灰質砂層(試料８)と、その上位のAs-Bと推定されるテフラ層からユニットごとに採取された試料のうちの２点(試料５および試料３)の合計３試料について、含まれるテフラ粒子の量や特徴を定性的に把握するテフラ検出分析を行って、指標テフラとの同定のための資料を得ることにした。テフラ検出分析の手順は次のとおりである。

１)砂分が少ない黄桃色凝灰質砂層(試料８)について20g、またテフラ層から採取された試料(試料５および試料３)について各５gを電子天秤により秤量。

２)超音波洗浄装置により泥分を除去。

３)恒温乾燥器により80℃で恒温乾燥。

４)実体顕微鏡下で観察。

(２)分析結果

テフラ検出分析の結果を第６表に示す。試料８には、比較的粗粒の軽石やスコリアは含まれていないものの、火山ガラスが比較的多く含まれている。その多くは白色のスポンジ状軽石型で、ほかに無色透明の繊維束状軽石型ガラスやバブル型ガラスも少量認められる。不透明鉱物以外の重鉱物としては、角閃石や斜方輝石のほか、少量の単斜輝石が含まれている。

一方、同じテフラ層の異なるユニットから採取された試料５や試料３には、同じような傾向が認められた。試料５には､比較的良く発泡した淡灰色や淡褐色の軽石(最大径3.9㎜)が比較的多く含まれている。また、それらの細粒物である淡灰色や淡褐色の、さらに褐色のスポンジ状軽石型ガラスがとくに多く含まれている。不透明鉱物以外の重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石が認められる。その上位の試料３には、比較的良く発泡した淡灰色の軽石(最大径6.3㎜)が少量含まれている。また、その細粒物である淡灰色の、さらに淡褐色のスポンジ状軽石型ガラスが多く含まれている。不透明鉱物以外の重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石が認められる。

４．屈折率測定(火山ガラス)

(１)測定試料と測定方法

１区下段東壁の黄桃色凝灰質砂層(試料８)に含まれる火山ガラスの屈折率測定を実施して、指標テフラとの同定精度の向上を図った。測定方法は、温度変化型屈折率測定法(増原，1993)である。実際の測定対象粒子は、

テフラ検出分析後に分析篩による篩別で得られた1/8-1/16㎜粒径区画中の火山ガラスである。

（２）測定結果

屈折率の測定結果を第７表に示す。この表には、榛名火山西麓周辺の後期更新世後半以降の代表的な指標テフラの火山ガラスの屈折率特性も示した。試料８に含まれる火山ガラス(26粒子)の屈折率(n)は、1.499-1.504である。

５．考察－指標テフラとの同定と遺構の層位について

１区下段東壁の黄桃色凝灰質砂層(試料８)に含まれるテフラ粒子のうち、白色のスポンジ状軽石型ガラスや角閃石、そして斜方輝石などの多くは、火山ガラスの色調および形態、重鉱物の組み合わせ、火山ガラスの屈折率特性、そして上流域の地質から、６世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA，新井，1979，坂口，1986，早田，1989，町田・新井，1992など)や、６世紀中葉に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP，新井，1962，坂口，1986，早田，1989，町田・新井，1992など)のおもに火砕流堆積物に由来すると考えられる。

ただ、この試料にわずかに含まれている無色透明の繊維束状軽石型ガラスや、斜方輝石および単斜輝石の一部などについては、火山ガラスの色調および形態、重鉱物の組み合わせ、火山ガラスの屈折率特性から、約1.5～1.65万年前に浅間火山から噴出した浅間板鼻黄色軽石(As-YP，新井，1962，町田・新井，1992，2003)など浅間系テフラに由来する可能性がある。また、無色透明の繊維束状軽石型ガラスの一部や無色透明のバブル型ガラスは、その色調や形態、さらに屈折率特性から、約2.8～３万年前に南九州の姶良カルデラから噴出した姶良Tn火山灰(町田・新井，1976，2011など)に由来すると考えられる。いずれにしても、試料８が採取された黄桃色凝灰質砂層は、テフラの水成二次堆積物と考えられる。

一方、試料５や試料３が採取された成層したテフラ層は、層相に含まれる軽石や火山ガラスの特徴、それに重鉱物の組み合わせを考えると、やはりAs-Bに同定できる。したがって、そのすぐ上位に認められる青灰色の細粒テフラ層は、層位からもAs-Kkと考えられる。

なお、１区上段試掘トレンチで認められた土層は、周辺の土層の状況から、As-Bより下位と考えられる。ここでは、堆積物や軽石の岩相などから、Hr-FAやHr-FPのおもに火砕流に由来する火山泥流堆積物などが複数認められる。As-Bの下位にあることを考慮すると、これらの堆積物の中には、818（弘仁９）年地震により発生した泥流(能登ほか，1990，新里村教育委員会，1991)があるのかも知れない。その証明には、818（弘仁９）年地震の震動により発生した液状化・流動化に伴ういわゆる噴砂が鍵になると考えられる。

６．まとめ

有馬西田遺跡において、野外調査(地質調査)とテフラ分析(テフラ検出分析・火山ガラスの屈折率測定)を実施した。その結果、下位より榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA，６世紀初頭)や榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP，６世紀中葉)のおもに火砕流堆積物に由来する複数の火山泥流堆積物、浅間Ｂテフラ(As-B，1108年)、浅間粕川テフラ(As-Kk，1128年)などを検出することができた。

文献

新井房夫(1962)関東盆地北西部地域の第四紀編年．群馬大学紀要自然科学編，10，p．1-79.
新井房夫(1972)斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定－テフロクロノロジーの基礎的研究．第四紀研究，11，p.254-269.
新井房夫(1979)関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層．考古学ジャーナル，no.53，p.41-52.
荒牧重雄(1968)浅間火山の地質．地団研専報，no.14，p．1-45.
壌原　穣(1993)温度変化型屈折率測定法．日本第四紀学会編「第四紀試料分析法２」，東京大学出版会，p.149-158.
町田　洋・新井房夫(1976)広域に分布する火山灰－姶良Tn火山灰の発見とその意義－．科学，46，p.339-　347.
町田　洋・新井房夫(1992)「火山灰アトラス」，東京大学出版会，276p.
町田　洋・新井房夫(2003)「新編火山灰アトラス」，東京大学出版会，336p.
町田　洋・新井房夫(2003)「新編火山灰アトラス(第２刷)，東京大学出版会，336p.
町田　洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫(1984)テフラと日本考古学－考古学研究に関係するテフラのカタログ，古文化財編集委員会編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」，p.865-928.
新里村教育委員会編(1991)「資料集赤城山麓の歴史地震－弘仁九年に発生した地震とその災害－」，86p.
能登　健・内田憲治・早田　勉(1990)赤城山南麓の歴史地震－弘仁九年の地震に伴う地形変化の調査と分析－．信濃，42，p.755-772.
坂口　一(1986)榛名二ツ岳起源FA・FP層下の上師器と須恵器．群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」，p.103-119.
早田　勉(1989)６世紀における榛名火山の２回の噴火とその災害．第四紀研究，27，p.297-312.
早田　勉(1991)浅間火山の生い立ち．佐久考古通信，no.53，p．2-７．
について－．名古屋大学加速器質量分析計業績報告書，７，p.256-267.
早田　勉(1996)関東地方～東北地方南部の示標テフラの諸特徴－とくに御岳第１テフラより上位のテフラについて－．名古屋大学加速器質量分析計業績報告書，７，p.256-267.
早田　勉(2004)火山灰編年学からみた浅間火山の噴火史－とくに平安時代の噴火について－．かみつけの里博物館編「1108－浅間火山－中世への胎動」，p.45-56.
早田　勉(2014)渋川市有馬寺畑遺跡におけるテフラ分析．渋川市教育委員会編「有馬寺畑遺跡」，p.197-　211.

第６表　有馬西田遺跡におけるテフラ検出分析結果

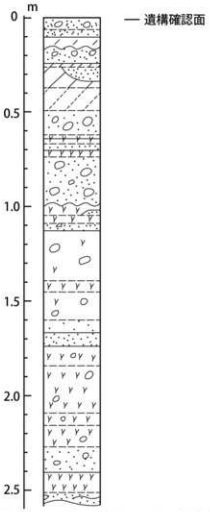
地点	試料	軽石・スコリア			火山ガラス			重鉱物
		量	色調	最大径	量	形態	色調	(不透明鉱物以外)
１区下段東壁	3	**	淡灰	6.3mm	***	pm (sp)	淡灰，淡褐	opx，cpx
	5	**	淡灰，淡褐	3.9mm	****	pm (sp)	淡灰，淡褐，褐	opx，cpx
	8				**	pm (sp)＞pm (fb)，bw	白，無色透明	am，opx，(cpx)

****：とくに多い，***：多い，**：中程度，*：少ない，(*)：非常に少ない．
bw：バブル型，md：中間型，pm：軽石型，sp：スポンジ状，fb：繊維束状．
ol：カンラン石，opx：斜方輝石，cpx：単斜輝石，am：角閃石，bi：黒雲母．　重鉱物の()は，量が少ないことを示す．

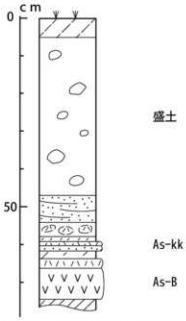
第７表　屈折率測定結果

試料・テフラ	火山ガラス		文　献
	屈折率(n)	測定粒子数	
有馬西田遺跡・１区下段東壁	1.499-1.504	26	本報告
<榛名火山西麓周辺の指標テフラ－AT降灰以降>			
浅間Ａ(As-A，1783年)	1.507-1.512		1)
浅間粕川(As-Kk，1128年)	未詳		2)
浅間Ｂ(As-B，1108年)	1.524-1.532		1)
榛名二ツ岳伊香保(Hr-FP，６世紀中葉)	1.501-1.504		1)
榛名二ツ岳渋川(Hr-FA，６世紀初頭)	1.500-1.502		1)
	1.498-1.505		3)
榛名有馬(Hr-AA，５世紀)	1.500-1.502		4)
浅間Ｃ(As-C，３世紀後半)	1.514-1.520		1)
浅間Ｄ軽石(As-D，約4,500年前*1)	1.513-1.516		1)
鬼界アカホヤ(K-Ah，約7,300年前)	1.506-1.513		1)
浅間藤岡軽石(As-Fo，約8,200年前*1)	1.508-1.516		2)
浅間総社(As-SJ，約1.0～1.1万年前*1)	1.501-1.518		5)
浅間草津(As-K)	1.501-1.503		1)
浅間板鼻黄色(As-YP，約1.5～1.65万年前)	1.501-1.505		1)
浅間大窪沢２(As-Ok2，約1.6万年前*1)	1.502-1.504		1)
浅間大窪沢１(As-Ok1，約1.7万年前*1)	1.500-1.502		1)
浅間白糸(As-Sr)	1.506-1.510		1)
浅間萩生(As-Hg，約1.9万年前*1)	1.500-1.502		2)
浅間板鼻褐色(群) (As-BP Group)	上部：	1.515-1.520	1)
	中部：	1.508-1.511	1)
	下部：	1.505-1.515	1)
姶良Tn (AT，約2.8～3万年前)	1.499-1.500		1)

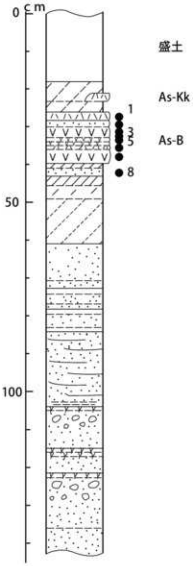
1)町田・新井(1992，2003，2011)，2)早田(1996)，3)早田(2014)，4)町田ほか(1984)，5)早田(未公表)．
本報告・3)・5)温度変化型屈折率法(壇原，1993)．1)・2)・4)温度一定型屈折率測定法(新井，1972，1993)．
*1：放射性炭素(14C)年代．



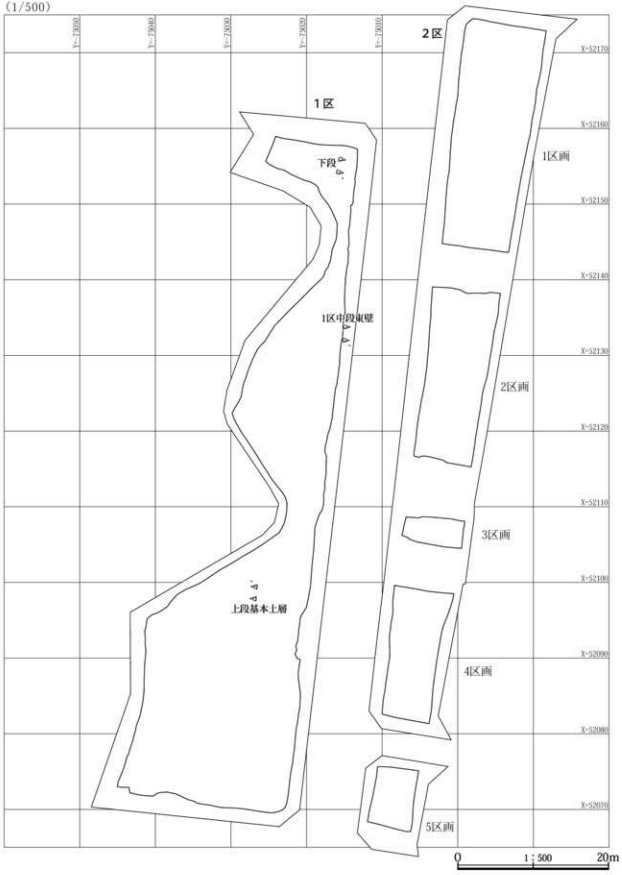
第45図　１区上段試掘トレンチの土層柱状図



第46図　１区中段西壁の土層柱状図



第47図　１区下段東壁の土層柱状図
●：テフラ分析試料の層位.
数字：テフラ分析の試料番号.



第48図　1区上段・中段・下段試料採集地点

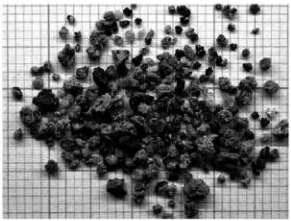


写真１　１区下段東壁・試料３(As-B)
淡灰・淡褐・褐色の軽石や軽石型ガラスが 多く含まれている。

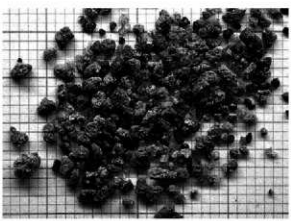


写真２　１区下段東壁・試料５(As-B)
淡灰・淡褐・褐色の軽石や軽石型ガラスが多く含まれている。

写真３　１区下段東壁・試料８
中央ほか：スポンジ状軽石型ガラス,
中央右上・左上(長板状有色鉱物：角閃石).

第５章　調査のまとめ

今回発掘調査を実施した有馬西田遺跡は、報告の通り、榛名山東麓端に接する緩傾斜地上に位置する遺跡である。この地形面は、榛名山二ツ岳を給源とする火山噴出物が滝沢川や午王川を流下し、堆積したことにより形成されたもので、調査地点では南側から北側に向かって傾斜していた。調査前の標高は約120～125mであった。

調査地においては、浅間粕川軽石(As-Kk、1128年降下)、浅間Ｂ軽石(As-B、1108年降下)、４層の泥流層の堆積が確認された。浅間Ｂ軽石層上、浅間Ｂ軽石層下、４層の泥流層下の調査で、溝27条、土坑1基、水田面６面を検出した。各遺構の調査成果と基本情報は第３章と第２表に掲載したところである。

ここでは６面の水田について若干のまとめをしておきたい。なお、畠作が併存していたことを示すような遺構は検出されていない。

６面の水田の耕作時期については、テフラ、泥流層の堆積状況、出土土器の年代により、１面水田が浅間Ｂ軽石層下の平安時代、２面水田が平安時代(水田面から９世紀後半から10世紀代の土器が出土)、３面水田が奈良・平安時代、４面水田が奈良時代、５面水田が古墳時代から奈良時代、６面水田が５面水田以前と考えられる。

結果、本遺跡においては、古墳時代から奈良・平安時代の長期間にわたり、度重なる河川の氾濫による泥流の災害を被り、不安定な状況が継続したにもかかわらず、泥流堆積物を耕作土とする水田の復旧、造成が繰り返し行われていたことが明らかになった。そして、古墳時代から平安時代の泥流層下の５面の水田は、これまでの渋川地域での調査で検出されていなかったもので、貴重な発見となろう。

１面水田は狭小な範囲での検出であったが、２面から５面の水田については、調査対象地内の広範囲にわたり形成されていたことが確認できた。特に２面、５面水田は水田区画の残存状況が良好であった。両水田とも地形の傾斜、等高線の走向に合わせて東西方向の畔を配置し、帯状の区画が棚田状に形成されていた。帯状の区画は、水田の形成時期を超えて共通して確認された。１区中段の２面水田の水田５～７、９・10区画と５面水田の水田３～15区画では特にその特徴が顕著であった。帯状の区画が傾斜地の水田として帯水を保つ上で自然で、合理的な区画であったことが理解される。

他の３面・４面水田も２面・５面と同様に泥流が堆積した傾斜地を造成して、水田区画が施工されていたことが想定される。

水田区画の継続性については、４面と５面の２区１区画と２区画において畔の走向が共通している部分が見られた。４面の畔は５面のそれを踏襲したことがうかがえる。２区２区画における泥流の厚さは、調査地点２の土層断面で0.5mを観察している。それにもかかわらず４面水田の区画の一部が下位の５面水田の区画をトレースしているのはどうしてだろうか。泥流堆積土が造りだした傾斜地の状況が４面と５面で同様な状況にあったためであろうか。あるいは、水田の復旧が、泥流に被災してからあまり時間が経過しない中で行われたということであろうか。この点については判断が難しいところである。

限定された範囲の調査であったことから、各水田面に対する取水・排水に関する施設などの検出はなかった。

５面と６面では水田と同時期に機能していた溝が検出された。５面では18号、23号溝が５面水田に伴う溝と考えられる。18号溝は水田３との間に畔状の高まりが設けられていた。また、南北溝の23号溝の場合は、溝の東西両側に水田との間を区画する畔状の高まりが延びていた。検出部分では、直接、脇の水田に配水する状況は看取できなかったことから、18号溝は、用水を上流の１区から下流の２区の水田区画に送水するために掘削されたものと考えられる。

配水記録からは同時存在が確認できないが、23号溝は18号溝から分水し、１区中段・下段に給水するための水路と推定される。また、水田との関係が判然としないが、21号溝も同様の役割を果たしていたものと考えられる。

６面では６面水田と26号溝が同時期に併存していたものと考えられる。東西溝の26号溝の両側には畔状の高まりが形成され、水田との境を区画していた。

配水については２面、５面水田で水口が検出され、高位置の水田区画から低位置の区画に向けて、順次、かけ流しの形が取られていたことが考えられる。

最後に検出された人の足跡についてふれておきたい。人の足跡は、２面と５面水田で検出された。特に５面では各調査区の水田区画で多数検出された。足跡は、各区画内で、区画の長辺、東西方向の畔に沿って残存している例が大半であり、畔をまたいで、複数の水田区画を横断するような状況は確認できなかった。

１区上段の水田では１区画の中に、２列ないし３列、畔に沿うような足跡が見られた。歩行の様子から、これらの足跡は、草取り作業により生じたものと推測される。

５面水田を覆った泥流の発生の時期は、水田に稲が栽培されていた時期、夏から秋の季節と考えることができるのではなかろうか。

１面水田は、浅間Ｂ軽石層との間にわずかな間層を有するもので、調査の所見では、しばらく休耕されていた水田面に軽石が降下したものとされている。１区中段の小範囲から検出であったが、その意義についてふれてみたい。

有馬西田遺跡周辺においては、榛名山二ツ岳降下火山灰(Hr-FA)層や榛名二ツ岳降下軽石(Hr-FP)層下からは水田や畠の遺構が検出された遺跡が多数知られているが、浅間Ｂ軽石により埋没した水田遺構は少ない。稀少な例としては本遺跡の1.4㎞東方に位置する有馬遺跡で、調査区の北端から埋没水田が、これより南側へ約200mの範囲わたり、畠が検出されている。

また、有馬遺跡の北側にあたる有馬田圃周辺では東西1.8㎞、南北0.9㎞、面積160ha前後の範囲に条里制が施工されていたとされる。近年の土地改良事業による削平により、条里水田の遺構は検出されないものの、有馬条里遺跡や八木原沖田遺跡の調査で、条里区割りと重複し、１町間隔で延びる東西方向の溝やこれと直行、交流する南北方向の溝が検出されていることから、８世紀前半の段階には一帯で条里制が施工されていたことが想定されている。有馬条里遺跡や八木原沖田遺跡で検出された集落は、条里区画内に計画的に形成され集落であると考えられている。

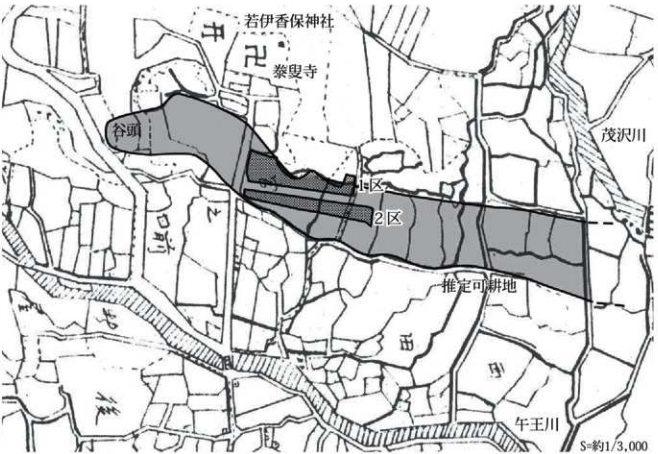
渋川市有馬地区は、『和名類聚抄』に記載のある群馬郡有馬郷の一部に比定される地域である。そして、有馬条里が施工された有馬田圃の南側の緩斜面上には第49図に見るよう前述の有馬遺跡をはじめとした多数の奈良・平安時代の集落が形成されている。継続の時期については個々に相違があるものの榛名山噴出の火山堆積物による緩斜面形成後は居住域として安定的な集落経営が継続したことがわかる。さらに、有馬寺畑遺跡周辺では古くから布目瓦の散布が知られ、有馬廃寺の存在か指摘されている。出土した瓦は、８世紀前半から中頃を中心とするもので、上野国分寺の瓦と同范の資料も出土している。

以上のように有馬西田遺跡の東側の地域では８世紀前半の段階で条里制の施工、寺院の建立、これを支える集落の形成が合わせて進行していたことがわかる。

そして、今回調査された有馬西田遺跡は、有馬条里の条里区割りの南西隅から更に南側の山麓寄りに位置する。そして、条里水田で耕作が展開するのと同じ時期に水田耕作が進行していたことが発掘調査から明らかと

1　有馬西田遺跡　2　中村岡前遺跡　3　中村遺跡　4　八木原沖田遺跡　5　有馬条里遺跡　6　半田朝城遺跡　7　滝沢遺跡
8　八木原久保遺跡　9　有馬遺跡　10　有馬小貝戸遺跡　11　有馬後田遺跡　12　神宮寺西遺跡　13　有馬久宮間戸遺跡　14　有馬廃寺遺跡
15　有馬高井貝遺跡　16　有馬寺畑遺跡　17　有馬中井遺跡

第49図　有馬西田遺跡の奈良・平安時代遺跡分布



第50図　有馬西田遺跡周辺の土地区画（右が北）

なった。このことは、計画的に、そして大規模な条里制の施工がなされる一方で、不安定で水田耕作には適していないと考えられる狭小地を繰り返し復旧し、水田耕作が継続して行われていた実態を確認することができた。

本遺跡の水田は、榛名山二ツ岳噴火以後に繰り返し発生した河川の氾濫、土砂の流出と堆積によって形成された地形を基盤にしている。水田耕作地の範囲は、調査区域外まで厚い泥流に覆われていることから、１面水田耕作時の地形が現在までどれだけ反映しているのかの判断が難しいが、第50図に掲載した昭和30年代に作成されたと考えられる耕地図や昭和46年作成の渋川市都市計画図を参考にすると、調査地周辺の山際に南北方向に延びる谷地状の地形が耕作地として利用されてきたものと考えられる。谷地の東西方向の幅は約35 ～ 50mと想定される。これより東側は午王川に向かって徐々に標高が高くなっている。

調査前に耕作されていた水田への給水については、午王川から取水するような施設等は見られず、給水方法については不明である。周辺地形を観察すると、現在、湧水は確認できないが、泰叟寺や若伊香保神社の建つ山麓末端からの湧水の活用が想定できる。検出された水田の耕作には、山麓際からの湧水が利用されていたと考えられる。平静時には安定的に用水の供給があったものの耕作地を大幅に拡大できるような環境にはなかったと考えられる。むしろ充分な用水の確保は困難で、限られた用水を調整しながら使用していたことが想定される。

調査地内で観察された泥流堆積物は午王川の氾濫によりもたらされ可能性が大きいと考える。一端大水が出た場合は午王川が氾濫し、泥流が水田耕作地に流れ込み、土砂の流入と堆積が繰り返され、時には水田面が浸食されたものと考えられる。

今回の調査で検出された１面から５面の水田は、条里制施工の外縁部における土地利用の在り方と当時の社会の多面性を知る上での好資料を得ることとなった。耕作者、経営主体については具体的にすることができないが、検討課題として、周辺遺跡の調査事例の増加を待ちたいと考える。

参考文献

渋川市市誌編さん委員会『渋川市誌』第２巻　1993
かみつけの里博物館『はるな30年物語』2006
渋川市教育委員会『石原東遺跡(Ⅲ)』1995
渋川市教育委員会『八木原沖田遺跡Ⅷ・Ⅸ』1996
渋川市教育委員会『八木原沖田遺跡Ⅹ』1998
渋川市教育委員会『有馬寺畑遺跡』2014
群馬県埋蔵文化財調査事業団『有馬１遺跡・大久保Ｂ遺跡』1989
群馬県企業局・渋川市教育委員会『半田中原・南原遺跡』1994
渋川市教育委員会『市内遺跡18半田薬師遺跡Ⅵ地点他』2005

写 真 図 版

1．1区1面全景(上段)(北から)

2．1区1面全景(上段)(南東から)

1．1区1面全景(中段)(北から)

2．1区1面全景(中段)(南から)

1．1区土層断面(上段)(西から)

2．1区1面上段木材検出状態(北東から)

3．1区1面上段木材検出状態(北東から)

4．1区1面1号暗渠下面検出状態(北から)

5．1区1面遺物出土状態(中段)(北から)

6．1区1面遺物出土状態(中段)(北から)

7．2区5区画1面遺物出土状態(北西から)

8．1区1面1号土坑全景(南から)

1．1区1面1号土坑土層断面A-A′（南から）

2．1区1面1号井戸全景(南西から)

3．1区1面1号井戸全景(北から)

4．1区1面1号井戸掘方全景(南西から)

5．1区1面1号井戸土層断面A-A′（南から）

6．1区1面2号井戸全景(南西から)

7．1区1面2号井戸全景(南東から)

8．1区1面2号井戸土層断面A-A′（北東から）

1．1区1面2号井戸土層断面A-A′（南西から）

2．1区1面1号溝全景(南から)

3．1区1面1号溝全景(北から)

4．1区1面1号溝(南から)

5．1区1面1号溝(南から)

6．1区1面1号溝(北から)

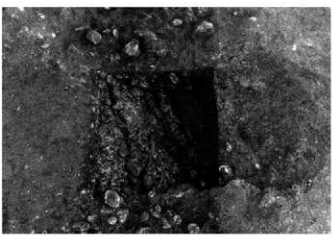
7．1区1面1号溝掘方全景(南から)

8．1区1面1号溝土層断面A-A′（南から）

1．1区1面1号溝土層断面B-B′（南から）

2．1区1面1号溝土層断面C-C′（南から）

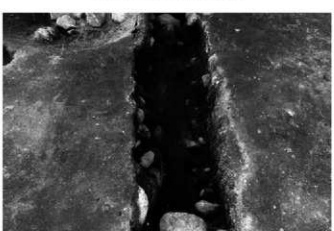
3．1区1面2号溝全景(北東から)



4．1区1面2号溝(南西から)

5．1区1面2号溝(南西から)

6．1区1面2号溝(北から)



7．1区1面2号溝(北東から)

8．1区1面2号溝(北東から)

1．1区1面2号溝(南西から)

2．1区1面2号溝土層断面A-A′(南から)

3．1区1面2号溝遺物出土状態(北東から)

4．1区1面2号溝遺物出土状態(北東から)

5．1区1面2号溝遺物出土状態(北東から)

6．1区1面2号溝遺物出土状態(南西から)

7．1区1面2号溝鉄片出土状態(南東から)

8．1区1面3号溝全景(南東から)

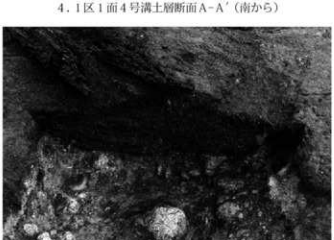
1．1区1面3号溝全景(南東から)

2．1区1面3号溝土層断面A-A′(南東から)

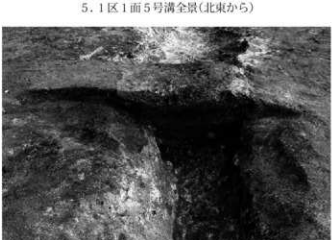
3．1区1面4号溝全景(南から)

4．1区1面4号溝土層断面A-A′(南から)

5．1区1面5号溝全景(北東から)



6．1区1面5号溝土層断面A-A′(南西から)



7．1区1面5号溝土層断面B-B′(南西から)

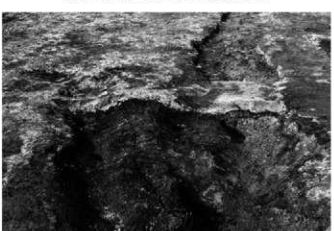
1．1区1面5号溝土層断面C-C′（西から）

2．1区1面5号溝土層断面D-D′（南西から）

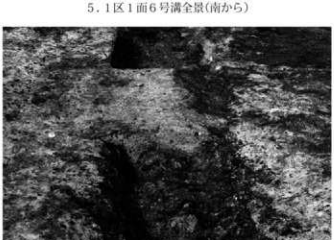
3．1区1面5号溝土層断面E-E′（南西から）

4．1区1面5号溝遺物出土状態(南から)

5．1区1面6号溝全景(南から)



6．1区1面6号溝土層断面A-A′（南から）



7．1区1面6号溝土層断面B-B′（南から）

8．1区1面7号溝全景(南東から)

1．1区1面7号溝掘方全景(南西から)

2．2区1区画1面8号・9号溝全景(北西から)

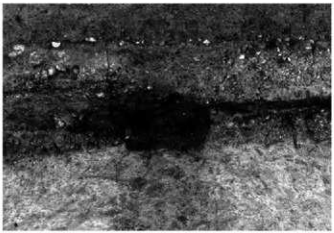
3．2区1区画1面8号・9号溝全景(北西から)

4．2区1区画1面8号溝土層断面A－A′（北西から）

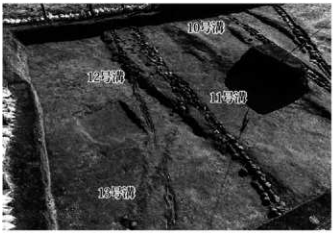
5．2区1区画1面8号溝(南東から)

6．2区1区画1面8号溝(南東から)

7．2区1区画1面8号溝(南東から)



1．2区1区画1面9号溝土層断面A-A′（北西から）



2．2区1区画1面10号～13号溝全景(北西から)

3．2区1区画1面10号～13号溝全景(南西から)

4．2区1区画1面10号溝土層断面A-A′（北西から）

5．2区1区画1面11号溝土層断面A-A′（西から）

6．2区1区画1面12号溝土層断面A-A′（北西から）

7．2区1区画1面13号溝土層断面A-A′（南東から）

8．2区1区画1面13号溝土層断面A-A′（南東から）

1．1区・2区2面全景(南から)

2．1区2面全景(上段)(北から)

1．1区２面全景(中段)(北から)

2．2区２面全景(南から)

1．2区１区画２面全景(北から)

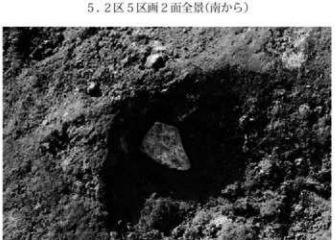
2．2区２区画２面全景(北から)

3．2区３区画２面全景(北から)

4．2区４区画２面全景(北から)

5．2区５区画２面全景(南から)

6．1区２面遺物出土状態(上段)(北東から)



7．1区２面遺物出土状態(上段)(南東から)

8．1区２面遺物出土状態(上段)(東から)

1．2区1区画2面遺物出土状態(西から)

2．2区1区画2面遺物出土状態(西から)

3．1区2面14号溝全景(南東から)

4．1区2面14号溝土層断面A-A′(南東から)

5．1区調査風景(南から)

1．2区２面２面15号溝全景(西から)

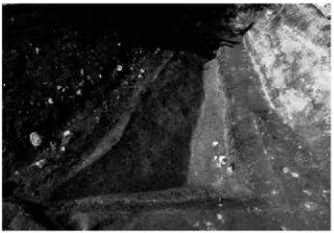
2．2区２面２面15号溝土層断面A-A′(西から)

3．1区２面16号溝全景(北東から)

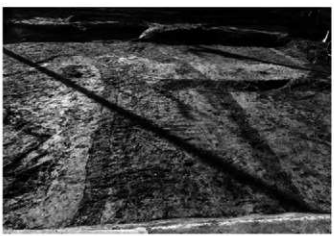
4．1区２面16号溝遺物出土状態(北西から)

5．1区３面全景(上段)(北から)

1．1区３面全景(上段)(西から)



2．1区３面下段確認状態(東から)



3．1区３面検出状態(上段)(西から)

4．1区３面遺物出土状態(上段)(北西から)

5．1区３面17号溝全景(北東から)

6．2区２区画３面全景(南から)

7．2区４区画３面全景(北から)

8．2区１区画４面全景(北から)

1．2区１区画４面調査風景(北西から)

2．2区２区画４面全景(北から)

3．2区５区画４面19号・20号溝全景(北から)

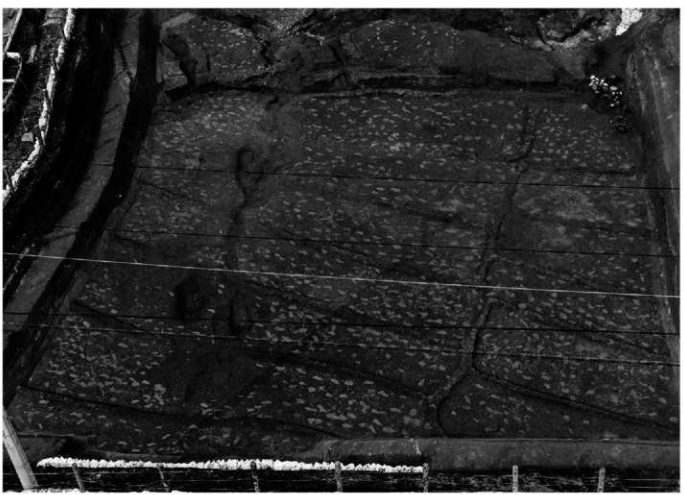
4．2区５区画20号溝土層断面A-A′(北から)

5．1区・2区５面全景(南から)

1．1区5面全景(北から)

2．1区5面全景(上段)(南から)

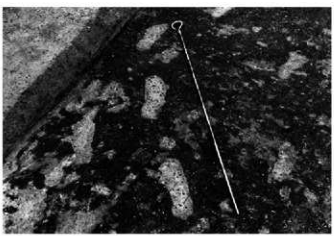
1．1区5面水田(上段)(南から)



2．1区5面水田(上段)(南から)

1．1区5面全景(中段)(北から)

2．1区5面足跡全景(上段)(東から)



3．1区5面足跡全景(上段)(東から)

4．1区5面遺物出土状態(上段)(北から)

5．1区5面木材検出状態(中段)(南西から)

6．2区1区画5面全景(北から)

7．2区1区画5面遺物出土状態(西から)

8．2区2区画5面全景(北から)

1．2区2区画5面全景(南から)

2．2区4区画5面全景(北から)

3．2区4区画5面全景(南から)

4．1区5面18号・21号～23号溝全景(南東から)

5．1区5面18号溝土層断面A-A′(北西から)

6．1区5面18号溝土層断面A-A′(北西から)

7．1区5面18号溝土層断面A-A′(北西から)

8．1区5面18号溝、橋状遺構、24号溝土層断面A-A′(西から)

1．1区5面18号溝、橋状遺構土層断面A-A′（西から）

2．1区5面18号溝、橋状遺構、24号溝土層断面A－A′（西から）

3．1区5面18号溝石列、橋状遺構土層断面A-A′（西から）

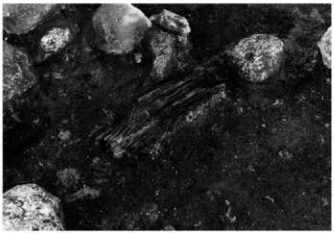
4．1区5面18号溝、橋状遺構掘方全景(西から)

5．1区5面18号溝、橋状遺構北側掘方(西から)

6．1区5面18号溝、橋状遺構南側掘方(西から)

7．1区5面橋状遺構検出状態(南西から)

8．1区5面橋状遺構検出状態(南東から)



1．1区5面橋状遺構木材検出状態(北西から)

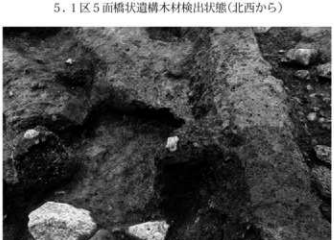
2．1区5面橋状遺構木材検出状態(北西から)

3．1区5面橋状遺構木材検出状態(南東から)

4．1区5面橋状遺構木材検出状態(南東から)

5．1区5面橋状遺構木材検出状態(北西から)

6．2区4区画5面18号溝全景(西から)

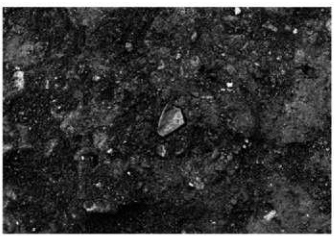


7．2区4区画5面18号溝遺物出土状態(北西から)

8．2区4区画5面18号溝遺物出土状態(北西から)

1．2区4区画5面18号溝遺物出土状態(西から)

2．2区4区画5面18号溝遺物出土状態(西から)

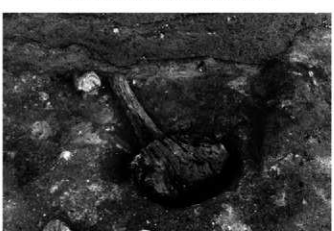


3．2区4区画5面18号溝遺物出土状態(西から)

4．1区5面24号溝遺物出土状態(北西から)

5．1区5面24号溝遺物出土状態(北西から)

6．1区5面24号溝遺物出土状態(南東から)



7．1区5面24号溝木材検出状態(北西から)

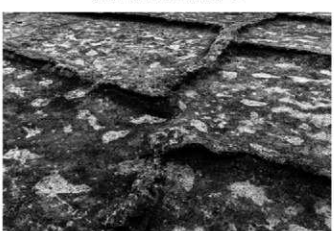
8．1区5面24号溝木材検出状態(南東から)

1．1区５面21号溝全景(南から)

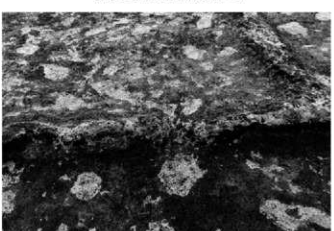
2．1区５面22号溝全景(南から)

3．1区５面水田全景(東から)

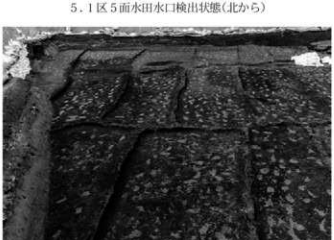
4．1区５面水田全景(東から)



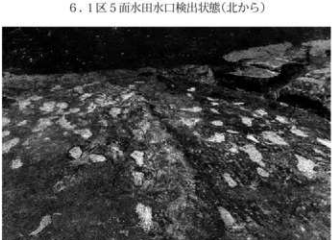
5．1区５面水田水口検出状態(北から)



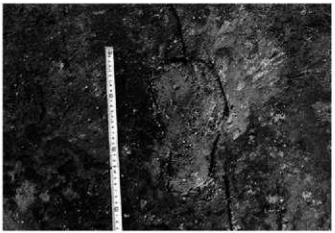
6．1区５面水田水口検出状態(北から)



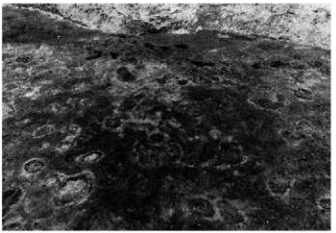
7．1区５面水田足跡検出状態(東から)



8．1区５面水田足跡検出状態(東から)

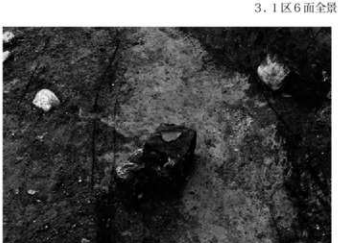


1．1区５面水田足跡検出状態(東から)

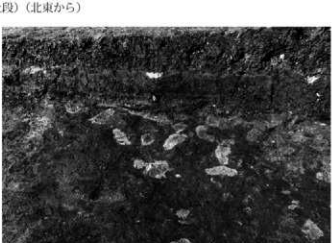


2．1区５面水田足跡検出状態(東から)

3．1区６面全景(上段)（北東から）



4．1区６面遺物出土状態(上段)（東から）



5．1区６面水田足跡検出状況(南東から)

1．1区６面25号溝全景(東から)

2．1区６面25号溝土層断面(南東から)

3．1区６面26号溝全景(北西から)

4．1区６面26号溝土層断面A-A′（北東から)

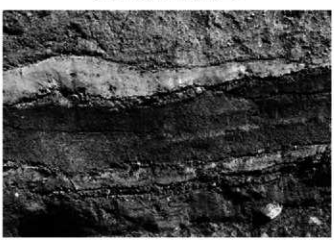
5．2区２区画６面全景(北から)

1．1区トレンチ水田面検出西壁土層断面(東から)

2．1区南壁土層断面(北から)

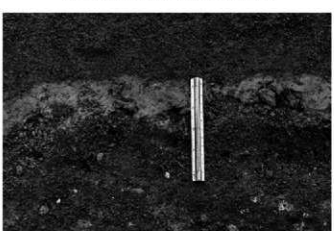
3．1区東壁土層断面(西から)

4．1区Hr-FA確認土層断面(中段)(西から)



5．1区Hr-FP確認土層断面(中段)(西から)

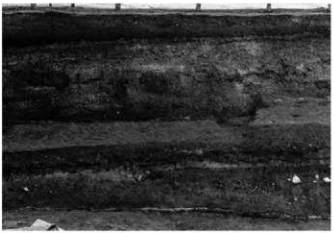
6．1区Hr-FP・Hr-FA検出状況(中段)(西から)



7．1区Hr-FP・Hr-FA検出状況(下段)(西から)

8．2区5区画調査地点5土層断面(北から)

1．1区調査地点10土層断面(西から)



2．1区調査地点15土層断面(南から)

3．1区最終確認(中段)(西から)

4．2区4区画調査地点17土層断面(東から)

5．2区2区画調査地点19土層断面(東から)

6．2区1区画調査地点20土層断面(東から)

7．2区1区画トレンチ全景(北から)

8．2区2区画調査風景(南から)

1面

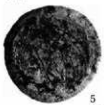
1

2

3

4

2面


5
16号溝

6

5面

7

8

9

6面

10

11(1/8)
24号溝

12(1/8)
24号溝

13(1/8)
24号溝

1面・2面・5面・6面出土遺物

報 告 書 抄 録

書名ふりがな	ありまにしだいせき
書　　名	有馬西田遺跡
副　書　名	(主)高崎渋川線バイパス(３期工区)社会資本総合整備(広域連携・新潟長野)事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	
シリーズ名	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	632
編 著 者 名	神谷佳明／友廣哲也／徳江秀夫
編 集 機 関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発 行 機 関	公益財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20171220
郵 便 番 号	〒377-8555
電 話 番 号	0279-52-2511
住　　所	群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2
遺跡名ふりがな	ありまにしだいせき
遺　跡　名	有馬西田遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんしぶかわしありま
遺跡所在地	群馬県渋川市有馬
市町村コード	10208
遺 跡 番 号	S0173
北緯(世界測地系)	362759
東経(世界測地系)	1385946
調 査 期 間	20160101－20160331
調 査 面 積	2767
調 査 原 因	道路建設
種　　別	生産
主 な 時 代	古墳／奈良／平安／中近世
遺 跡 概 要	古墳～奈良－溝7＋水田－土器＋木製品／奈良－溝2＋水田＋土器／奈良～平安－溝1＋水田／平安－溝4＋水田－土器／中近世－溝13＋井戸2＋土坑1＋土器
要　　約	本遺跡は榛名山東麓端下に位置している。土層の堆積状態から古墳時代以降、中近世に至るまでの間に火山災害・洪水等を複数回受けていることが明らかとなった。居住にかかわる遺構は検出されなかったが、洪水堆積層下から６面の水田が検出され、断続的ながら水田耕作が継続して行われていたことが明らかになった。

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書　第632集

有馬西田遺跡

（主）高崎渋川線バイパス（３期工区）社会資本総合整備
（広域連携・新潟長野）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成29(2017)年12月12日　印刷
平成29(2017)年12月20日　発行

編集・発行／公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555　群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2
電話(0279)52-2511(代表)
ホームページアドレス　http://www.gunmaibun.org/

印刷／第一印刷株式会社